

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第461集

めおと いし そで こ や  
**夫婦石袖高野遺跡発掘調査報告書**

遠野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査

岩手県遠野地方振興局土木部

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

めおと いし そで こ や

# 夫婦石袖高野遺跡発掘調査報告書

遠野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査



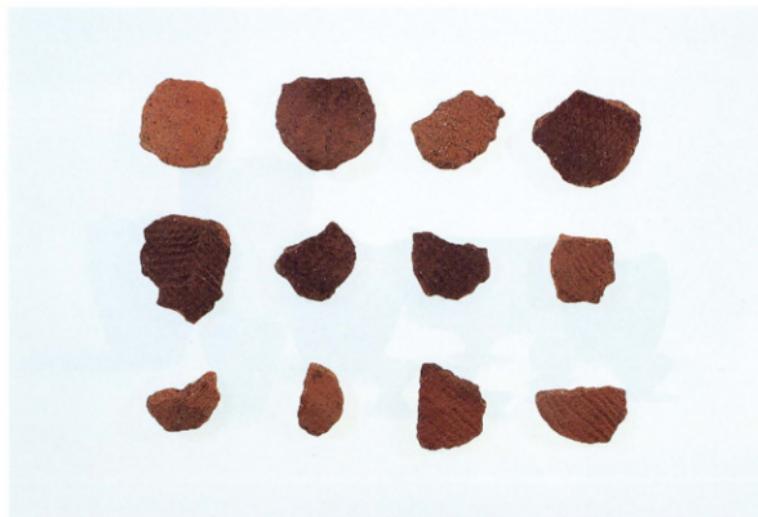
縄文時代早期中葉の土器



縄文時代後期初頭～前葉の土器



土偶



円盤状土製品

巻頭カラー 写真2

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれその土地とともににある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、遠野市の遠野第二ダム建設事業に関連して平成15年に発掘調査を実施した夫婦石袖高野遺跡の調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代後期初頭から前葉の遺物を中心に、縄文時代後期の土坑などが確認され、同時期の様相を考える上で貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時にその保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県遠野地方振興局上木部、遠野市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成16年11月

財團法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 合 田 武

## 例　　言

1. 本報告書は、岩手県遠野市遠野町第31地割字女男石16-1ほかに所在する大鱗石袖高野遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は「遠野第二ダム建設」事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会生涯学習文化課と岩手県遠野地方振興局土木部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の調査成果の概略は、平成15年度岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第455集「岩手県埋蔵文化財調査略報」等で公表したが、本書の内容を正式な報告とする。
4. 本遺跡の岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はME 55-1057、調査略号はMIS-03である。
5. 発掘調査期間、調査面積、調査担当者は以下のとおりである。

平成15年9月1日～11月4日／1,000m<sup>2</sup>／北村忠昭・水上明博
6. 室内整理期間及び室内整理担当者は以下のとおりである。

平成16年2月2日～3月31日／北村忠昭
7. 野外調査での遺構写真撮影は調査員、遺物写真撮影は当センター福上昭夫が担当した。
8. 本報告書の執筆は第1章を岩手県遠野地方振興局土木部、その他を北村忠昭が担当した。編集・校正は北村が担当した。
9. 出土遺物の鑑定・分析及び業務委託は次の機関に委託した。(敬称略)

石質鑑定	花崗岩研究会(代表 矢内桂三)
火山灰同定	株式会社 古環境研究所
基準点測量	株式会社 イチイ土木コンサルタント
10. 発掘調査や整理・報告書の作成は以下の方々に御教示・御協力をいただいた。(敬称略)

機関：遠野市教育委員会  
個人：小向裕明・佐藤浩彦(遠野市)、神原雄一郎(盛岡市)
11. 本報告書に掲載した地図等には、図中に図幅名とスケールを付した。
12. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡　例

### 遺構

1. 地図上で指している北方向は、真北である。

2. 遺構図版の縮尺は以下のとおりである。

住居状遺構の平面図・断面図…1/40、土坑類の平面図・断面図・各微細図・遺物分布図…1/50、焼土遺構・か跡の断面図・平面図・遺物分布図…1/25

3. 土層注記で使用した略号及び記号は以下のとおりである。

〔粘性・しまり〕 1：弱・疎 2：弱～中・疎～中 3：中 4：中～強・中～密 5：強・密

〔混入物等〕 △：黒色シルトブロック ▼：黒色シルト粒 ◆：黒褐色シルトブロック

●：暗褐色シルトブロック ○：褐色シルトブロック ▽：にぶい黄褐色シルトブロック

☆：黄褐色シルト粒 ※：地山ブロック ◎：焼土粒 ▲：炭化物粒 □：オレンジ色粒子

■：風化花崗岩粒 ◇：霰母 ★：石英 YBP：黄褐色バミス WP：乳白色バミス

4. 遺構の推定線は一点鎖線で表記した。また、壁面のオーバーハングにより、見えない下端及び中端は波線で表記した。

5. 層位は基本層位にローマ数字、各遺構覆土等にアラビア数字を使用した。

6. 上層色調の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。

7. 遺構図版中の「P」は土器を表している。

### 遺物

1. 遺物図版の縮尺は以下のとおりである。

早期の土器・小形の土器…1/2 (○)、大形の土器・文様帶の展開図…1/4 (※)、その他の縄文土器…1/3 (△)、土製品…2/3 (□)、石器…3/4 (☆)、石器以外の剥片石器…2/3 (□)、石核石器・砾塊石器…1/2 (○)、石製品…1/1 (○)

2. 磨石や敲石等の「砾石器」の使用部位の表現は機能毎に網掛け・スクリーントーンを使用している。

### 写真

1. 遺物写真的縮尺は基本的に遺物図版に準じているが、写真のみの掲載資料もあり、以下の記号を掲載番号の先頭に付することで、個々の縮尺の記載を省略している。

○…1/1、☆…3/4、□…2/3、◎…1/2、△…1/3、※…1/4

## 目 次

巻頭カラー写真 1

巻頭カラー写真 2

序

例言

凡例

報告書抄録

### <本文>

第Ⅰ章 調査に至る経過	1	第Ⅳ章 造構と造物	12
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	2	第1節 概要	12
第1節 遺跡の地理的環境	2	第2節 造構	13
(1) 遺跡の位置	2	(1) 住居状造構	13
(2) 遺跡周辺の地形と地質	2	(2) 土坑	14
(3) 基本層序	4	(3) 焼土造構・炉跡	26
第2節 遺跡の歴史的環境	5	第3節 造物	29
第Ⅲ章 野外調査と室内整理	8	(1) 繩文土器	29
第1節 調査経過	8	(2) 上製品	30
第2節 野外調査	8	(3) 焼成粘土塊	30
(1) グリッドの設定	8	(4) 石器	30
(2) 試掘・粗掘・造構検出	9	(5) 石製品	33
(3) 造構の名称	9	(6) 自然遺物	33
(4) 精査・実測・写真撮影	10	(7) 陶器器	33
(5) 遺物の取り上げ	10	(8) 銭貨	33
第3節 室内整理	10	第V章 まとめ	62
(1) 造構	10	附編 岩手県遠野市夫婦石袖高野遺跡の	
(2) 遺物	10	火山灰分析	63
(3) 写真図版	11		

### <表>

第1表 周辺の遺跡一覧	7	第8表 銭貨観察表	33
第2表 土坑観察表(1)	15	第9表 土器観察表(1)	58
第3表 土坑観察表(2)	16	第10表 上器観察表(2)	59
第4表 焼上造構・炉跡観察表	26	第11表 土製品観察表	60
第5表 グリッド別出土土器重量	29	第12表 焼成粘土塊観察表	60
第6表 石器組成表	33	第13表 石器・石製品観察	61
第7表 自然遺物観察表	33		

### <図版>

第1図 調査区域図	1	第4図 遺跡周辺の地形分類図	3
第2図 岩手県全図	2	第5図 基本層序柱状図	4
第3図 遺跡の位置	3	第6図 周辺の遺跡	6

第 7 図	グリッド設定図	8
第 8 図	トレンチ位置図	9
第 9 図	遺構配置図	12
第 10 図	住居状遺構	13
第 11 図	土坑 1	17
第 12 図	土坑 2	18
第 13 図	土坑 3	19
第 14 図	土坑 4	20
第 15 図	土坑 5	21
第 16 図	土坑 6	22
第 17 図	土坑 7	23
第 18 図	土坑 8	24
第 19 図	土坑 9	25
第 20 図	焼土遺構・炉跡 1	27
第 21 図	焼上遺構・炉跡 2	28
第 22 図	遺構内出土遺物（土器①）	34
第 23 図	遺構内出土遺物（土器②）	35
第 24 図	遺構内出土遺物（土器③）	36
第 25 図	遺構内出土遺物（土器④）	37
第 26 図	遺構内出土遺物（土器⑤）	38
第 27 図	遺構内出土遺物（土器⑥）	39
第 28 図	遺構内出土遺物（土器⑦）	40
第 29 図	遺構内出土遺物（土器⑧）	41
第 30 図	遺構内出土遺物（土器⑨）	42
第 31 図	遺構内出土遺物（土製品）	43
第 32 図	遺構内出土遺物（石器）	44
第 33 図	遺構外出土遺物（土器①）	45
第 34 図	遺構外出土遺物（土器②）	46
第 35 図	遺構外出土遺物（土器③）	47
第 36 図	遺構外出土遺物（土器④）	48
第 37 図	遺構外出土遺物（土器⑤）	49
第 38 図	遺構外出土遺物（土器⑥）	50
第 39 図	遺構外出土遺物（土器⑦）	51
第 40 図	遺構外出土遺物（土器⑧）	52
第 41 図	遺構外出土遺物（土器⑨）	53
第 42 図	遺構外出土遺物（土器⑩）	54
第 43 図	遺構外出土遺物（土器⑪）	55
第 44 図	遺構外出土遺物（土製品）	56
第 45 図	遺構外出土遺物（石器）	57

## <写真図版>

写真図版 1	空撮・刈り払い	66
写真図版 2	現況・基本層序	67
写真図版 3	住居状遺構	68
写真図版 4	土坑（1）	69
写真図版 5	土坑（2）	70
写真図版 6	土坑（3）	71
写真図版 7	土坑（4）	72
写真図版 8	土坑（5）	73
写真図版 9	土坑（6）	74
写真図版 10	土坑（7）	75
写真図版 11	土坑（8）	76
写真図版 12	土坑（9）	77
写真図版 13	土坑（10）	78
写真図版 14	土坑（11）	79
写真図版 15	土坑（12）	80
写真図版 16	焼上遺構・炉跡（1）	81
写真図版 17	焼土遺構・炉跡（2）	82
写真図版 18	遺構内出土遺物（土器①）	83
写真図版 19	遺構内出土遺物（土器②）	84
写真図版 20	遺構内出土遺物（土器③）	85
写真図版 21	遺構内出土遺物（土器④）	86
写真図版 22	遺構内出土遺物（土器⑤）	87
写真図版 23	遺構内出土遺物（土器⑥）	88
写真図版 24	遺構内出土遺物 (土製品・焼成粘土塊)	89
写真図版 25	遺構内出土遺物（石器①）	90
写真図版 26	遺構内出土遺物（石器②）	91
写真図版 27	遺構内出土遺物 (石器③・自然遺物)	92
写真図版 28	遺構外出土遺物（土器①）	93
写真図版 29	遺構外出土遺物（土器②）	94
写真図版 30	遺構外出土遺物（土器③）	95
写真図版 31	遺構外出土遺物（土器④）	96
写真図版 32	遺構外出土遺物（土器⑤）	97
写真図版 33	遺構外出土遺物（土器⑥）	98
写真図版 34	遺構外出土遺物（土器⑦）	99
写真図版 35	遺構外出土遺物（土器⑧） 土製品・焼成粘土塊	100
写真図版 36	遺構外出土遺物（石器①）	101
写真図版 37	遺構外出土遺物（石器②）	102
写真図版 38	遺構外出土遺物（石器③）	103
写真図版 39	遺構外出土遺物 (石器④・石製品)	104
写真図版 40	遺構外出土遺物 (自然遺物・陶磁器・錢貨)	105

## 第Ⅰ章 調査にいたる経過

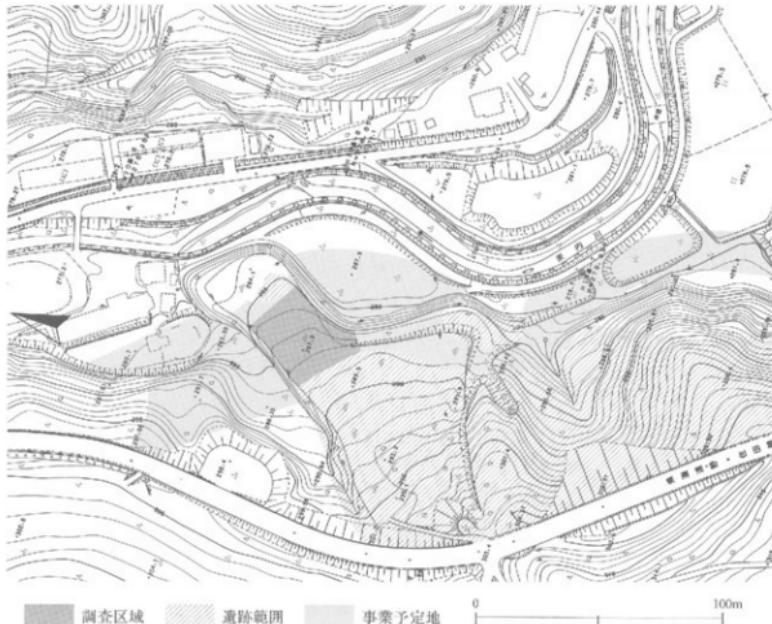
夫婦石袖高野（めおといしそでこや）遺跡は、「遠野第二生活貯水池建設事業」の実施に伴い、その事業区域内に存在することから、発掘調査を実施することになったものである。

遠野第二生活貯水池建設事業は、猪ヶ石川上流域の来内川筋、治水対策事業により昭和32年6月に完成した遠野ダム（県営補助ダム第一号）の下流部に位置し、昭和56年8月の台風15号により来内川が氾濫、遠野市街地で多くの家屋が浸水被害を受けたことから、洪水から貴重な資産を守ることなどを目的とした遠野第二ダム（仮称）を建設するものである。

当事業は平成2年4月に事業の建設採択を受け、調査・設計を行い、平成12年4月には遠野第二ダム地権者会が発足し、翌13年11月に補償基準の妥結を得て、用地解決を図りながら工事着手している。

夫婦石袖高野遺跡は、事業区域上流の機能補償林道予定地であることから、平成12年9月に試掘調査を行ない文化財が確認された。発掘調査は、岩手県教育委員会と遠野地方振興局の協議により財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業として平成15年9月に着手し10月までの2ヶ月で現地調査を終了している。

（岩手県遠野地方振興局土木部）



第1図 調査区域図

## 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

## 第1節 遺跡の地理的環境

## (1) 遺跡の位置

夫婦石袖高野遺跡の所在する遠野市は、岩手県の南東部に位置し、東西約33.5km、南北約38.2km、総面積660.38km<sup>2</sup>である。北は下閉伊郡川井村、東は上閉伊郡大槌町・釜石市、南は氣仙郡住田町、西は上閉伊郡宮守村・江刺市・和賀郡東和町・神賀郡大迫町の8市町村と接している(第2図)。古来より内陸部と沿岸部を結ぶ中核都市である。本遺跡は、遠野市の南部、JR釜石線遠野駅から南に約2km離れた遠野市遠野町第31地割地内に所在し、市内を流れる一級河川の北上川水系の猿ヶ石川の支流である来内川の左岸、舌状に張り出した標高285~310mの山地の緩斜面上に立地する。国土地理院発行の1:25,000地形図「遠野」NJ-54-14-5-3(一関5号-3)の図幅に含まれ、北緯39度18分51秒、東経141度31分58秒(世界測地系)付近にあたる(第3図)。現況は原野と山林である。



第2図 岩手県全図

## (2) 遺跡周辺の地形と地質

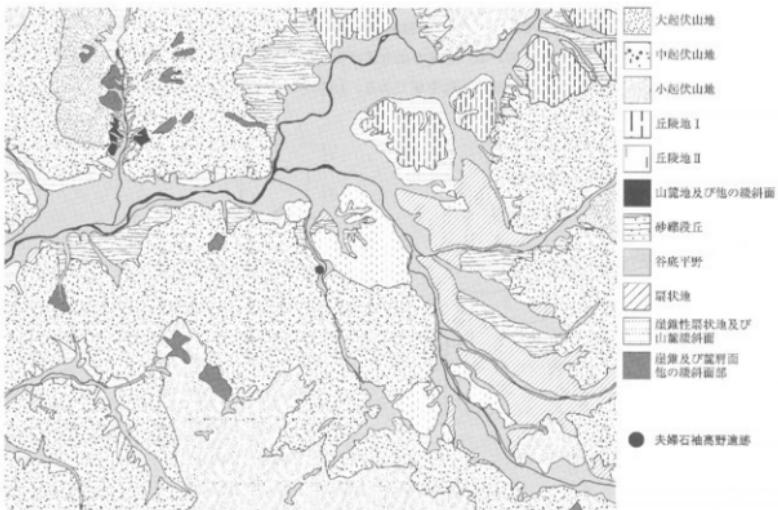
遠野市は、県内を南北にまたがる北上山地中南部に開けた遠野盆地に位置し、周囲を北上山系最高峰である早池峰山(1914.0m)をはじめ、薬師岳(1644.9m)、大黒森(1079.0m)、一つ石山(1058.3m)、白見山(1172.6m)、六角牛山(1294.0m)、大峰山(1147.4m)、大開山(1139.2m)、高清水山(1013.9m)、石上山(1038.1m)、大麻部山(1043.6m)、土倉山(1084.3m)、白森山(1339.2m)、小白森(1350.4m)等の1000m級の山々に囲まれている。北上山地は開析隆起準平原で、山地に続く丘陵縁辺部に小規模な段丘と冲積地が見られる。遠野盆地は、薬師岳に源を発する猿ヶ石川とその支流である小烏瀬川・早瀬川・米内川、さらにその支流である河内川・猫川等が北上山地の一部を開析して形成した北上山地内で最も広大な



夫婦石袖高野遺跡

(遠野 1/25000×50%)

第3図 遺跡の位置



第4図 遺跡周辺の地形分類図

谷底平野である。これらの河川流域には肥沃な土壤を背景に広大な耕地が拓けている。遠野市中央部を流れる猿ヶ石川は西流し、花巻市内で北上川と合流する。

この盆地の主体は中生代白亜紀の「遠野花崗岩体」と呼ばれる岩体で占められるが、盆地の縁辺部では中・古生界の粘板岩や輝緑凝灰岩、石灰岩等も分布する。古生層や中生層は全体的に硬質であるが、主体となる花崗岩類は深層風化が進み、マサ化している。表層では、組織を残すものの、非常にもろい状態である。特に早瀬川流域は、開析が進んでおり、その傾向が著しい。

今回発掘調査を行った夫婦石袖高野遺跡は来内川の左岸に広がる中起伏山地の縁辺部に位置し、調査区は来内川に向かって舌状に張り出した部分にある。調査区周辺と来内川との比高差は約10mである。遺跡の上流約1kmには昭和32年に完成した来内ダム（遠野ダム）がある。

### （3）基本層序（第5図、写真図版2）

調査区は丘陵の緩斜面地に位置しており、斜面下方程、基本的には層厚が増している。斜面上方の4C-19グリッドと斜面下方の3D-1グリッドの層序を略図化した。調査区の基本層序は以下のとおりである。

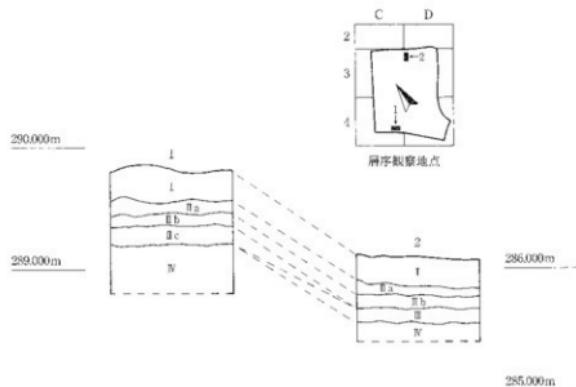
I層 黒色土。表土。斜面下方にいく程厚く堆積している傾向が見える。層厚20~30cm。

II層 黒色土～黒褐色土。本来の遺構検出面。3層に細分される。

II a層 黒色土～黒褐色土。調査区のほぼ全域で確認される。焼土遺構・灰跡、土坑の一部が本層で確認されている。主に4Cグリッドで、ブロック状の明黄褐色バミスが観察される。試料を調査員が採取し、その分析を外部に委託した。分析結果の詳細は附編を参照して頂きたいが、このバミスは十和田中源浮石（To-Cu）との結果が出された。層厚5~15cm。

II b層 黒色土～黒褐色土。調査区の西側を中心に確認される。3C-9・10・13～15では非常に厚く堆積している。II a層と比較すると風化した花崗岩粒を多量に含むことから分離した。相対的にはII a層の下位で見られるが、前後関係等詳細は不明である。本層でもII a層と同様、焼土遺構や土坑が確認されている。遺物の出土量はII a層より多い傾向にある。層厚0~20cm。

II c層 黒褐色土。II層とIII層の漸移的な層である。土坑の一部が確認されている。遺物はほとんど出



第5図 基本層序柱状図

土していない。層厚0～10cm。

- Ⅲ層 暗茶褐色土。遺構の最終確認面。調査区のほぼ全域で確認される。大半の土坑がⅡ層で確認できず、本層で確認されている。層厚5～10cm。
- Ⅳ層 黄褐色土。今回の調査ではトレンチ・遺構の壁面・底面等で確認されただけで、面的な広がりは確認していない。そのため、層厚は不明である。3C・18グリッド周辺では非常に浅いところで確認されている。また、この部分では早期の土器（無文）が出土している。
- V層 琉層。風化した花崗岩の琉層である。大小様々であるが、大きいものでは直径100cm程になる。層厚不明。

ほとんどの遺構がⅣ層を床面及び底面にしており、これより上位の面を底面とする遺構は51号土坑や焼土遺構等わずかである。遺物はI層からIV層まで出土するが、ピークはⅡa・Ⅱb層である。

Ⅱa層中でブロック状の明黄褐色バミスを検出した。確認できた地域は4Cグリッド周辺に限られる。分析の結果、十和田中振浮石と判断されたが、同一層準の下層から後期の土器が出土しており、二次堆積であることは決定的である。斜面下方の3C・3Dグリッドでは同質のバミスは全く検出されないことから、斜面上方から調査区へ雨水等によって流れ込んだものとは考えにくい。どのような経緯で調査区内で検出されるに至ったか不明であるが、今回の調査区の南西側に広がる平坦面で同質の火山灰が確認される可能性が高いと考えられる。

## 第2節 遺跡の歴史的環境

遠野市に所在する遺跡は岩手県教育委員会が作成した「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧（以後遺跡台帳）」(2000)によると321箇所の遺跡が登録されている。種別毎に見ていくと、散布地が全体の7割を占め、その6割弱が縄文時代に属する遺跡である。その他の時代は弥生時代が4遺跡、古代の遺跡が48遺跡、中世の遺跡が4遺跡で、それぞれ2遺跡、15遺跡、2遺跡が縄文時代との複合である。散布地以外では城館跡が2割弱を占めている。集落跡は1割にも満たず、27遺跡で、そのうち19遺跡が縄文時代である。前述以外では洞穴3、寺院跡など3、一里塚2、製鉄跡1である。

これらの遺跡の多くは猿ヶ石川とその支流の河川によって形成された地形に沿って立地している。古代の遺跡が猿ヶ石川流域の冲積地に多く見られるのに対して、縄文時代の遺跡は丘陵地、扇状地の段丘や濱高地等に集中している。城館跡は盆地をめぐる丘陵に張り出した裾野に立地している。

以下、時期毎に概観する。

旧石器時代 遺跡台帳に登録されている遺跡は睡鹿I遺跡(第6図54)のみであるが、当センターが平成12年に発掘調査を行った権現前遺跡(同53)では後期旧石器時代のナイフ形石器が出土しており、遺跡周間にても周知されていない遺跡が所在する可能性が考えられる。

縄文時代 156遺跡が登録されている。時期は早期から晚期までみられるが、後・晚期が比較的多い。早・前期の遺跡は猿ヶ石川右岸の新里地区と支流の来内川左岸の楊洞地区に集中して分布する。中期は猿ヶ石川の支流渺小沢川流域や猿ヶ石川上流域の附馬牛地区に分布がみられる。後・晚期になると附馬牛地区や猿ヶ石川の支流早瀬川流域の板沢・平倉地区や小島瀬川流域の筋内地区、鷹島屋川流域の太田地区などに分布域が広がっていく。近年発掘調査事例が増加しているものの、時代を通じて不明な部分が多い。当該期の発掘調査が行われた遺跡には寒風遺跡(古代・近世と複合、昭和15年)、寒風I遺跡(第6図12、平成8年)、



(遠野・人首・土淵・大迫 1/50000×85%)

第6図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	性質	出土地	出土地
16	赤堀山古墳群	祭祀	○(1) 大字赤堀山	
2	御前山古墳	祭祀	○(1) 大字御前山	
3	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
4	人形石	祭祀	○(1) 大字高尾	
5	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
6	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
7	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
8	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
9	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
10	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
11	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
12	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
13	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
14	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
15	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
16	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
17	御前山跡地	祭祀	○(1) 大字御前山	
18	新田古跡	祭祀	○(1) 大字御前山	
19	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
20	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
21	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
22	下原山	祭祀	○(1) 下原山ノ上	
23	大原	祭祀	○(1) 大原ノ上	
24	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
25	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
26	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
27	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
28	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
29	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
30	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
31	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
32	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
33	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
34	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
35	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
36	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
37	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
38	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
39	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
40	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
41	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
42	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
43	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
44	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
45	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
46	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
47	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
48	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
49	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
50	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
51	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
52	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
53	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
54	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
55	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
56	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
57	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
58	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
59	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
60	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
61	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
62	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
63	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
64	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
65	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
66	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
67	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
68	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
69	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
70	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
71	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
72	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
73	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
74	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
75	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	
76	御前山	祭祀	○(1) 大字御前山	

## 【参考文献】

著 者：岩手県北上山系開発調査室 1971「北上山系開発地域 土地分類基本調査 速野」

著 者：岩手県教育委員会 2000「岩手県郷土文化財宝蔵地図」

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2004「九重沢遺跡発掘調査報告書 速野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査」岩垣文調査報告書第435集

2004「桶洞Ⅱ遺跡発掘調査報告書 速野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査」岩垣文調査報告書第436集

2004「平合賀音遺跡発掘調査報告書」県営ほたる橋川左岸地区工事関連調査発掘調査」岩垣文調査報告書第448集

甲子遺跡（近世と複合、平成9年）、新田II遺跡（継続新田遺跡、平成10～12年）、権現前遺跡（同53、平成12年）、柄洞II遺跡（同2、平成14年）、九重沢遺跡（同4、平成14年）等がある。

弥生時代 登録されている遺跡は4遺跡と少ない。4遺跡とも散布地であり、集落の存在は知られていない。早瀬川流域の平食地区やその支流の猫川流域の佐比内地区等に見られる。当該期の発掘調査が行われた遺跡には宇南田I遺跡（平成12年）、平倉觀音遺跡（第6図72、平成14年）等がある。

古代 59遺跡が登録されている。そのうち約4割の24遺跡が縄文時代や中世などとの複合遺跡である。猿ヶケ川流域の沖積地に位置する松崎地区や新里地区に分布が集中する。当該期の発掘調査が行われた遺跡には高瀬I遺跡（縄文時代・近世と複合、昭和63年・平成元年）、蓬田遺跡（縄文時代と複合、昭和63年）、高瀬II遺跡（縄文時代と複合、平成元年）、本宿（平成3・4年）等がある。

中世 47遺跡が登録され、その多くが城館跡である。松崎地区や土淵地区の丘陵稟野や小友地区に分布の集中がみられる。発掘調査が行われた遺跡には篠館跡（中世、平成10・11年）等がある。

遠野盆地は、縄文時代以前は不明であるものの、古くは縄文時代早期から人類活動が活発になされていた地域と考えられる。

## 【引用・参考文献】

岩手県企画部北上山系開発調査室 1971「北上山系開発地域 土地分類基本調査 速野」

岩手県教育委員会 2000「岩手県郷土文化財宝蔵地図」

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2004「九重沢遺跡発掘調査報告書 速野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査」岩垣文調査報告書第435集

2004「桶洞Ⅱ遺跡発掘調査報告書 速野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査」岩垣文調査報告書第436集

2004「平合賀音遺跡発掘調査報告書」県営ほたる橋川左岸地区工事関連調査発掘調査」岩垣文調査報告書第448集

遠野市教育委員会

1991「蓬田遺跡 県営測量整備事業松崎地区関連遺跡発掘調査」岩手県蓬田市埋蔵文化財調査報告書第3集

2002「新田II遺跡」遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集

## 第Ⅲ章 野外調査と室内整理

### 第1節 調査経過

野外調査は9月1日(月)に器材を搬入し、開始する。2日(火)遠野地方振興局土木部及川係長、及川技師が調査範囲確認のため来跡。同日、岩手県教育委員会生涯学習文化課によるトレーニングの確認を行うとともに、それに直交するトレーニングを6本設置して試掘を開始。8日(月)遠野地方振興局土木部及川係長、及川技師騒音測定のため来跡。同日、試掘の結果をもとに重機による表土掘削を開始(9時まで)。10日(水)株式会社イチイ土木コンサルタントによる基準点設置(11時まで)。10月30日(木)終了確認実施。31日(金)埋め戻しを行う。11月4日(火)撤収作業完了し、調査終了。

室内整理は2月2日(月)整理作業員4名で作業開始。2月第1週目で遺構内の接合を終了。2週目から遺構外の接合と掲載遺物の選別を行う。3月上旬に遺構に関する図版・写真団版終了。同時に遺物の実測と図版作成、遺物写真撮影を開始する。3月31日(水)に遺物・各箇面類の収納を行い、整理作業を終了した。

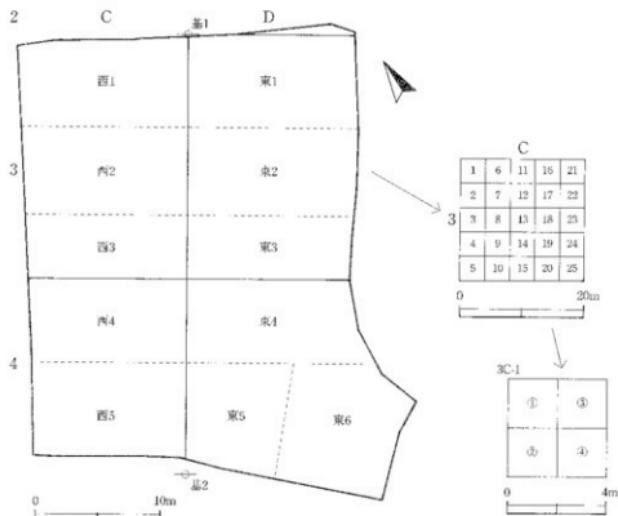
### 第2節 野外調査

#### (1) グリッドの設定(第7図)

グリッドの設定は、遺跡の地形に合わせることを念頭におき、基準点1と基準点2を敷設した。

基準点1 X = -75,890.078 Y = 60,335.687

基準点2 X = -75,920.170 Y = 60,315.928 (世界測地系)



第7図 グリッド設定図

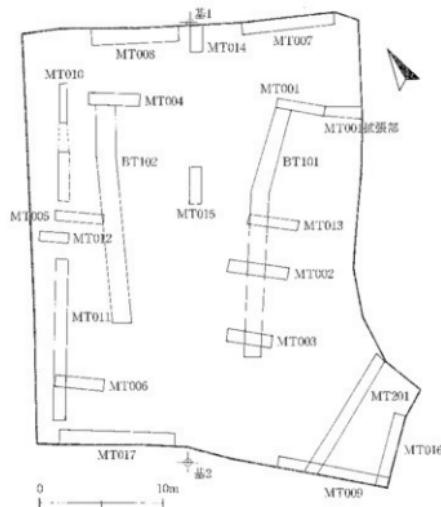
この2点を結んだ線を基準線とし、これに直交・平行する線で遺跡全体を網羅するように $20 \times 20\text{m}$ を1区画とした大グリッドを設定した。グリッドの名称は、西から東へA・B・C・D、北から南へ1・2・3・4として、「3C」のように表記している。さらにこの大グリッドを $4 \times 4\text{m}$ の中グリッドで25分割した。名称は北西から南東へ1・2……25となるようにし、「3C-25」のように表記している。また、中グリッドは必要に応じて $2 \times 2\text{m}$ の小グリッドで4分割した。名称は北西から南西へ①・②・③・④とした。各グリッドの北西隅の交点にはグリッド名を表記した杭を設置した。なお、今回の調査区は主に3C・3D・4C・4Dグリッドに限定されており、各種図面は調査区のみ表記している。

### (2) 試掘・粗掘・遺構検出

調査区域の植物撤去後、岩手県教育委員会生涯学習文化課による2本のトレンチ(BT101・102:第8国)の確認を行うと共に、図面上から判断して、これらに直交すると考えられる位置に6本のトレンチ(MT001~006:同)を設定して、トレンチの確認作業と試掘を開始した。その後、調査区層序を確認するために、調査区の境を中心に大小10本のトレンチ(MT007~016:同)を設定した。その結果、前述したように層序が確認され、重機と人力を併用して表土の除去を行った。表土の除去が終了した部分から順次、遺構の検出を行った。

### (3) 遺構の名称

検出された遺構は、遺構の種別に関係なく、1号から番号を付していった。そのため、精査の結果、欠番となった遺構が存在するが、名称変更せずにそのまま使用した。



第8図 トレンチ位置図

#### (4) 精査・実測・写真撮影

検出した遺構は径が2m以上のは4分法、2m未満のものは2分法を原則として用いた。掘削の際に、まずは、上層観察用に設定したベルトに従ってサブトレーナーを設定し、覆土の堆積状況を確認した。その後、層位毎に、ベルト部分を残して、覆土の除去を行った。

検出された遺構の平面実測は主にトータル・ステーションを使用し、㈱シン技術コンサルの「遺跡管理システム2000」にデータを蓄積すると同時に、データの出力を行い、図の点検・修正を行った。実測図の縮尺は1/20を基本とし、焼土遺構等1/10も併用している。断面図の縮尺も平面図と同様である。

写真撮影は検出状況、覆土断面、完掘状況、遺物出土状況など必要に応じて行った。モノクローム写真には35mmカメラと中判(6×7cm)カメラ、カラースライド写真には35mmカメラを使用して撮影を行っている。また、撮影補助用として、デジタルカメラも使用している。撮影時には撮影状況を記載した「撮影カード」を事前に写し、その後対象遺構・遺物の撮影を行うことによって、整理時の煩雑化を避けた。

#### (5) 遺物の取り上げ

遺構内の遺物については、覆土の堆積状況を確認後、層位毎に取り上げるよう努めたが、徹底していない。覆土内、底面出土等の一括遺物の一部については微細図や座標データの記録を取ることで出土状況の記録を行っている。遺構外の遺物は基準点設置以前には溝柵区を東西に分け、さらにそれぞれ5~6分割(東1~東6、西1~西5:第7図参照)した場所毎に取り上げを行い、設置後は、中グリッド単位、層位毎に取り上げを行ったが、これも徹底していない。なお、縄文時代早期の土器や一括遺物など、一部の出土遺物は実測、座標データの記録を行っている。

### 第3節 室内整理

#### (1) 遺構

本遺跡で検出された遺構は縄文時代の住居状遺構、土坑、焼土遺構・か跡である。土坑の一部には直径が50cm前後の柱穴状の土坑も存在するが、単独で存在しているため、土坑に含めて報告する。掲載の順序は住居状遺構→土坑→焼土遺構・か跡である。遺構配置図は1/20の第2原図を基に、1/200の縮尺図を作成し、仕上がり1/300で掲載した。

本文や遺構の一覧表に掲載した計測値は以下のとおりである。

①主軸方向：基本的には平面形が楕円形基調の場合は長軸方向、方形基調の場合は長辺方向である。

②長径・短径：長径は長軸方向の最大距離、短径は長径に直交する軸で最大距離を計測した。

③深さ：上端で最も高い部分と底面の比高差を計測した。

#### (2) 遺物

土器の整理 土器は取り上げてきた袋毎に4桁の番号を付し、台帳を作成した。この作業と同時に袋毎に重量(g 単位: 少数第1位を四捨五入)を計測し、台帳に記載した。なお、収納する際に、掲載されない3×3cm以上の土器片の点数を計上した。これらの出土点数と重量はグリッド・層位毎に集計した。

注記作業は2ヶ月という限られた期間内での整理作業であったため、遺物全点には行っていない。土器は、接合作業中に、①接合が進んで形の把握ができるもの、②口縁部資料及び底部資料、③①・②以外で掲載分としたもの、に限って行った。基本的には遺跡の略号「M TS - 03」と袋毎の4桁番号「0001」等を注記

するという方法をとった。また、同一袋内で接合する資料には一番大きい土器片に前述の注記を行うと同時に「○・△・□」等の記号を付し、その他の接合した破片資料にはその記号のみを注記するという方法を用いて、作業の効率化・簡略化を図った。

接合作業は遺構内出土土器→遺構外出土土器(3C→4C→3D→4D)の順で行った。遺構内出土土器はできる限り隣接する遺構やグリッドとの接合作業を試みたが、時間的な制約により、十分には行えていない。各段階の接合作業が終了した時点で、掲載遺物の1次選別を行い、整理番号を付した。その番号は次のとおりである。遺構内の立体土器(口径もしくは底径が1.3以上復元できた土器):1~、遺構外の立体土器:50~、遺構内の破片土器:101~、遺構外の破片土器:501~。報告書掲載時の掲載番号は、遺構内は1から、遺構外は201から使用している。この段階では選別した点数が多いため、2次選別を行って、特徴の類似しているものは省略する等の作業を行った。2次選別後、実測・拓影図作成作業に移った。土器の実測は外形線と拓本では表現しきれない隆帯や突起等にのみ行い、その他は拓本を採用して作業時間の軽減化を図った。観察表中では各項目で省略した名称を用いており、末尾に示した。

土製品の整理 上製品は1点毎袋に遺跡名、取り上げ年月日、出土地点、出土層位を記載して入れ、注記は行っていない。掲載番号は遺構内→遺構外の順に501から使用している。

石器・石製品の整理 石器・石製品は1点毎、整理番号を付して台帳に登録した。整理番号は4桁で表記し、遺構内は1001から、遺構外は2001から番号を付している。登録作業後、計測(小数点第3位を四捨五入し、第2位まで記載)、器種の認定、掲載遺物の選別、石質鑑定を行い、実測作業、トレース、図版作成と進めた。掲載番号は、遺構内は601から、遺構外は701から使用している。

実測は器種毎に実測面の選択を行い、すべて原寸で図化を行った。いわゆる「礫石器」の作業部位の表現は凡例に示したように機能毎に網掛・スクリーントーンを使い分けて行っている。

その他の出土遺物の整理 上記以外の出土遺物は粘土焼成塊、貝殻、獸骨、炭化穀実、陶磁器、錢貨がある。いずれも1点毎に整理番号を付して台帳に登録した。整理番号は粘土焼成塊が3001~、貝殻・獸骨が4001~、炭化穀実が4101~、陶磁器が5001~、錢貨が6001~である。

掲載した遺物の縮尺は各図版にスケールを付したので参照して頂きたい。

### (3) 写真図版

野外調査時に撮影した遺構などの写真と室内整理で撮影した遺物写真、当館蔵文化財センターが保管している空中写真で図版を作成した。写真図版に掲載している遺物の掲載番号は本文、観察表及び図版の掲載番号と一致している。また、遺構の断面写真は基本的に図版の断面と同じ方向から撮影したものである。

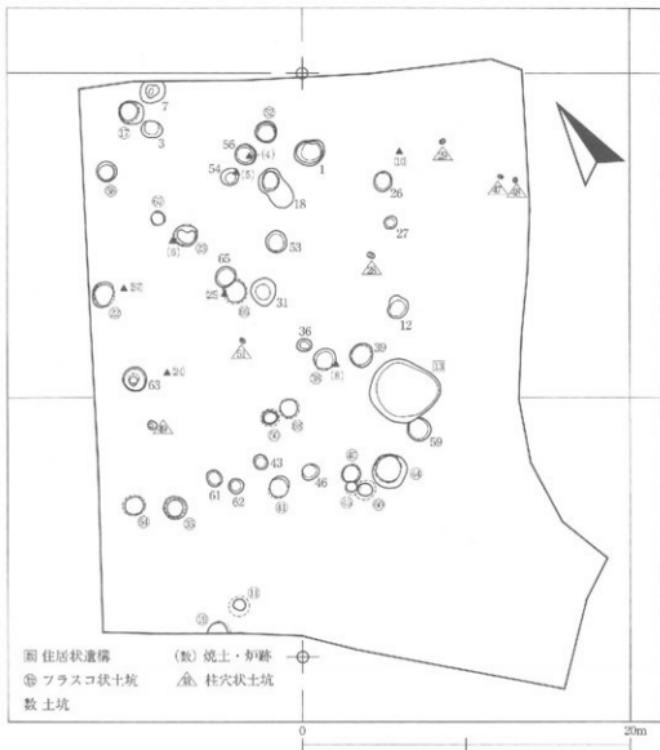
遺物の写真撮影は基本的に次の基準で行った。縄文土器は図化したもの、第2次選別で採用し図化できなかったもののうち、状態の良好な資料及び遺物量の少ない遺構から出土した小破片資料、石器は図化したもの、図化できなかったトゥール類及びその他の代表的なもの、土製品、石製品、粘土焼成塊、貝殻・獸骨、錢貨は全資料、炭化穀実、陶磁器は代表的なもの。ただし、紙面の都合上、撮影した遺物全てを掲載しているわけではない。

## 第IV章 遺構と遺物

## 第1節 概要

野外調査は平成15年9月1日から11月4日の約2箇月間行い、住居状遺構1棟、土坑45基、焼土遺構6基、炉跡2基を検出した。遺構の分布は調査区の北西側（斜面下方：3Cグリッド・4Cグリッド北側・4Dグリッド北西側）に密になり、南東側（斜面上方：4Dグリッド）は疎になる傾向がみられる。遺跡の範囲から概観すると、山地縁辺の緩斜面末端部に貯蔵穴を中心とした土坑類が構築されていることとなる。今回の発掘調査では堅穴住居跡は1棟も検出されなかったが、堅穴住居跡を中心とする、集落の中心部はさらに斜面上方の広い平坦面に広がると考えられる。

遺物は縄文土器（早期中葉～後期前葉：後期初頭～前葉中心）、土製品（土偶、円盤状土製品）、石器（石



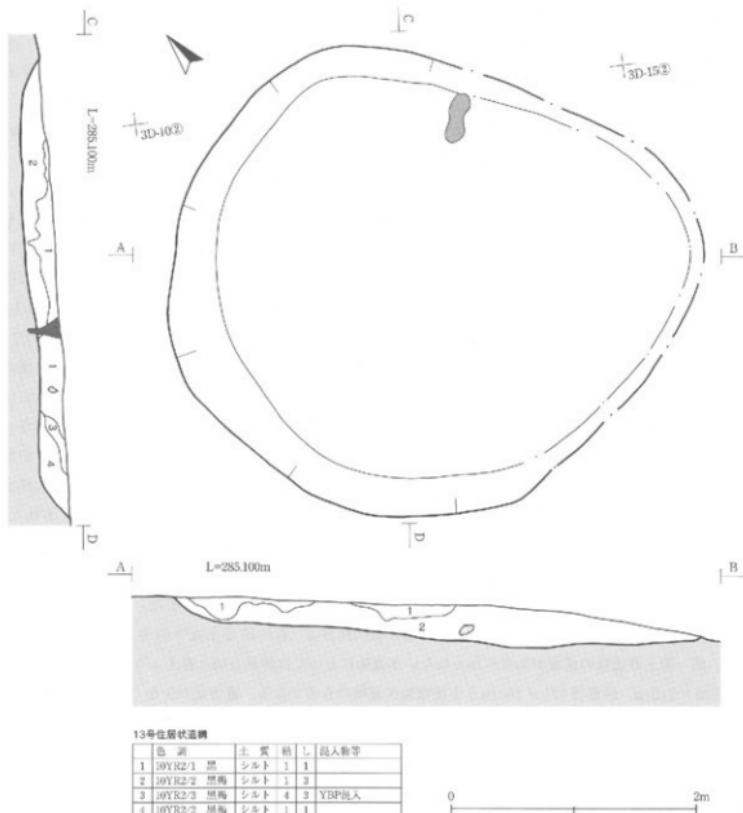
第9図 遺構配置図

鎌・錐形石器・石匙・削器・搔器・篦状石器・楔形石器・調整痕のある剥片・微細剥離痕のある剥片・剥片・碎片・石核・原石・磨製石斧・磨石・凹石・敲石・素材砾・礫)、石製品、焼成粘土塊、陶器、磁器、錢貨、自然遺物等が出土している。出土量については第3表～第6表を参照して頂きたい。遺物は第3節で、遺構内・遺構外出土に関係なく、一括して記載している。

## 第2節 遺構

### (1) 住居状遺構

形状は堅穴住居に似るが炉や規則的な柱穴の配置が見られない遺構である。1棟を確認した。



第10図 住居状遺構

## 13号住居状遺構

遺構（第10図、写真図版3）3D-10・4D-6グリッドに位置し、IIa層上面で黒色シルトの円形プランが検出された。本遺構は59号土坑と重複しているが、上端の極一部の重複であるため、新旧関係は不明である。南東側が後世の掘削によって失われているため判然としないが、確認された部分から判断すると、規模は長径440cm、短径395cm、平面形は円形もしくは梢円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは最も深い部分で36.0cmである。覆土は4層に分層され、II層起源の黒褐色シルトを主体とする。堆積はレンズ状を呈し、自然堆積と考えられる。壁面を確認できたのは西側の約1/2で、底面からゆるやかに立ち上がる。底面は東側に若干傾斜しており、ゆるやかな凸凹がみられる。貼り床は確認されなかった。東側の壁際で焼土を1基検出した。40cm×17cmの範囲に非常に薄い焼土層が形成されている。柱穴や炉は検出されなかった。

遺物（1～8・601～605第22・32図、写真図版18・25）縄文土器、石器、蝶が出土したが、覆土下位から床面にかけてから出土した1を除き、ほとんどが覆土中からの出土である。縄文土器は49点が出土し、そのうち、8点を掲載した。すべて後期初頭から前葉の土器で、単節縦縄文のものが多い。石器は石點1点（601）、剥片2点（602・603）、碎片1点（604）、蝶2点が出土した。

時期 床面出土の遺物が少ないため断定はできないが、縄文時代後期初頭から前葉に属すると考えられる。

## （2）土坑

調査区のほぼ全域から45基の土坑が検出された。前述のとおり、土坑、フ拉斯コ状土坑、柱穴状土坑を一括して扱う。土坑は調査区の南側を除く区域から検出されたが、中でも北側の3Cグリッドに密集している。これらの土坑の所属時期は遺物が少ないものやまったくないものもみられ、断定しがたいが、遺物の伴うものや各土坑の検出面から出土する遺物から判断すると、大半は縄文時代後期初頭から前葉と考えられる。

個々の遺構の観察事項や出土遺物については、紙面の都合上、第2表・第3表の観察表にまとめたので、ここでは代表的なもののみ触れるとする。1号土坑は平面形が梢円形を呈する土坑で、3層及び3層上面から後期初頭から前葉の縄文土器が出土した。また、底面のほぼ中央にブロック状の難があり、その直上に12の土器が内面を上にして置かれた様にして出土している。遺物の出土状況や形状等が他の土坑類とは異なっており、墓壇等、機能（用途）の異なる遺構と考えられる。18号土坑は平面形が中央部のややくびれた長梢円形を呈する土坑で、覆土中位～下位、特に北側の2層下位～4層上位で多くの後期初頭から前葉の縄文土器が出土した。土層の堆積は人為堆積で、遺構の廃絶後、黒褐色土とともに廃棄したものと考えられる。23号土坑は本遺跡で、開口部から底部までの深さが約122cmと最も深い、断面形がフ拉斯コ状をした土坑である。39号土坑は平面形が円形を呈する土坑である。合計3kg強の遺物が各層から出土し、土坑類では最も遺物が出土した遺構である。この他に、円盤状土製品や石皿、砾石なども出土した。40号土坑・45号土坑・60号土坑は3基の土坑が重複したものである。新旧関係は（新）40号土坑→45号土坑→60号土坑である。同一面上の遺構の重複がありみられない本遺跡にとては特異な例と言えよう。44号土坑は開口部径220×212cm、底部径171×166cmと土坑類最大規模のものである。遺物量が少なく、断定はできないが、縄文時代後期初頭から前葉に属すると考えられる。53号土坑は39号土坑・18号土坑に次いで遺物量の多かった土坑である。約2kgの出土量で、中心となるのは後期初頭から前葉の縄文土器である。

第2表 土坑觀察表（1）

番号	位置	横断面	開口幅	深度	土質	遺物	出土遺物（上段：土膏層、下段：褐鐵泥層）	系年	鉛錠
1号	3C-22-3D-2	IIa IIb	110×136 117×110	38	3号。人頭埴像？ 二重は空筒シット。 下部は空筒合シット土作。	陶文土器；754g, 1885g, 石器；5点, 163.0g.	陶文土器；754g, 1885g, 石器；5点, 163.0g.	(周) 佐助山溝 → 銅鏡	
3号	3C-11	IIa IIb	120×113 93×85	3	A 空筒シットの本體。人頭埴像。 上部円、灰化物含む。	陶文土器；343g, 655g.	陶文土器；343g, 655g.	(周) 銅兵石頭 → 銅鏡	
7号	3C-11	IIa IIb	106×146 44×110	3	A 3号。自然堆積。 黑色シット土作。	陶文土器；171g, 205g, 石器；50点 (50)	陶文土器；171g, 205g, 石器；50点 (50)	(周) 後期山耕	
11号	4C-19-24	IIa IIb	79×72 126×20	3	A 8号。人頭埴像。 上部は角柱状の透シット。 下部は黑色シット土作。	陶文土器；29.0g, 843g.	陶文土器；29.0g, 843g.	(周) 長良河原 → 銅鏡	
12号	3D-9	IIa IIb	144×134 97×96	3	A 6号。人頭埴像？ 黑色シット土作。	陶文土器；128g, 294g, 石器；1点, 1.18g.	陶文土器；128g, 294g, 石器；1点, 1.18g.	(周) 後期	
17号	3C-11	IIa IIb	(162)×132 (117)×126	3	A 8号。人頭埴像。 黑色シット、黒褐色	陶文土器；(20~30)	陶文土器；(20~30)	(周) 銅鏡	
18号	3C-22-23	IIa IIb	263×161 102×103	3	C 8号。人頭埴像。 黑色シット土作。 底部多孔質。	陶文土器；381g, 千葉器 (503), 石器 (51) (1~64)	陶文土器；381g, 千葉器 (503), 石器 (51) (1~64)	(周) 後期山耕	
19号	4C-19	IIa IIb	105×100 94.5×94.5	3	A 11号。人頭埴像。 黑色シット土作。	陶文土器；115g, 130g.	陶文土器；115g, 130g.	(周) 滋賀山耕	
22号	3C-9-14	IIa IIb	111×123 79.3	3	A 黑色シット。	陶文土器；(40~52), 石器；(616~618)	陶文土器；(40~52), 石器；(616~618)	(周) 後期山耕	
23号	3C-16	IIa IIb	(147)×(127) 135×138	3	A 12号。人頭埴像。 土器や底付白色シットや黒褐色 シット、下底付白色シット土作。	陶文土器；21.0g, 328g, 石器；1点, 27.02g.	陶文土器；21.0g, 328g, 石器；1点, 27.02g.	6.0 → (周) 銅鏡以來	
26号	3D-7	IIa IIb	122×112 102×92	3	A 2号。人頭埴像。 黑色シット土作。	陶文土器；17.0g, 454g, 石器；1点, 1.0g.	陶文土器；17.0g, 454g, 石器；1点, 1.0g.	(周) 後期	
27号	3D-8	IIa IIb	82×78 54×56	3	A 2号。人頭埴像。 上部は二輪車シット。	陶文土器；(51~61), 石器 (620)	陶文土器；(51~61), 石器 (620)	(周) 後期	
28号	3D-9	IIa IIb	75.8×75.8 48×38	3	A 2号。人頭埴像。 黑色シット土作。	陶文土器；2点, 11g.	陶文土器；2点, 11g.	(周) 後期山耕	
29号	3D-10	IIa IIb	55×22 16×16	3	A 10号。人頭埴像。 白色地。	陶文土器；11.0g, 190g.	陶文土器；11.0g, 190g.	(周) 稲葉山耕	
31号	3C-34	IIa IIb	172×133 94×97	3	A 5号。人頭埴像。 2種色シット土作。	陶文土器；45.0g, 602g, 石器；2点, 603.70g.	陶文土器；56g, 87g, 千葉器 (504), 石器 (621)	(周) 後期	
35号	1C-12-17	IIa IIb	121×121 56.1	3	A 6号。人頭埴像。 黑色シット土作。	陶文土器；18.0g, 233g, 石器；1点, 32.02g.	陶文土器；18.0g, 233g, 石器；1点, 32.02g.	(周) 佐助山耕 → 銅鏡	
36号	3C-25-3D-3	IIa IIb	96×28 63×56	3	B 8号。人頭埴像。 黑色シット土作。	陶文土器；19.0g, 250g, 石器；2点, 10.0g.	陶文土器；19.0g, 250g, 石器；2点, 10.0g.	(周) 後期山耕 → 銅鏡	
38号	3D-5	IIa IIb	(130)×(127) 123×107	3	A 8号。人頭埴像。 黑色シット土作。	陶文土器；(71~74)-中瀬器 (505~506), 石器 (622, 623)	陶文土器；(71~74)-中瀬器 (505~506), 石器 (622, 623)	8.0 → (周) 銅鏡山耕 → 銅鏡	
39号	2D-5-9	IIa IIb	(145)×(137) 120×116	3	A 8号。人頭埴像。自然堆積。 白色シット土作。	陶文土器；126.0g, 2997g, 石器；8点, 949.03g.	陶文土器；126.0g, 2997g, 石器；8点, 949.03g.	(周) 後期山耕	
40号	4D-2	IIa IIb	647	3	A 11号。人頭埴像。 土器は透シット。	陶文土器；17.0g, 200g.	陶文土器；17.0g, 200g.	40.0 → (周) 佐助山耕 → 銅鏡	
41号	4C-22	IIa IIb	1117×116 (112)×99	3	A 8号。人頭埴像。 黑色シット、黑色シット土作。	陶文土器；91~90	陶文土器；91~90	43.0	
42号	4C-21-32	IIa IIb	128×123 120×117	3	A 8号。人頭埴像。 黑色シット、黑色シット土作。	陶文土器；35.0, 875g, 石器；2点, 495.04g.	陶文土器；35.0, 875g, 石器；2点, 495.04g.	(周) 佐助山耕 → 銅鏡	
43号	4C-21-32	IIa IIb	71×66 52.5	3	A 8号。人頭埴像。 黑色シット土作。	陶文土器；3点, 421g, 石器；3点, 401.03g.	陶文土器；3点, 421g, 石器；3点, 401.03g.	(周) 佐助山耕 → 銅鏡	
44号	4D-6-7	IIa IIb	123×112 117×106	3	A 8号。自然堆積。次は黒褐色シット。 中部は白透シット。	陶文土器；14.0g, 170g, 石器；3点, 304.88g.	陶文土器；14.0g, 170g, 石器；3点, 304.88g.	(周) 佐助山耕 → 銅鏡	
45号	4D-2	IIa IIb	71×62 92.8×79.0	3	A 8号。人頭埴像。 黑色シット土作。	陶文土器；14.0g, 267g.	陶文土器；14.0g, 267g.	40.0 → (周) 佐助山耕 → 銅鏡	
46号	4D-2	IIa IIb	89.5×74 111×95	3	A 8号。人頭埴像。 黑色シット土作。	陶文土器；10.0g, 187g, 石器；1点, 8.09g.	陶文土器；10.0g, 187g, 石器；1点, 8.09g.	45.0 → (周) 佐助山耕 → 銅鏡	
47号	3D-17	IIa IIb	20×23 15×13	3	A 人頭埴像。 黑色シットの單體。	陶文土器；5.0g, 526g.	陶文土器；5.0g, 526g.	60.0 → (周) 佐助山耕 → 銅鏡	

第3表 土坑觀票表 (2)

地名 番号	位置	標本所 在地	被覆 (cm)		形態	地上	地下植物(土壌・出土品・下段・根茎・地下茎)	重取 肉眼	写真
			高さ	葉 幅					
18号	3 D - 17	太田	28.7	2.7	A	5葉。人面形斜葉。	なし	小網	
			17.4	1.8		葉面銀色シボト。	-		
19号	4 C - 11	太田	50.9	5.9	B	4葉。人面形斜葉。	なし	(西) 極端?	
			31.9	3.9		葉面銀色シボト。	-		
59号	5 C - 21	太田	31.5	3.5	C	4葉。人面形斜葉。	なし	(西) 極端?	
			98.7	9.8	A	5葉。白脉原種。	萬葉文書「45年、1092年。石器」1点。555g。		
59号	5 C - 21	太田	114.4	10.4		上部は黒色シボト。	萬葉文書「110-112」、石器 (537)	(西) 地質地圖 - 落葉	
			77.0	7.7	C	下部は黒色シボト。	-		
51号	3 C - 25	筑波山自然観察園	15.0	1.5	A	人面形斜葉。	なし	(西) 極端以南	
			12.6	1.2		白色シボトの葉脈。	-		
59号	3 C - 21 + 22	太田	157.7	13.8	A	2葉。人面形斜葉。	萬葉文書「16点、383g。」	(西) 地質地圖 - 落葉	
			110.0	10.0		紫褐色シボト上葉。	萬葉文書「113-114」		
35号	3 C - 29	太田	58.9	5.8	C	葉面銀色シボト上葉。	萬葉文書「76年、1021年。石器」15点。194.13g。	(西) 極端地圖 - 落葉	
			139.9	12.8	A	4葉。人面形斜葉。	萬葉文書「115-116」、上葉石 16.0%。		
34号	3 C - 17	太田	107.7	9.6		紫褐色シボト上葉。	万葉文書「163-164」	(西) 極端地圖 - 落葉	
			90.1	8.1	C	葉面銀色シボト上葉。	萬葉文書「165-166」、下葉 2.6%。石器 1.0%。		
34号	3 C - 17	太田	116.6	10.5	A	4葉。白脉原種。	萬葉文書「167-168」、下葉 1.0%。	(西) 極端地圖 - 落葉	
			87.6	8.3		下葉は正方形シボト。	萬葉文書「169-170」、下葉 5.0%。		
36号	3 C - 17 - 22	太田	20.1	2.0	C	葉面銀色シボト上葉。	萬葉文書「171-172」、下葉 1.0%。	5.1上	
			100.4	10.4	A	4葉。人面形斜葉。	萬葉文書「173-174」、下葉 1.0%。		
36号	3 C - 17 - 22	太田	97.7	9.1		紫褐色シボト上葉。	萬葉文書「175-176」、下葉 1.0%。	5.1中	(西) 極端地圖 - 落葉
			60.1	6.0	C	葉面銀色シボト上葉。	萬葉文書「177-178」、下葉 1.0%。		
36号	3 C - 17 - 22	太田	120.9	12.4	A	4葉。直角矩形。	萬葉文書「179-180」、上葉石 5.0%。	5.1下	(西) 極端地圖 - 落葉
			100.4	10.4		紫褐色シボト上葉。	萬葉文書「181-182」、下葉 1.0%。		
59号	3 C - 7 - 12	太田	105.3	10.2	A	4葉。直角矩形。	萬葉文書「183-184」、下葉 1.0%。	(西) 極端地圖 - 落葉	
			70.9	7.0		紫褐色シボト上葉。	萬葉文書「185-186」、下葉 1.0%。		
59号	4 D - 6	太田	144.4	14.0	A	4葉。直角矩形。	萬葉文書「187-188」、下葉 1.0%。	3.6中 葉の 不規	(西) 極端地圖 - 落葉
			25.6	2.5		紫褐色シボト上葉。	萬葉文書「189-190」、下葉 1.0%。		
60号	4 D - 2 - 7	太田	93.5	9.0	A	4葉。直角矩形。	萬葉文書「191-192」、下葉 1.0%。	4.5上	(西) 極端地圖 - 落葉
			156.8	11.7		紫褐色シボト上葉。	萬葉文書「193-194」、上葉石 5.0%。		
61号	4 C - 17	太田	104.8	10.9	A	2葉。自然矩形。	萬葉文書「195-196」、下葉 1.0%。	6.0上	(西) 極端地圖 - 落葉
			79.0	8.0		紫褐色シボト上葉。	萬葉文書「197-198」、下葉 1.0%。		
62号	4 C - 17 - 22	太田	34.8	3.4	C	葉面銀色シボト上葉。	萬葉文書「199-200」、下葉 1.0%。	(西) 極端	
			97.9	9.1	A	2葉。人面形斜葉。	萬葉文書「201-202」、下葉 1.0%。		
62号	4 C - 17 - 22	太田	68.0	6.0		紫褐色シボト上葉。	萬葉文書「203-204」、下葉 1.0%。	(西) 極端地圖 - 落葉	
			30.5	3.0	C	葉面銀色シボト上葉。	萬葉文書「205-206」、下葉 1.0%。		
63号	3 C - 15	太田	151.6	14.1	A	6葉。直角矩形。	萬葉文書「207-208」、下葉 1.0%。	3.6上	(西) 極端地圖 - 落葉
			63.6	6.4		紫褐色シボト上葉。	萬葉文書「209-210」、下葉 1.0%。		
64号	4 C - 12	太田	126.0	12.6	C	2葉。自然矩形。	萬葉文書「211-212」、下葉 1.0%。	(西) 極端	
			230.0	13.5	A	2葉。自然矩形。	萬葉文書「213-214」、下葉 1.0%。		
65号	3 C - 19	太田	105.1	10.0	A	5葉。自然矩形。人面形斜葉。	萬葉文書「215-216」、下葉 1.0%。	6.3上	(西) 極端地圖 - 落葉
			110.9	9.9		紫褐色シボト上葉。	下葉は紫褐色シボト。		
66号	3 C - 10 - 34	太田	44.1	4.1	A	2葉。自然矩形。	萬葉文書「217-218」、下葉 1.0%。	6.3上	(西) 極端地圖 - 実葉
			130.0	12.4		紫褐色シボト上葉。	下葉は紫褐色シボト。		
67号	3 C - 13	太田	65.7	6.5	A	2葉。自然矩形。	萬葉文書「219-220」、下葉 1.0%。	6.6上	(西) 極端地圖 - 実葉
			60.0	6.0		紫褐色シボト上葉。	下葉は紫褐色シボト。		
68号	3 C - 13	太田	73.8	7.8	A	2葉。人面形斜葉。	萬葉文書「221-222」、下葉 1.0%。	(西) 極端地圖 - 実葉	
			48.5	4.8		紫褐色シボト上葉。	下葉は紫褐色シボト。		
69号	3 C - 20	太田	109.3	10.9	A	7葉。人面形斜葉。	萬葉文書「223-224」、下葉 1.0%。	(西) 純然式圓 - 実葉	
			124.3	12.2		紫褐色シボト上葉。	下葉は紫褐色シボト。		
70号	3 C - 23	太田	36.4	3.6	A	2葉。人面形斜葉。	萬葉文書「225-226」、下葉 1.0%。	(西) 純然式圓 - 実葉	
			109.3	10.9		紫褐色シボト上葉。	下葉は紫褐色シボト。		

[起步·起步后]

第十一章 评估与反馈

(B) B:平頭形 A:円頭形 C:その他

通：溝側底 T：プラスコ紙、開口部裏面<底部黒墨 オーバーハング

図1: ピー-カ-秋、男山湖長径～底部側壁、底部呼球

目：舌苔形状 舌尖部长霉>舌部长霉

新竹七掌坑 開口部長壁 + 處部長壁 處部加次

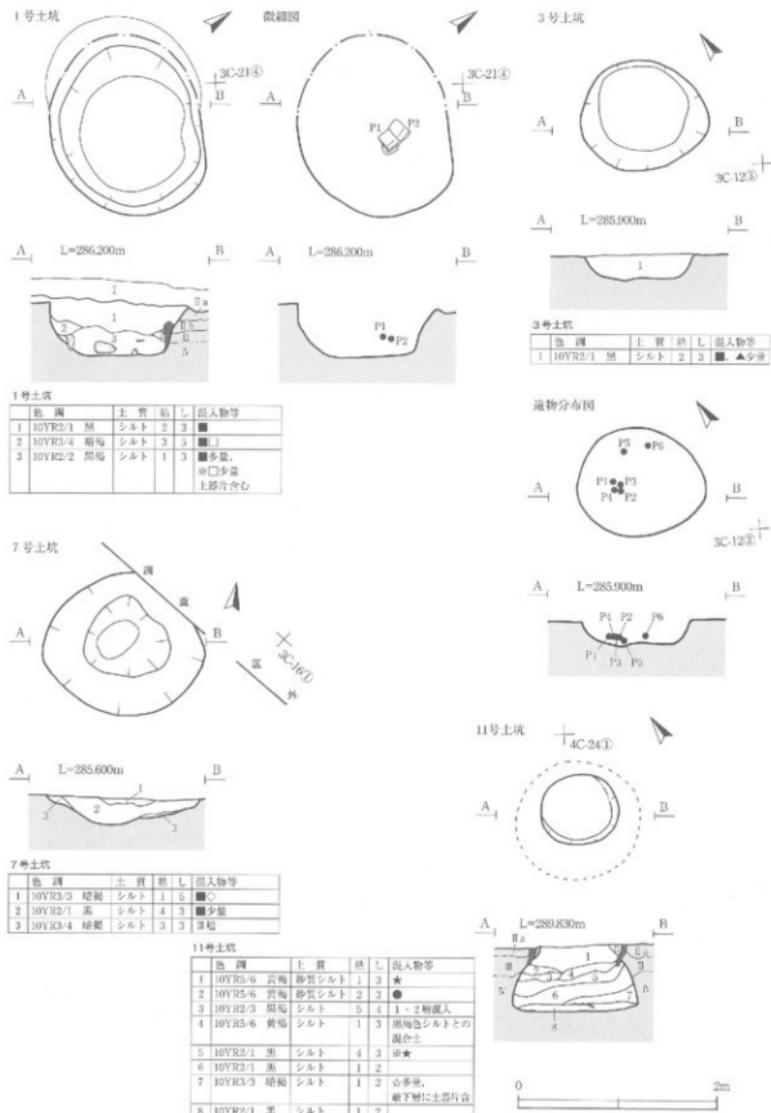
V：平行四邊形 面積=底×高 —般式—

### 質：その他

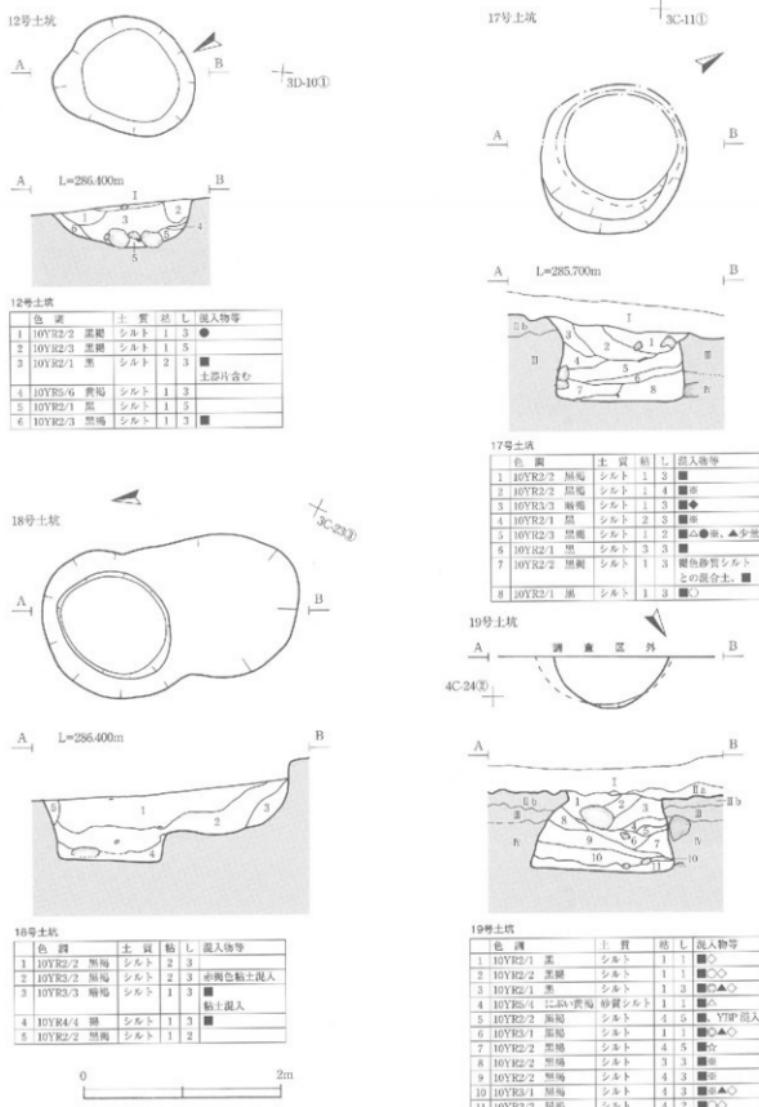
【武侯祠】 扎就：作庶供造像，主：主祠。模：佛工造像，炉：炉器

(時　　用　　範)：明治時代

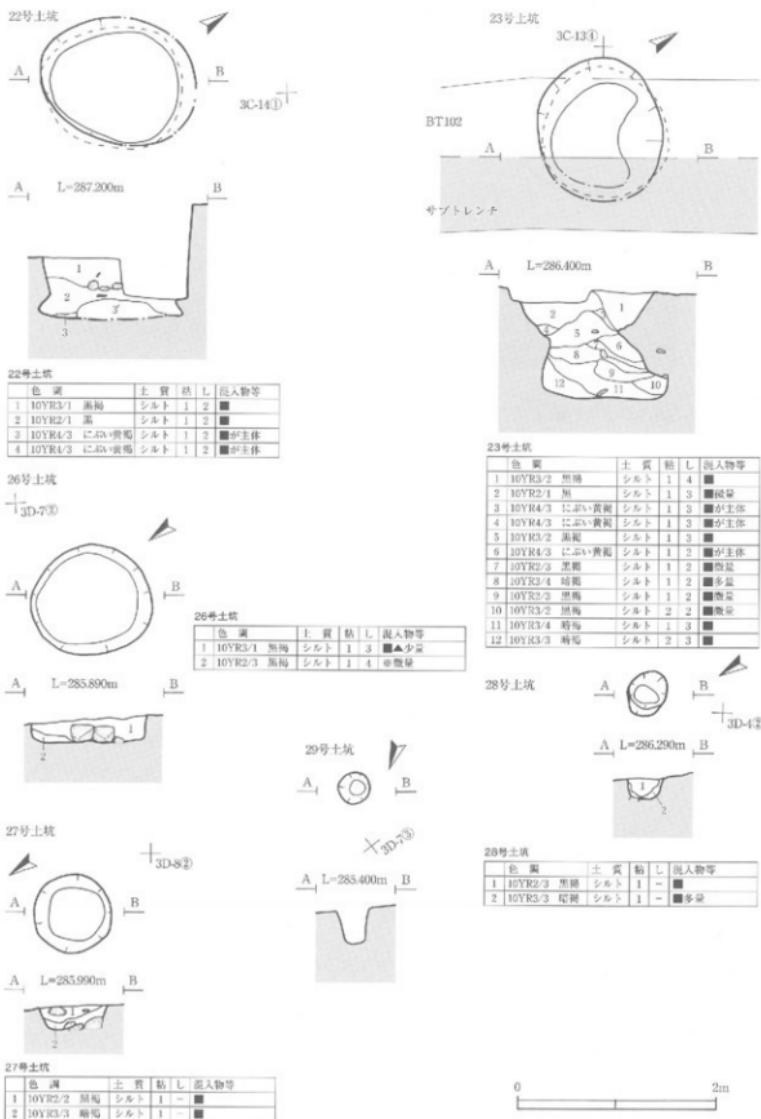
— 16 —



第11図 土坑1

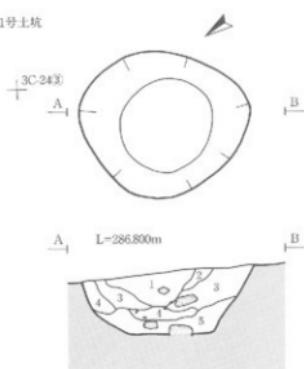


第12図 土坑2



第13図 土坑3

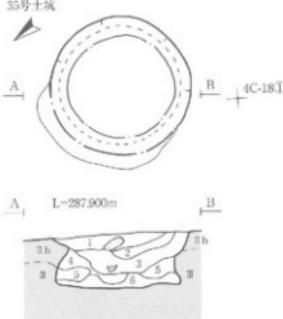
31号土坑



31号土坑

	色調	土質	熱	し	混入物等
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	4	3	■少量、塊(大) 下部に土器片含む
2	10YR2/1 黒	シルト	1	1	
3	10YR2/1 黒	シルト	1	5	■少量、塊(大) 下部に土器片含む
4	10YR2/2 黒褐色	シルト	4	3	■少些 土器片含む
5	10YR2/3 黒褐色	シルト	1	3	■塊(大) 多量、 少些

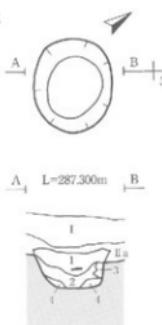
35号土坑



35号土坑

色調	土質	熱	し	混入物等
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	1	1 ■塊
2	10YR3/1 黒褐色	シルト	1	3 ■▲
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	1	3 ■塊
4	10YR3/2 黒褐色	シルト	1	5 ■少
5	10YR2/2 黒褐色	シルト	1	5 ■
6	10YR2/2 黒褐色	シルト	1	5 ■少

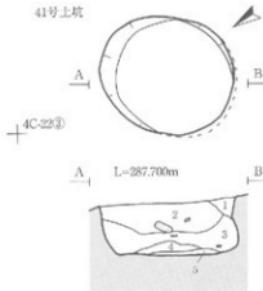
36号土坑



36号土坑

	色調	土質	熱	し	混入物等
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	1	3	■ 1部片含む
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	1	3	■ 土器片含む
3	10YR2/3 黑褐色	シルト	1	3	※
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	1	4	海山角落土

41号土坑



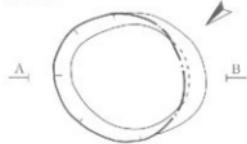
41号土坑

色調	土質	熱	し	混入物等
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	1	1 ■液量
2	10YR2/1 黒	シルト	1	3 ■
3	10YR2/1 黒褐色	シルト	1	3 ■土器片含む
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	1	2 ■が土体
5	10YR3/2 黒褐色	シルト	1	2 ■

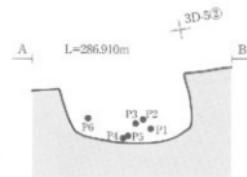
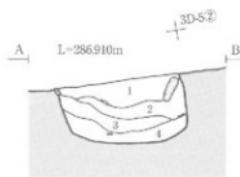
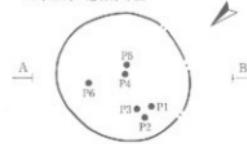
0 2m

第14図 土坑4

38号土坑



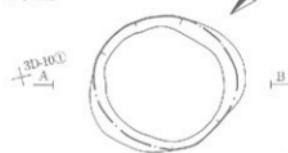
38号土坑 遺物分布図



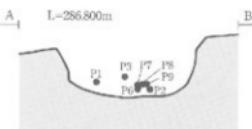
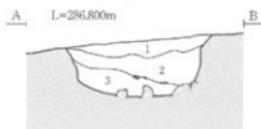
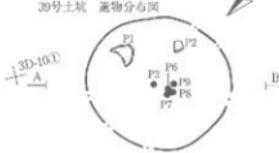
39号土坑

色	調	土	質	粒	L.	混入物等
1	10YR2/3	黒褐色	シルト	1	2	■少量、▲微量
2	10YR3/3	暗褐色	シルト	1	3	■
3	10YR3/1	褐色	シルト	1	3	■微量
4	10YR2/3	黒褐色	シルト	1	3	■底下層に土器片含む

39号土坑



39号土坑 遺物分布図

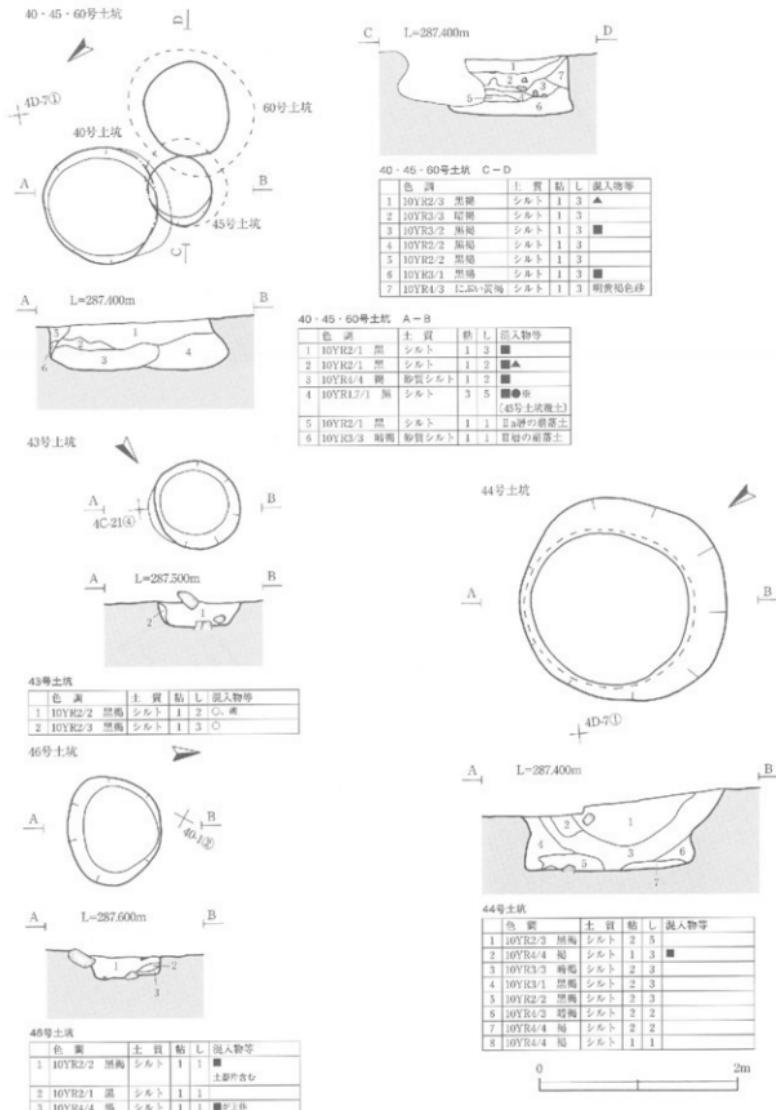


39号土坑

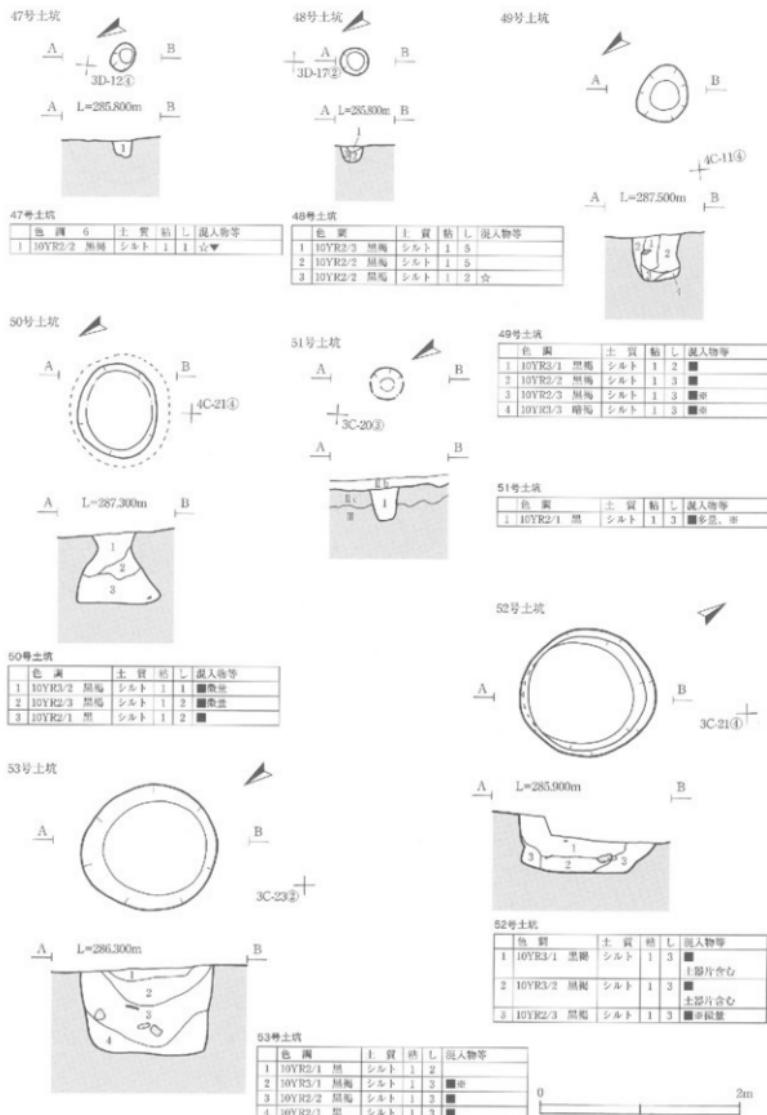
色	調	土	質	粒	L.	混入物等
1	10YR2/1	褐	シルト	1	1	■
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	1	3	■、▲微量
3	10YR2/1	黒	シルト	1	2	■少 量下層に土器片含む



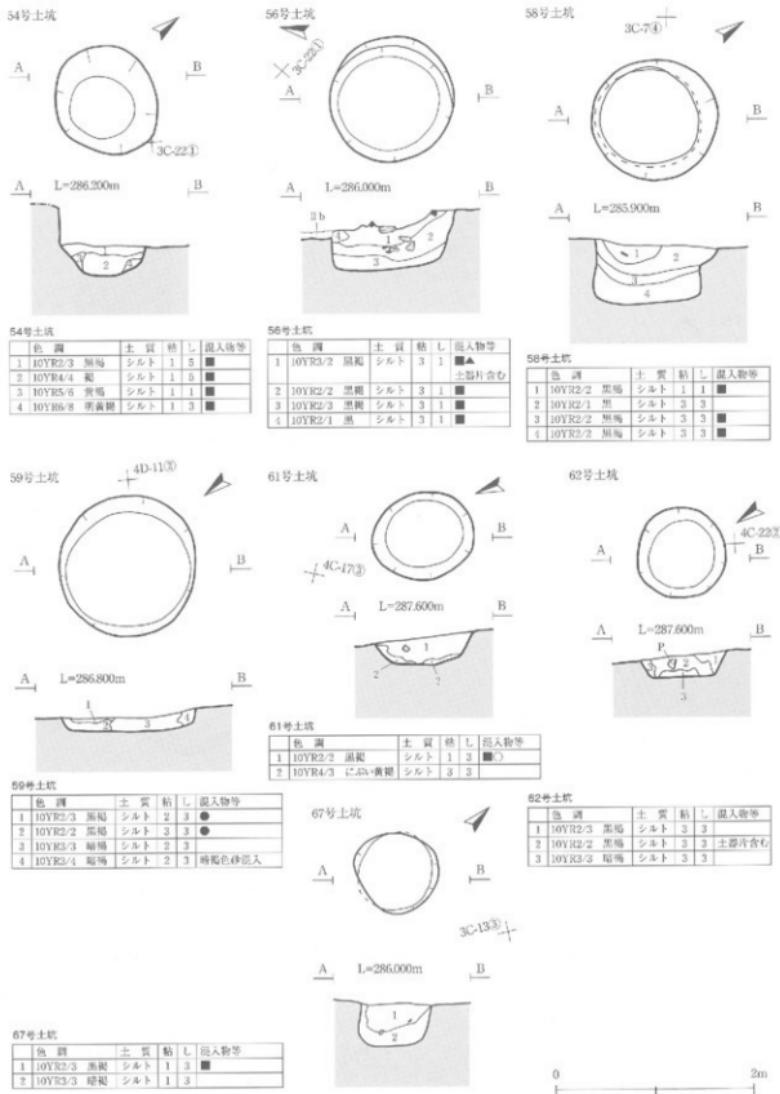
第15図 土坑5



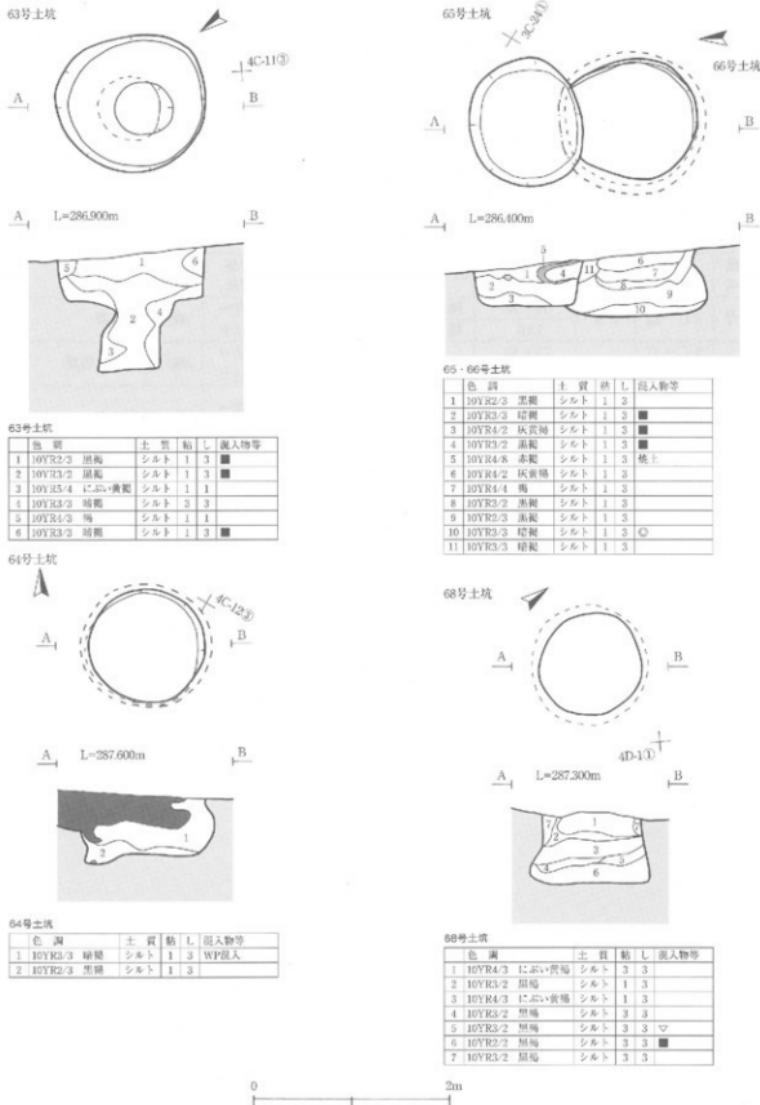
第16図 土坑6



第17図 土坑7



第18図 土坑8



第19図 土坑9

## (3) 焼上遺構・炉跡

調査区の北側、主に 3 C グリッドから 8 基の焼土遺構・炉跡が検出された。8 号及び 10 号が跡は焼土とともに、礫の配置が確認できたため、炉跡と判断して報告する。検出面は 24 号焼土遺構・25 号焼土遺構が II b 層で、それ以外は II a 層である。遺構の構築された時期は住居状遺構や土坑と比較すると新しいものが多いと思われる。遺物の伴う 10 号炉跡で縄文時代後期初頭から前葉で、他の遺構は古くても縄文時代後期前葉のものである。全体的に根掘乱の影響を大きく受けている遺構が多く、一見するとブロック状になっているものもみられる。各遺構の詳細は一覧表にしてまとめた。

第4表 焼土遺構・炉跡観察表

遺構番号	位置	検出面	規模 厚	焼土範囲	出土遺物	上段：出土量		重複関係	時期
						下段：掲載遺物			
4号	3 C - 22	II a	56×25 13.0		縄文土器：6点、94g。 縄文土器(216)			4焼→ 56土	(縄)後期前葉
					なし				
5号	3 C - 17 ・ 22	II a	75×53 8.0					5焼→ 54上	(縄)後期前葉以降
					なし				
6号	3 C - 13 ・ 18	II a	121×81 16.0		縄文土器：1点、12g。 石器：1点、1.46g。 石器(666)	6焼→ 23土	(縄)後期以降		
					なし				
8号	3 D - 5	II a	73×62 4.0		縄文土器：4点、45g。 縄文土器(165)	8炉→ 38土	(縄)後期前葉以降		
					なし				
10号	3 D - 7	II a	72×51 10.0		縄文土器：9点、227g。 縄文土器(166～168)		(縄)後期初頭～前葉		
					なし				
24号	3 C - 15	II b	58×31 8.0			25焼→ 66上	(縄)後期前葉	不明	
					なし				
25号	3 C - 19	II b	42×39 9.0		縄文土器：6点、62g。 縄文土器(169)		(縄)後期前葉	不明	
					なし				
57号	3 C - 14	II a	110×42 5.0					不明	
					なし				

## 【略号等】

(規 模) 長径×短径 単位: cm

(重複関係) 上：土坑、焼・炉：焼上遺構、炉跡

4号焼土遺構



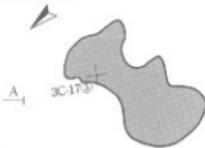
A L=286.00m B



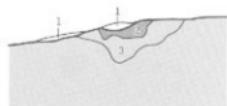
4号焼土遺構

色	調	土質	粘	し	混入物等
1	10YR2/2 黒褐	シルト	1	1	
2	7.5YR4/4 褐	シルト	1	3	焼土

5号焼土遺構



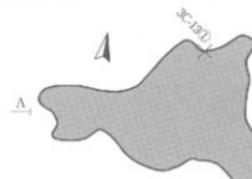
A L=286.200m B



5号焼土遺構

色	調	土質	粘	し	混入物等
1	10YR2/2 黒褐	シルト	1	3	焼土ブロック混入
2	7.5YR5/8 明褐	シルト	1	5	焼土
3	10YR2/3 黒褐	シルト	1	4	

6号焼土遺構



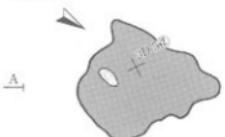
A L=286.600m B



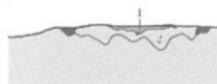
6号焼土遺構

色	調	土質	粘	し	混入物等
1	5Y7/4-8 赤褐	シルト	1	5	焼土
2	7.5YR3/2 棕褐	シルト	1	2	発達する 腐殖化している

8号炉跡



A L=287.010m B

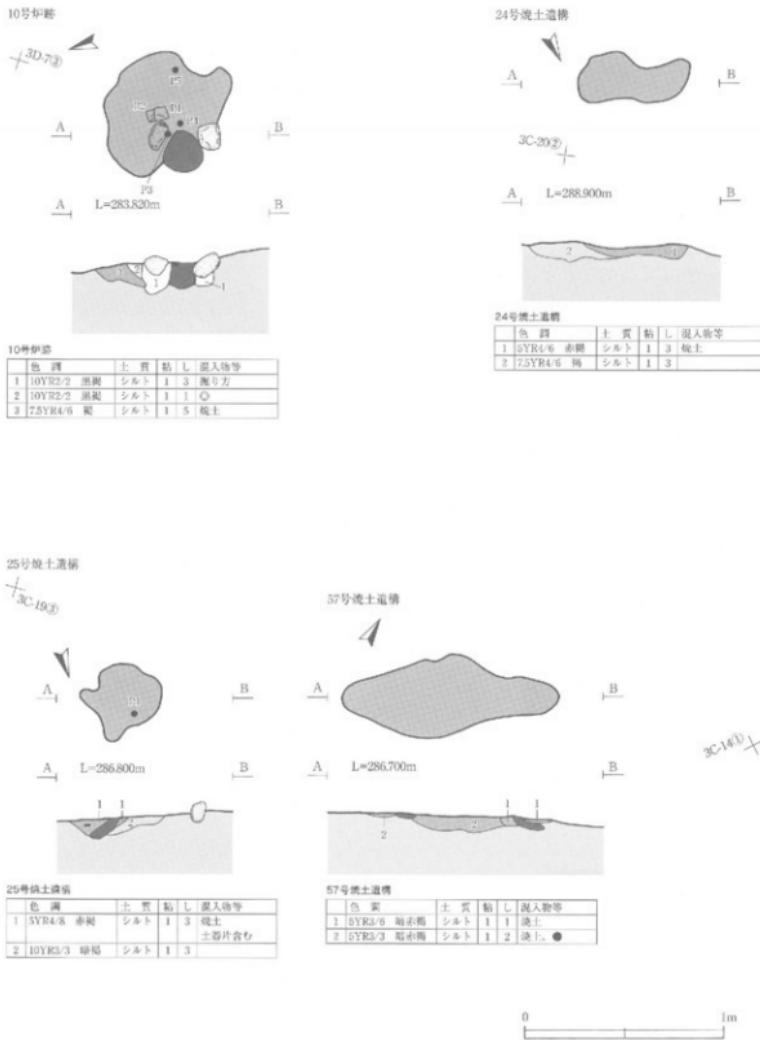


8号炉跡

色	調	土質	粘	し	混入物等
1	7.5YR4/4 褐	シルト	1	5	焼土 土着物含む
2	7.5YR2/3 無筋觸	シルト	1	5	



第20図 焼土遺構・炉跡1



第21図 焼土遺構・炉跡2

## 第3節 遺物

## (1) 繩文土器 (第22~30・33~43図、写真図版18~23・28~35)

繩文土器は中コンテナ12箱分、点数にして4821点(約4×4cm以上)、重量にして約91kg分が出土した。遺構内出土土器はほとんどが土坑類、特に1号土坑、18号土坑、39号土坑、53号土坑、56号土坑などに集中している。遺構外出土土器はII a層・II b層、3C-14グリッド及びその周囲、3D-17グリッドから出土したものが多い(第5表)。

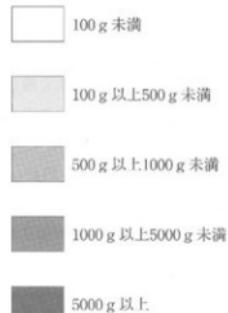
早期中業の貝殻沈線文系上器群から後期前業の十腰内I式併行期の土器が出土しているが、主体となる時期は早期中業と後期初頭から後期前業である。早期中業の上器は破片資料のみで器形全体を窺える資料はないが、同時期の類例から判断すると、尖底もしくは丸底の深鉢を主体とし、口縁部は平縁と波状縁がある。器体外面の文様は258のような口縁部から胴部にかけて貝殻による圧痕文・押引き文・沈線などを横位展開するものと、206や225のように口縁に対して直角に貝殻による圧痕文を連続して施し、平行沈線で文様帯を区画するもの、さらに264のように多段にわたって文様帯を持つものとに大きく2分される。また、条痕文のみの土器や無文の土器もみられる。

後期初頭から後期前業の土器は深鉢を主体とし、鉢、台付鉢、壺や小形の土器がみられる。器形は胴部でふくらみ、口縁部上部でわずかに屈曲し、口縁部上端が外反するものや胴部が直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で大きく外反するもの、口縁部の屈曲部からほぼ垂直もしくは外傾気味に立ち上がるものなどがある。口縁部は平縁と波状縁がみられ、波状縁は4単位もしくは6単位のものが多い。文様は口縁部から胴部上半に集中しており、磨削手法や充填手法を用いた入組文や沈線による文様が横位に展開している。また、273のように波状口縁の頭頂部から直後に降帯を施し、降帯を挟んで左右対象に沈線で施文しているものもみられる。319のように外面全体に文様が施文されるものは珍しい。地文には単節の斜縦文が多用される。繩文のみの上器は口縁部上端に無文帯を持ち、屈曲部に原体圧痕がなされるものが多い。鉢や壺などは地文のみのものが多い。また、小形の土器は全体に無文のものが多い。

第5表 グリッド別出土土器重量

単位:g

		C			D				
2		65							
2		658	217	458	210	199	543	92	
		643	1478	276	360	169	225	4857	
3	46	1750	994	797	512	2066	174	782	
	39	5051	2581	478	863	79	156	350	
		3206	373	806	1615	176	264	39	
4		45	142	1126	256	1265	547		
		265	415	1018	1092	801	66	143	
	61	44	530	45	1131	71			
	152	71	3	126	286	58	2078		



## (2) 土製品 (第31・44図、写真図版24・35)

土偶 (505・521・522) 全資料掲載した。505は上半身と下半身が接合したものである。座像で、左腕は曲げ左膝につけ、右腕は伸びし額につけている。521・522は左脚のみの資料である。3点とも外面に装飾は施されていない。

錐形土製品 (523) 1点出土した。頂部のみの資料で貫通孔を有する。

円盤状土製品 (501～504・506～509・511～514・524～538) 27点出土した。土器片を素材とし、その周縁を打ち欠いて、成形している。一部の資料では研磨して整形している。地文のみのものや無文のものが多い。

不明土製品 (510・539) 2点出土した。2点とも外面に装飾はされておらず、雑な作りである。

## (3) 焼成粘土塊 (写真図版24・35)

551～554、561・562の計6点を掲載した。表面にはナデの痕跡が観察されるものが多い。

## (4) 石器 (第32・45図、写真図版25～27・36～39)

石鏃 (616・701～704) 扁平ではば左右対称、尖頭部と幅広な基部をもつ小形の石器である。両面とも入念に調整が施されているものが多い。基部形状及び茎の有無で分類すると、平基無基鏃1点(701)、円基無基鏃1点(702)、平基有基鏃1点(703)、円基鏃2点(616・704)である。5点のうち欠損しているものは2点である。

錐形石器 (705～709) 素材剥片の一部に調整によって錐状の刃部を作出した石器である。つまみ部が作出されているものや棒状のものではなく、すべて剥片の一部に刃部を作出しているものである。刃部の調整を素材剥片の両面に施している場合は刃部の断面形は菱形(705・706)を、片面に施している場合は三角形(707～709)を呈している。刃部の棱が磨滅していると同時に刃部に微細な剥離痕が観察されるものが多い。

石匙 (601・710) 両側縁から抉りを入れることで作り出されたつまみ部とつまみ部とは異なる側縁に刃部を有する石器である。錐形1点(601)、横形1点(710)である。601は素材剥片のバルブが残置されるなど素材剥片の剥離面を広く残しており、粗製の石匙という印象を受ける。710は先端が細くなっている刃部の両側縁は棱が磨滅するとともに、微細な剥離痕が観察され、雑としての用途も想定される。

削器 (606・630・711～714) 主に剥片の側縁に緩斜度の連続した調整で刃部を作出している石器である。多くのものは素材剥片の一側縁に刃部を作出しているが、606のようにはば全周に調整を施して刃部を作出しているものもある。調整は背面側に施されるものが多い。606は背面の広い範囲に歯面が残っており、剥片剥離工程の初期段階の剥片を素材としている。

搔器 (638・715・716) 主に素材剥片の端部に急斜度の調整で刃部を作出している石器である。638・715は刃部のみ、716はば全周に調整が施される。638など刃部に微細な剥離痕が観察されるものもみられる。

715は形態的な特徴は石匙に非常に近いが、素材剥片の端部側を欠損しており、つまみ部の有無が不明なため本類に含めた。716は他と比較すると小形の搔器である。裏面全面に調整を施して平坦化している。

**範状石器 (717~721)** 平面形が猿形もしくは指円形を呈し、端部に刃部を有する石器を範状石器とした。717は本類最大のものである。両面とも入念に調整が施されている。718は本類の他の石器と比較すると厚さのあるものである。素材剥片の剥離面がほとんど残っていないが、全体的に調整は粗い。719は円錐から剥離した横長剥片を素材とし、素材剥片の長軸の一端に刃部を作出している。調整は刃部と刃部に接する一側縁に限られ、素材の剥離面を広く残している。720は素材剥片の背面に刃部を作出している。刃部の調整は背面に限られるが、基部は腹面にも調整が施されている。721は基部のみの資料である。

**櫛形石器 (607・624・639・640・722~726)** 向い合う縁刃部に相対する剥離痕を有する石器である。607・639・722など多くの石器に両極法に特徴的な対向する二辺に微細な剥離痕が観察される。断面形は凸レンズ状を呈するものが多く、楕の用法が推定される。

**調整痕のある剥片 (617・622・631・636・641・642・727~741)** 上記以外の石器で、剥片の一部に調整が施されているものである。727~730は腹面右側縁に、641・731・732は腹面両側縁に、617・636・733は腹面端部側に、622・631・734・735は背面右側縁に、736は背面左側縁に、642・737は背面端部側に調整が施されている。734は頭部側の一部しか残っていないため、本類に含めたが、調整の施されている部分には微細な剥離痕も観察され、スクレイパー的な機能を有していたと考えられる。740は片面のはば全面に擦面を残し、もう一方の面は偶発的な割れによるものか、打点や剥離の方向の不明瞭な剥離面で覆われている。剥縁に調整が施されているため本類に含めた。

**微細剥離痕のある剥片 (621・742~748)** 素材の一部に調整痕ではない、微細な剥離痕が観察される石器である。742は腹面端部に、743・744は背面左側縁に、745・746は背面右側縁に、747は背面端部に微細な剥離痕が観察される。748は背面左側縁や右側縁下部に微細な剥離痕が観察される。621は背面端部と腹面右側縁下部に微細な剥離痕が観察される。

**剥片 (602・603・608~613・615・618~620・623・625~627・632~634・637・643~650・652~659・661・666・749~802)** 石核や石器（トゥール類）から剥離されたもので、調整痕、微細な剥離痕の観察されない石器である。観察表の背面の項目はI類が背面を構成する剥離面が主に腹面と同一方向の剥離面で構成されるもの、II類が主に腹面と反対方向の剥離面で構成されるもの、III類が対向する剥離面で構成されるもの、IV類が直交する剥離面があるものである。643・749は黒曜石製の剥片である。黒曜石製の石器はこの2点のみである。743は擦面が残っており、転擦から剥離されたものと考えられる。613は全体の形状は不明なため剥片に含めたが、片面に擦痕が観察され、磨製石斧の削部片と考えられる。上記以外のものについては写真・観察表を参照して頂きたい。

**碎片 (603・614・803・804)** 平面の大きさが1.5×1.5cm以下の剥片類である。出土点数は少ない。

**石核（805～808）** 剥片を剥離したと考えられる石器である。805・806はサイコロ状の石核である。2点とも剥片剥離はあまり行われておらず、作業面以外の広い部分に擦面を残している。807はやや扁平な石核である。打面を頻繁に転移させながら剥片剥離を行っている。

**原石（809）** 石器の石材として利用されている石で、人為的な剥離痕を有していないものである。

**磨製石斧（810～812）** 研磨による刃状の刃部をもつ石器である。3点とも定角式の磨製石斧である。810・811は基部の幅が最小で、刃部もしくは刃部付近に最大幅をもつ撥状の形態をしている。両面とも入念に研磨調整が施され、体部の擦痕は主に器長に対して右下がりになっている。810の刃部は使用によると思われる剥離面が広く観察される。811は810と比較すると小形のもので、基部翻を欠損している。刃部には刃部に直交する擦痕（使用痕）とともに光沢痕が観察される。812は刃部翻を欠損している。上記2点と同様体部の擦痕は主に器長に対して右下がりになっている。

**<磨石・凹石・敲石>** 自然礫を利用して「磨る・潰す・敲く」といった機能を有する石器群である。各機能を複合して有するものが多く、使用頻度の高いと考えられる器種の名前をつけて分類した。

**磨石（813～821）** 813・814は楕円形の礫を利用した磨石である。使用面は2面である。815は楕円形の礫を利用した磨石である。使用面は4面で、使用面と使用面の間には明瞭な稜が形成されている。816はやや扁平な円形の礫を利用した磨石である。使用面は1面である。817は約1/2の残存であるが、残存部から判断すると円形もしくは楕円形の礫を利用した磨石と考えられる。使用面は1面である。818は方形状の礫を利用した磨石である。使用面は1面である。819～821は擦痕の観察される縦破片である。

**凹石（822）** 822は扁平で細長い板状の礫の広い2面に敲打による凹部が観察される石器である。片面には敲打に先行する擦痕が観察され、磨石としての機能も有していたと考えられる。

**敲石（665・823・824）** 665は掌に収まる位の大きさの円錐を利用したもので、長軸両端に敲打痕が観察される。823は棒状の礫を、824は断面形が三角形状を呈する礫を利用したもので、突端一ヶ所に敲打痕が観察される。

**石皿（628）** 大形の礫の一面もしくは二面に、広範囲にわたって、磨面や敲打痕が観察される石器である。本遺跡からは628のみの出土である。2点が接合した。扁平な礫を利用しており、使用面は1面である。

**砥石（629）** 629は棒状の礫を利用した砥石である。部分的であるが、研磨痕が観察される。

**素材礫（825～828）** 明瞭な使用痕跡のない礫であるが、磨石や敲石などの標塊石器の素材となりうるものの一括した。

**礫（605・635・651・660・662～664・829～833）** 660はブロック状の礫である。若干であるが、赤化しており、火を受けたと考えられる。664は棒状の礫である。平坦な一面を除いて黒色の付着物が観察される。662は扁平で楕長の、663は棒状の礫である。擦痕や敲打痕は観察されないが、形状に注目して報告する。この他に、火を受けた痕跡のある礫が遺構内から1点、遺構外から4点の計5点出土している。

第6表 石器組成表

出土層位／器種	石錐	錐形	石鋸	削器	棒器	地状	楔形	R.F. U.F.	剥片・ 鉗片	石核	磨斧	磨石頭	石頭	砥石	他	計
遺構内	1		1	2	1		4	7	42			1	1	1	22	83
II		1				1		1	2			1				6
II a ~ II						1		3	11	1		2			3	21
II c									4							4
II b						1		1	15		2				2	21
II a	3	3		2	1	2	3	16	52	1	1	5			6	95
II a ~ II c							1	1	3	1					2	7
I ~ II a		1		1				1	3						4	10
I								1	2	24	1		3		4	35
泥土等	1		1	1	1				3				1		1	9
計	5	5	2	6	3	5	9	31	159	4	3	13	1	1	44	293

## (5) 石製品 (第45図、写真図版39)

有孔石製品(834) 834は両面からの穿孔による孔部を有する石製品である。素材の凹凸はあるものの表面は全面平滑になっている。遺構外からの出土である。

## (6) 自然遺物 (写真図版40)

貝(901) 1点のみ出土した。縁辺の一部には銳利な部分が観察され、刃器としての用途が想定されるため、報告した。種類等は不明である。

獸骨(902~906) 5点出土した。I層から出土したものが多く、時期を限定することはできなかった。

第7表 自然遺物観察表

掲載番号	整理番号	種類	出土地点・層位	重量(g)	備考
901	4001	貝	3 D · II a	7.22	
902	4002	獸骨	西3・排土・括	11.52	
903	4003	獸骨	B T 102 · I	11.29	
904	4004	獸骨	西1 · I	13.72	
905	4005	獸骨	M T 013 · I	20.06	
906	4006	獸骨	東2 · II a	2.10	

## (7) 陶磁器 (写真図版40)

磁器(911~918) 21点の破片資料が出土した。その多くはI層や擾乱からの出土である。そのうち8点を写真掲載とした。911~915は肥前産、916は瀬戸産と考えられる資料である。

陶器(919~930) 20点の破片資料が出土した。磁器と同様、I層や擾乱からの出土資料が多い。そのうち12点を写真掲載とした。919は美濃産、920~922・929は肥前産、923は大隅相馬産、924~926は相馬産、928は在地産と考えられる資料である。

## (8) 銭貨 (写真図版40)

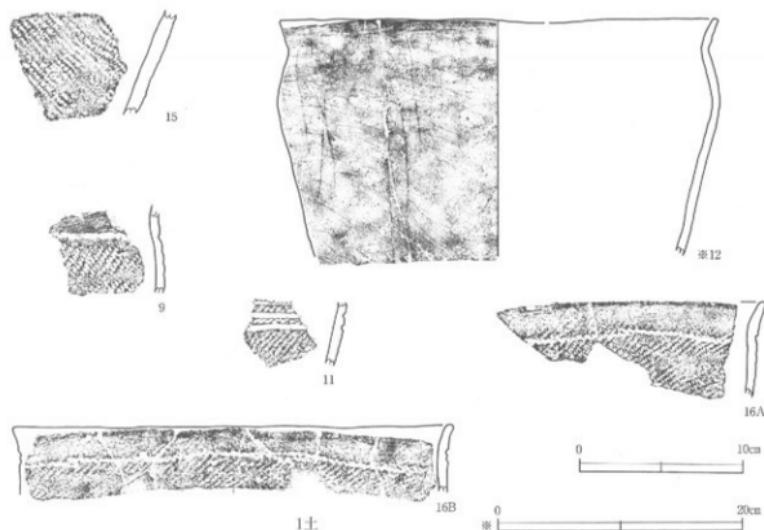
951~953の3点出土した。I層から出土したものが多い。953はI層直下のIIb層から出土した。951の寛永通寶以外は判読できず、無文錢の可能性がある。

第8表 銭貨観察表

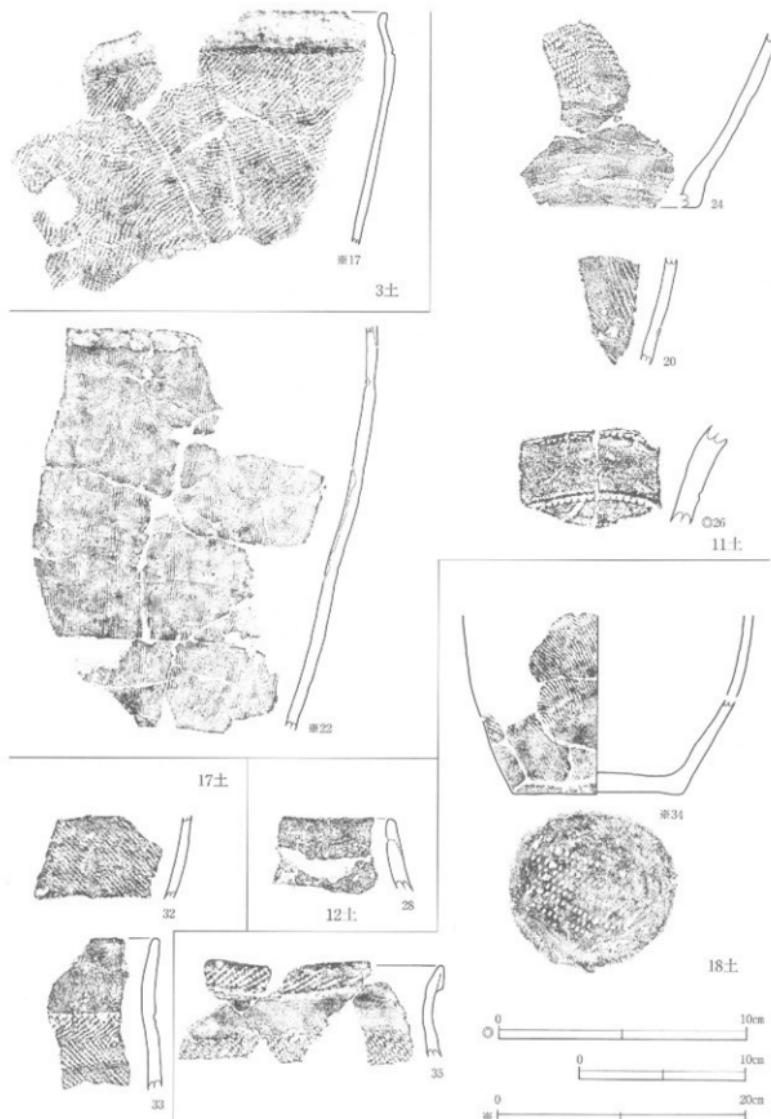
掲載番号	整理番号	種類	出土地点・層位	重量(g)	備考
951	4001	寛永通寶	4 D · I	2.78	新寛永?
952	4002	不明	B T 102 · I	6.47	
953	4003	不明	4 C - 12 · II b	3.44	



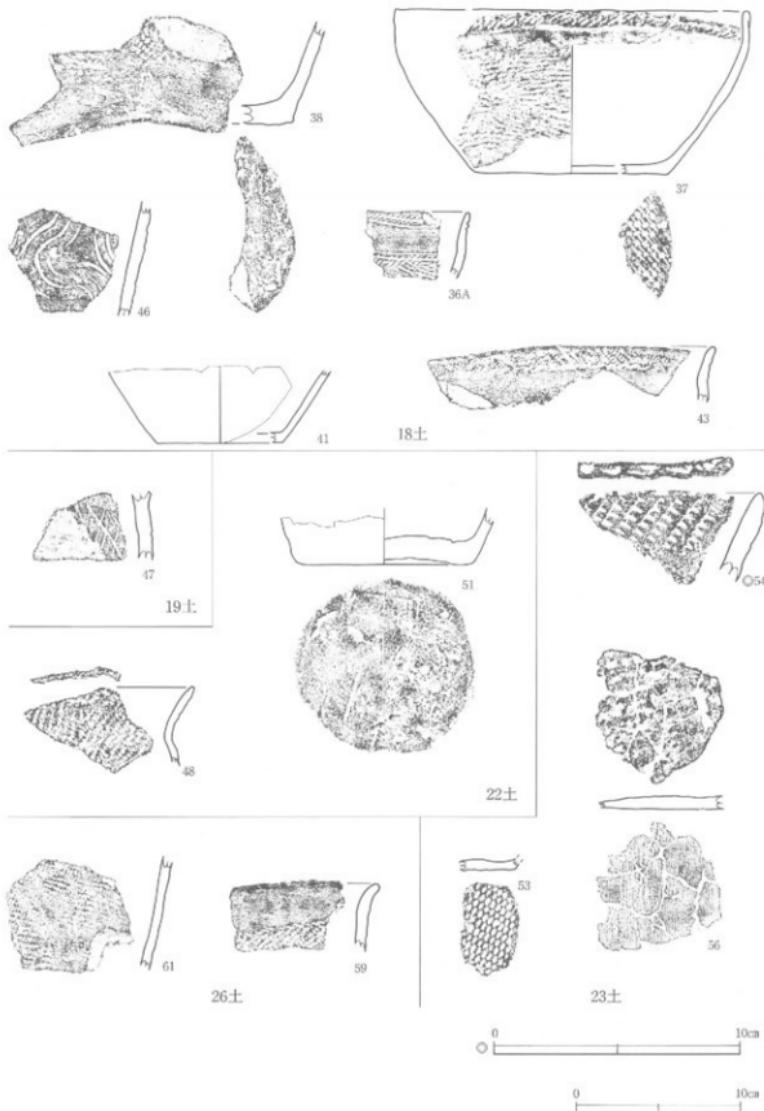
13住状



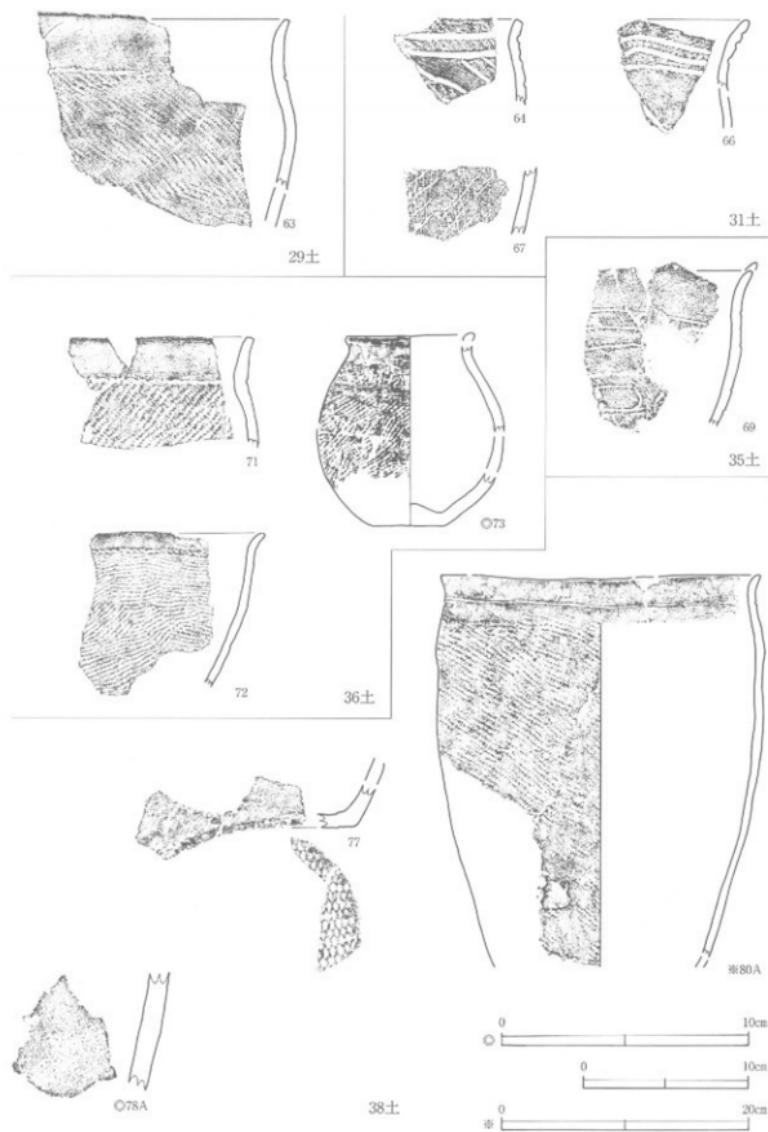
第22図 遺構内出土遺物（土器①）



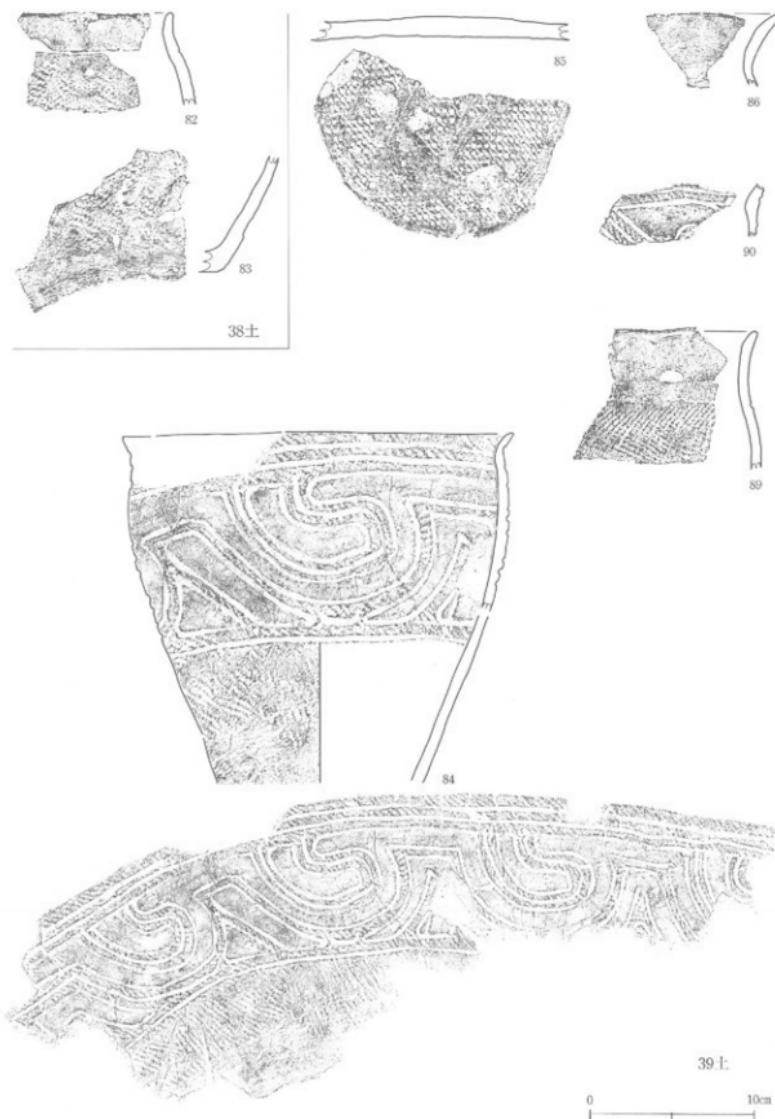
第23図 遺構内出土遺物（土器②）



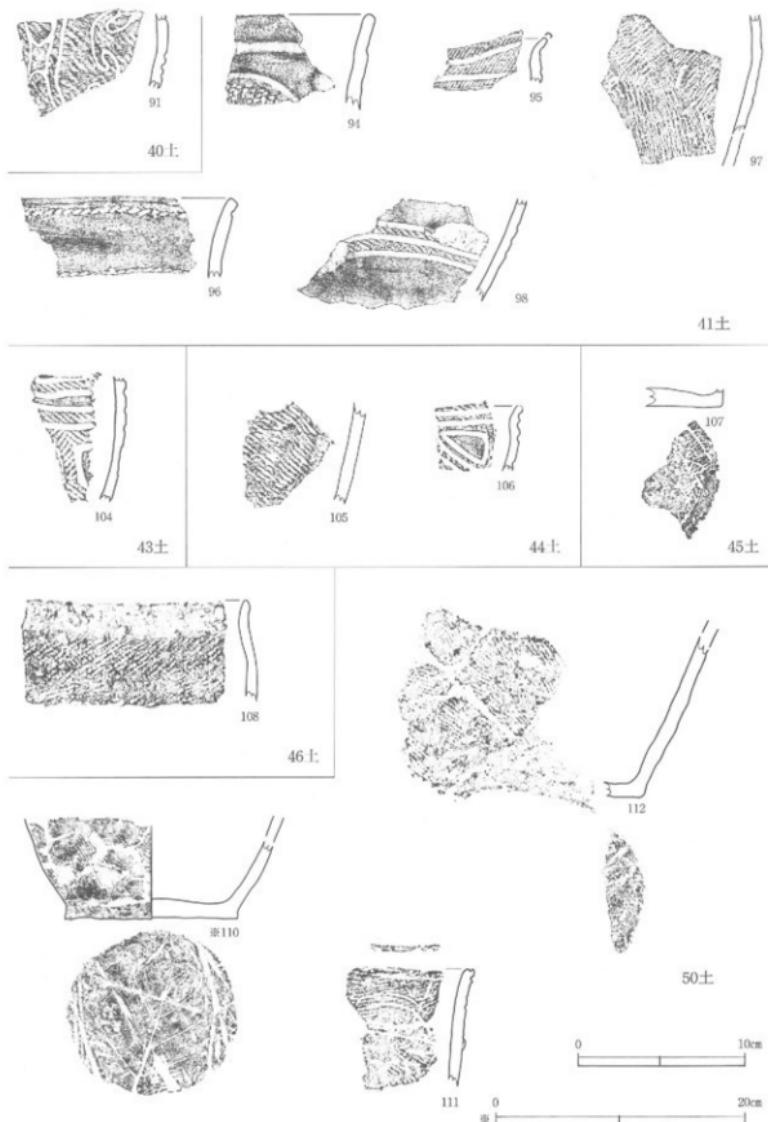
第24図 遺構内出土遺物（土器③）



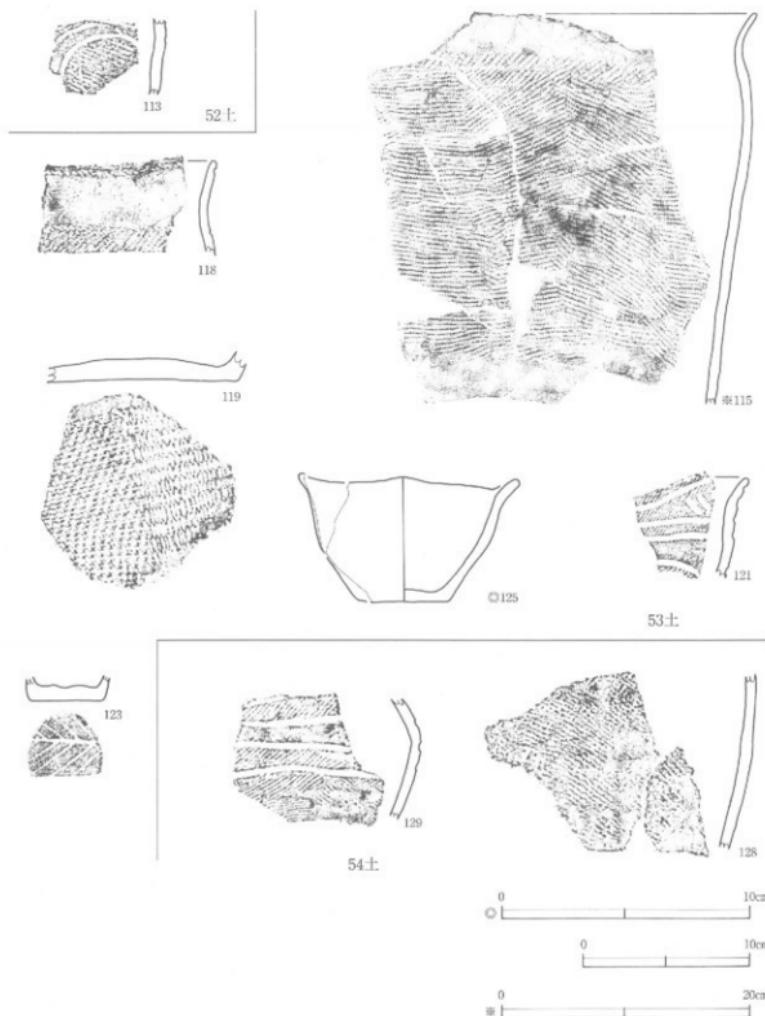
第25図 遺構内出土遺物（土器④）



第26図 遺構内出土遺物（土器⑤）



第27図 遺構内出土遺物（土器⑥）



第28図 遺構内出土遺物（土器⑦）



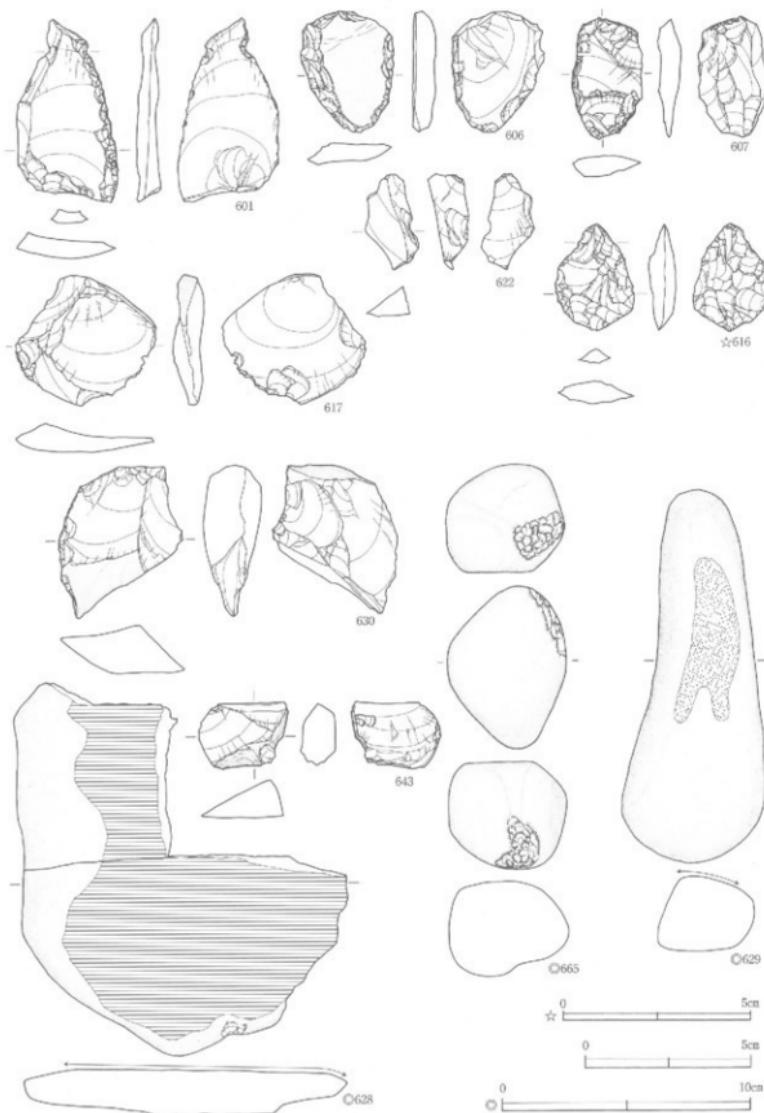
第29図 遺構内出土遺物（土器⑧）



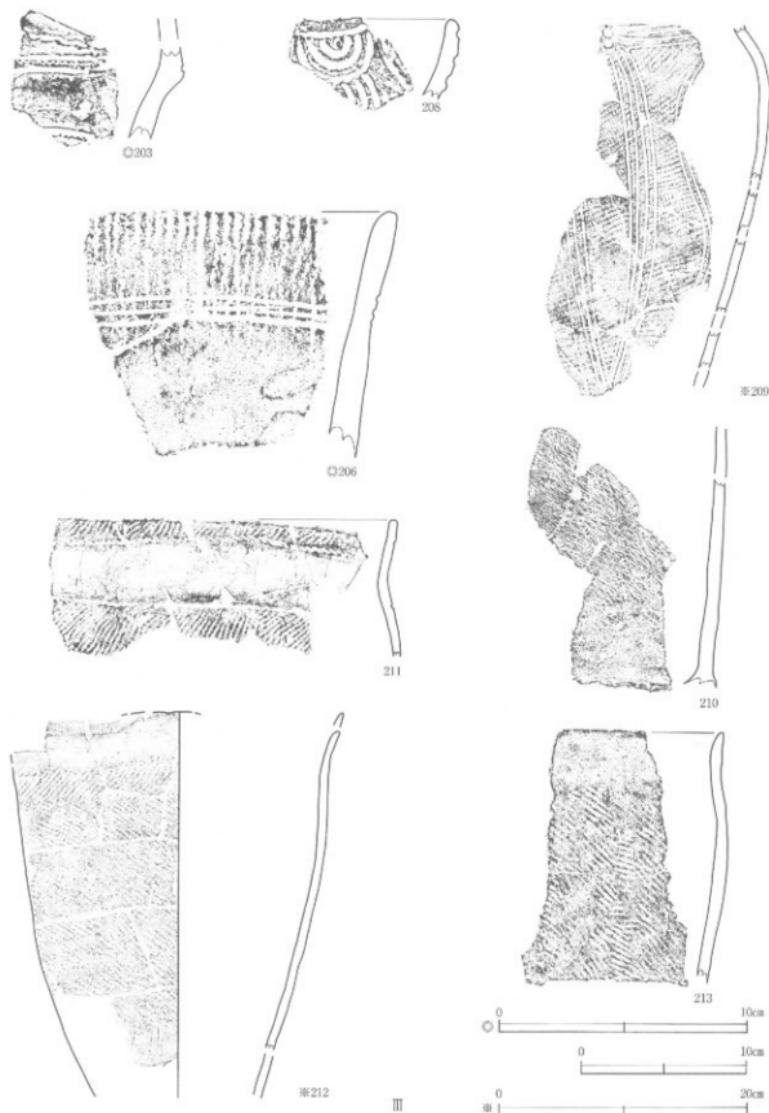
第30図 遺構内出土遺物（土器⑨）



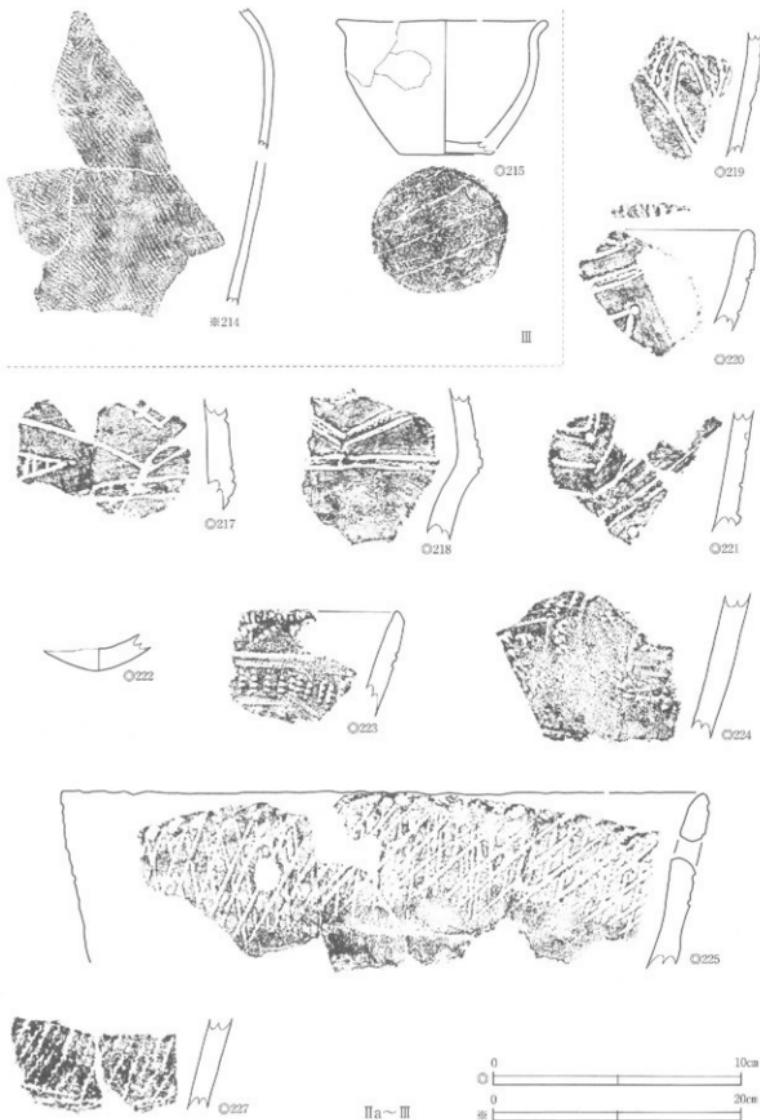
第31図 遺構内出土遺物（土製品）



第32図 遺構内出土遺物（石器）



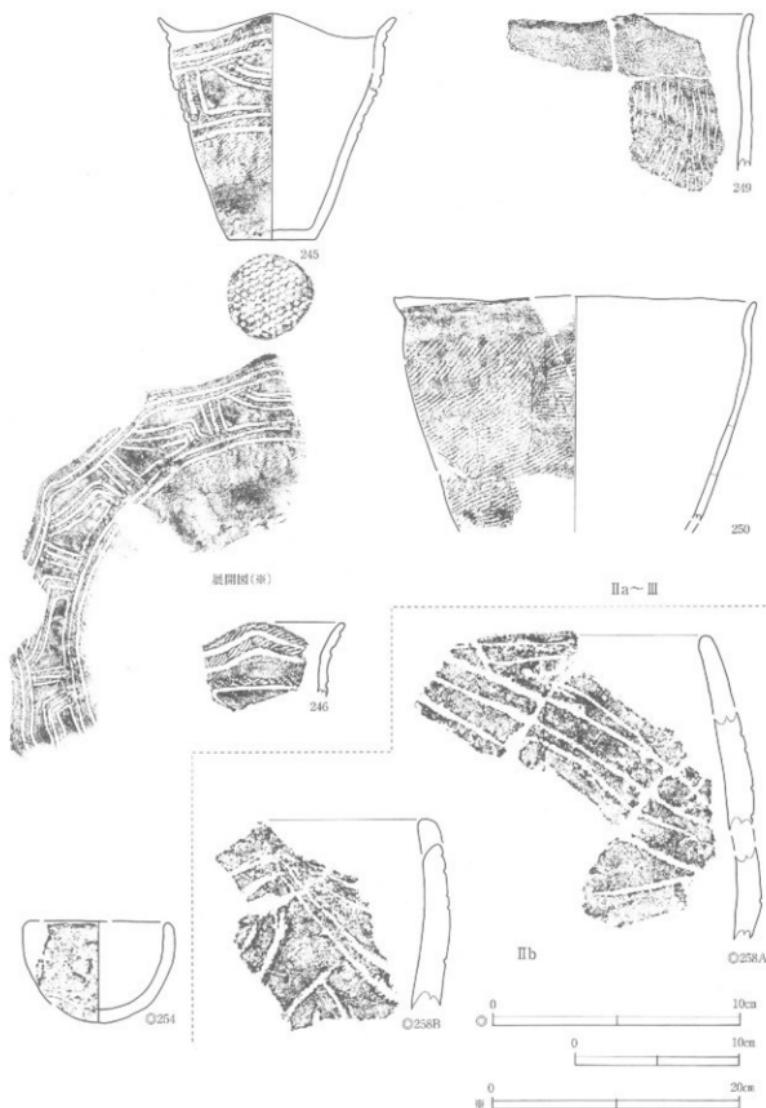
第33図 遺構外出土遺物（土器①）



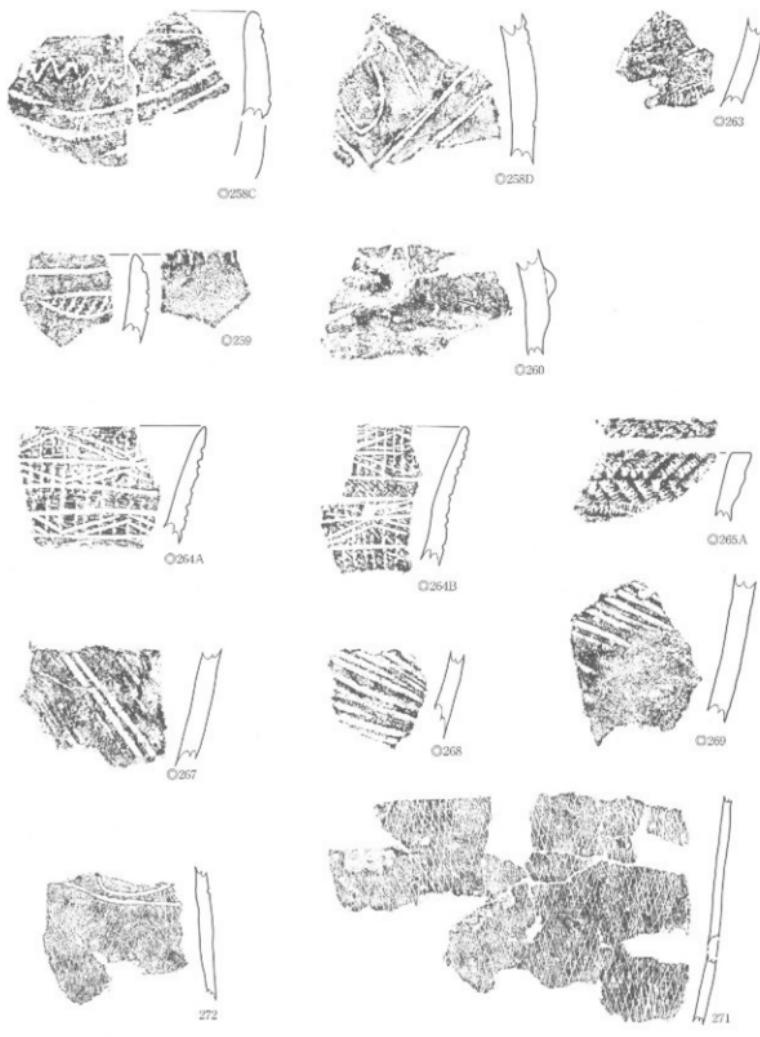
第34図 遺構外出土遺物（土器②）



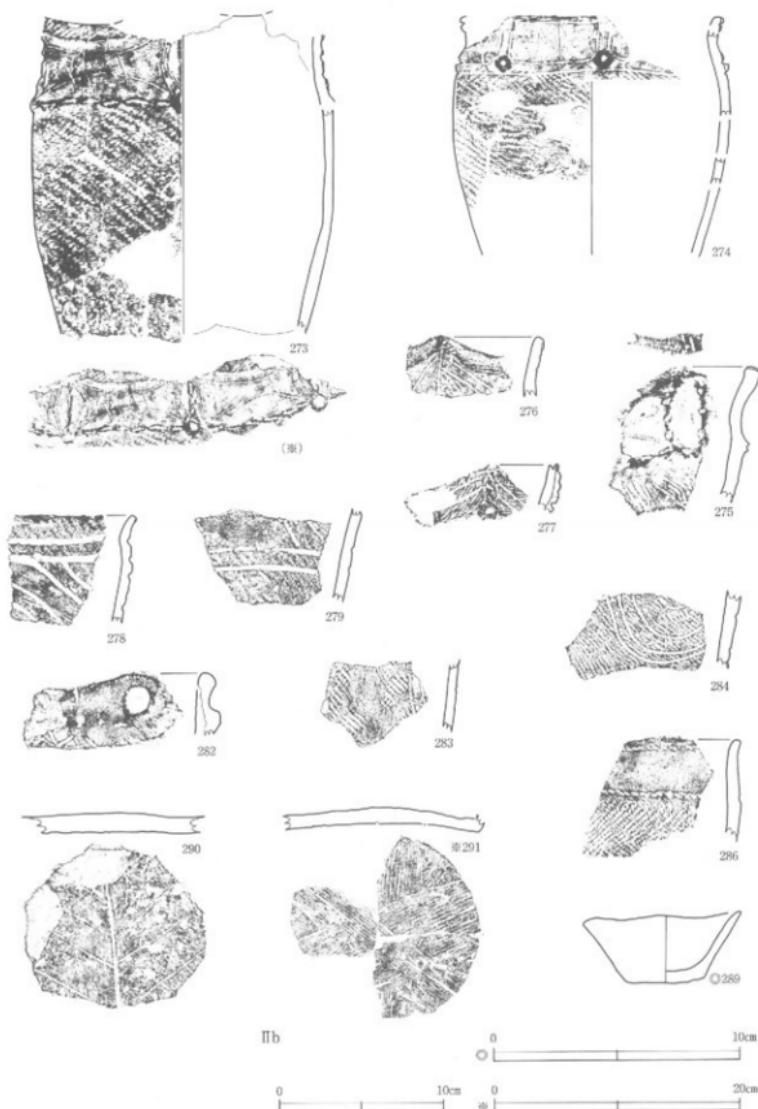
第35図 遺構外出土遺物（土器③）



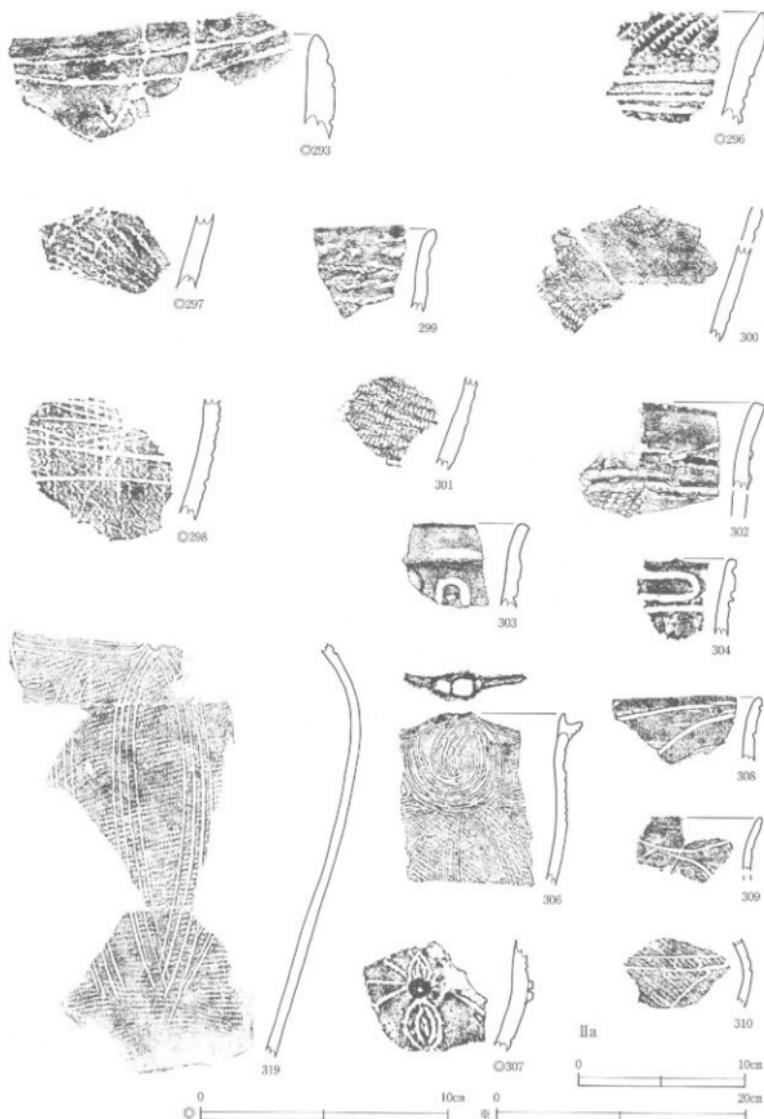
第36図 遺構外出土遺物（土器④）



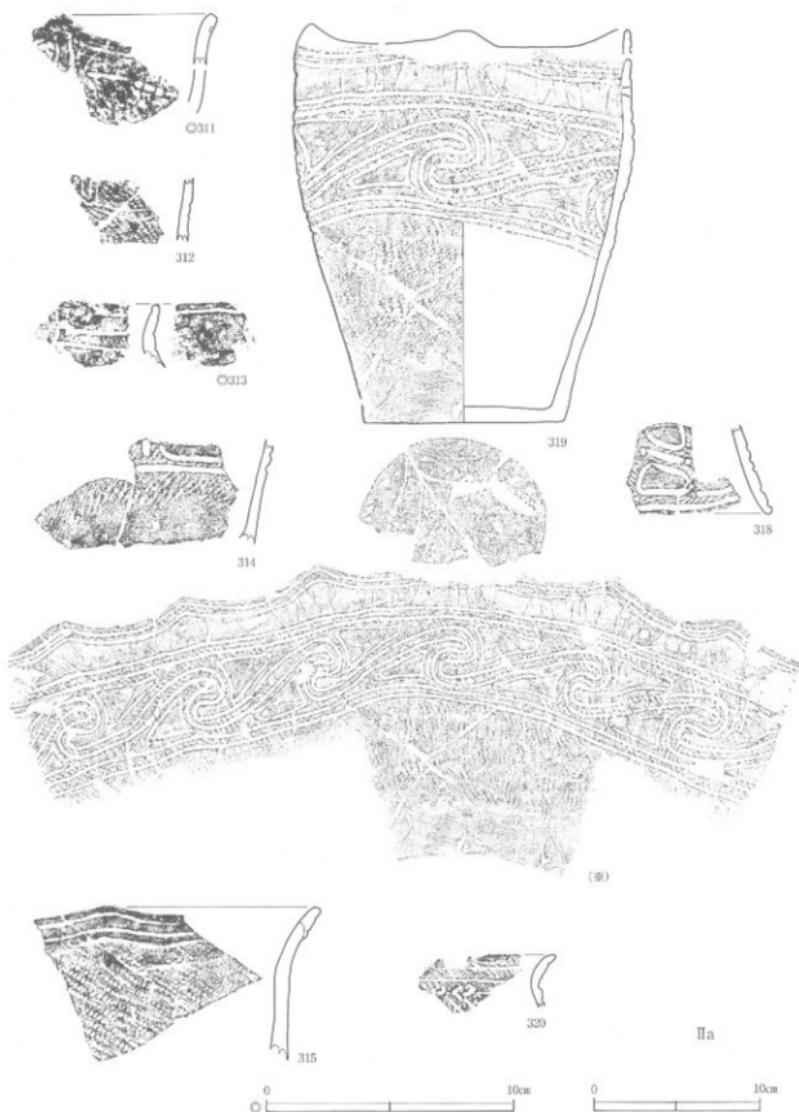
第37図 遺構外出土遺物（土器⑤）



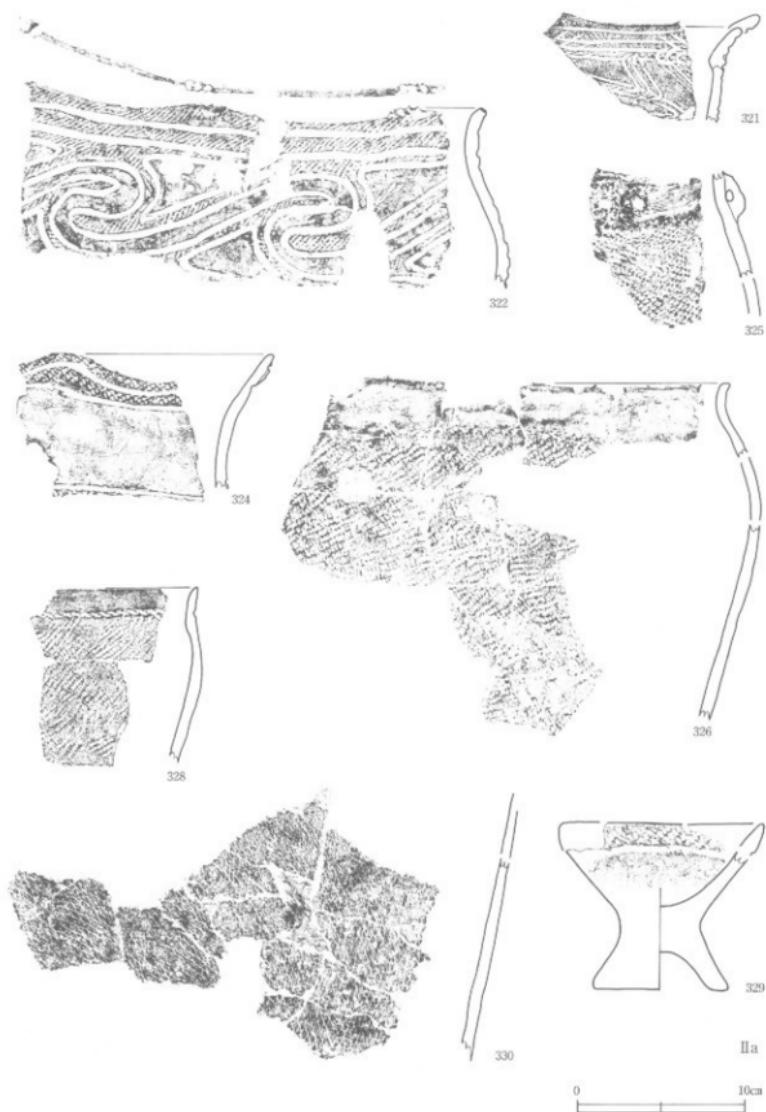
第38図 遺構外出土遺物（土器⑥）



第39図 遺構外出土遺物（土器⑦）



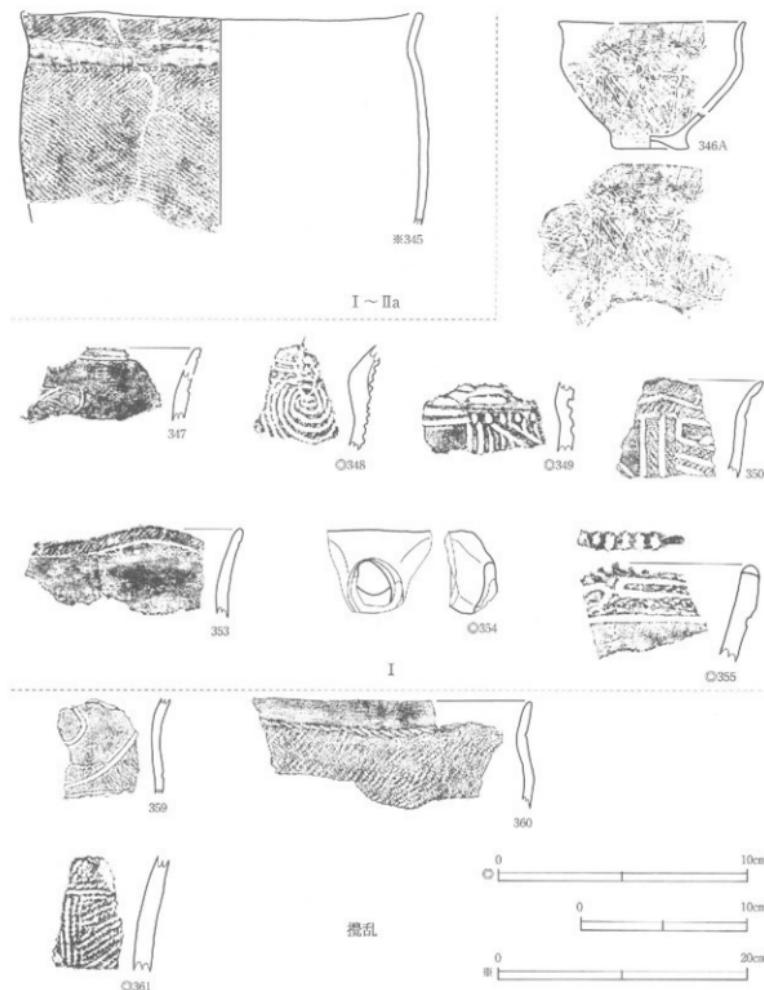
第40図 遺構外出土遺物（土器⑧）



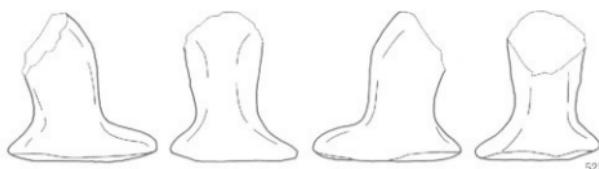
第41図 遺構外出土遺物（土器⑨）



第42図 遺構外出土遺物（土器⑩）



第43図 遺構外出土遺物（土器⑪）



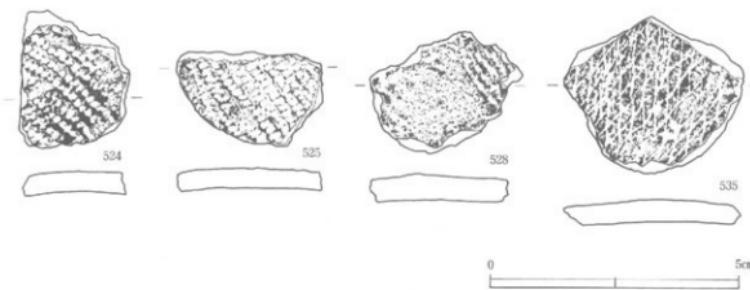
521



522



523



第 44 図 遺構外出土遺物（土製品）



第45図 遺構外出土遺物（石器）

第9表 土器觀察表（1）

【釋義】  
<原生植物、樹種> 俗語：指粗壯者。如：山楂。楓：粗生直條。柳：柳絲  
柳：圓條。柏：直生。杏：杏枝。楊：柳枝。李：李枝。榆：榆葉。松：上：上坡。  
槐：槐葉。柏：柏葉。走：走頭。  
<蟲類> 蛆：內肉。蠋：蠋子。蠋頭。蠋：蠋頭。蠋：蠋頭。蠋：蠋頭。蠋：蠋頭。

第10表 土器鍵醫表 (2)

【例句】  
①他上進點，何況>一>上級。  
②他>是>上級。◎他上進。

第11表 土製品観察表

番号	整理番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴等	備考
501	3101	3土・北覆土中	円盤		縦文: R L	未製品
502	3122	12土・覆土中	円盤		縦文: L ?	
503	3121	18土・南側覆土上位	円盤		無文	半欠け
504	3134	31土・5層	円盤		無文	
505	3123	36土・覆土	上側	培塿	無文	2点接合
506	3102	36土・覆土	円盤		縦文: L ? 織機: 沈織	
507	3120	38土・4層	円盤		縦文: L R	半欠け
508	3126	39土・2層	円盤		縦文: R L	
509	3103	39土・不明	円盤		縦文: L R ?	
510	3104	53土・覆土	不明		無文	
511	3129	56土・覆土	円盤		縦文: L R	半欠け
512	3162	56土・覆土	円盤		縦文: L R 織機: 沈織	半欠け
513	3124	60土・覆土	円盤		無文	半欠け
514	3133	60土・覆土	円盤		縦文: L R	欠け
521	3118	3C-24-II a	七脚	脚	無文	左脚
522	3105	M T010-II b	十脚	脚	無文	左脚?
523	3119	西3-1	錦形?	紐?	無文	
524	3106	西3-I	円盤		縦文: L R	半欠け
525	3110	3C-19-II a~III	円盤		縦文: L R	半欠け
526	3112	西2-I	円盤		縦文: L R	半欠け
527	3117	東5-II a~III	円盤		縦文: L R	半欠け
528	3107	東4-II a	円盤		縦文: L R ?	器底鮮滅
529	3108	4D-6-II a~III	円盤		縦文: L R ?	磨滅著しい
530	3125	3C-14-I	円盤		縦文: L R ?	半欠け
531	3130	3D-17-II a~III	円盤		縦文: L R ? 穿孔(未貫通)	半欠け
532	3163	3D-17-II a	円盤		縦文: L R ?	半欠け
533	3128	4D-6-II a	円盤		縦文?	半欠け
534	3109	3C-21-II b	円盤		羽状(L Rタテ+L Rヨコ)	
535	3115	3C-13-II b	円盤		單輪輪条体第5類	1/3欠け
536	3116	東5-II a~III	円盤		無文	半欠け
537	3127	3C-16-II a~III	円盤		無文	半欠け
538	3111	M T013-錦上一筋	円盤		無文	1/3残存
539	3113	西3-I	不明		無文	

第12表 焼成粘土塊観察表

番号	整理番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴等	備考
551	3001	38土・2層下~4層上	焼成粘土塊			
552	3131	54土・覆土	焼成粘土塊			
553	3132	54土・覆土	焼成粘土塊			
554	3002	58土・1層	焼成粘土塊			
561	3003	東5-I~II a	焼成軋上塊			
562	3004	3C-14-II a	焼成軋上塊			

第13表 石器・石製品觀察表

<第三五五・尾鷲> 例句：伊勢道過路、上、下風、尾：尾上通路、左、右側、  
左上風、右下風、森：森林、内：内里、  
<第四四> のん：のんフタヌキ、のん通、のん野郎、のん御殿、ペア：ペアオナイト、五輪：五輪ノ五輪

## 第V章 まとめ

今回の発掘調査で検出された遺構・出土した遺物の主な時代・時期は縄文時代早期中葉と後期初頭から前葉の2時期である。この時期の調査成果を中心に列記し、まとめとする。

(1) 縄文時代早期中葉に関しては、包含層や遺構の覆土中から物見台式や吹切沢式等の土器が出土しているが、その中に264A・B、265等、南東北を中心とする大寺式・常世式に類似すると考えられる土器が見られる点に本遺跡の特徴がある。同時期と考えられる遺構が検出されなかったため、詳細は今後の調査成果を待たねばならないが、少なくとも福島県を中心とする南東北との交流が窺える貴重な資料と言えよう。

(2) 縄文時代後期初頭から前葉に関しては、門前式や南境式等の土器が出土するとともに、少なくとも39基の土坑が検出された。この土坑の多くは断面形がフラスコ状を呈した、フラスコ状土坑である。この土坑は貯蔵用の施設と考えられている遺構であり、まとまって検出されたことを考えると、竪穴住居等の居住空間は確認されなかつたが、本調査区が当該期の集落の一部であると判断して良いであろう。

(3) 集落の中心となる竪穴住居などの構築物は本調査区の南西側に広がる緩斜面に存在すると考えられる。

### 【引用・参考文献】

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1982「寒風道路発掘調査報告書国道283号線道路改良工事関連遺跡発掘調査」岩手文調査報告書第43集(註)

1991「高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書猿ヶ石川中小河川改修関連発掘調査」岩手文調査報告書第155集

2000「猿舎跡発掘調査報告書一般国道283号仙人幹道改修事業関連道路発掘調査」岩手文調査報告書第363集

2002「権現前遺跡発掘調査報告書は場整備(飯豊地区)事業関連遺跡発掘調査」岩手文調査報告書第384集

2002「岩手県埋蔵文化財発掘調査金略報(平成13年)」岩手文調査報告書第397集

2003「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成14年)」岩手文調査報告書第423集

2004「久重沢遺跡発掘調査報告書迫野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査」岩手文調査報告書第435集

2004「柄洞Ⅱ遺跡発掘調査報告書迫野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査」岩手文調査報告書第436集

2004「平倉観音遺跡発掘調査報告書飯宮は場敷地鶴川左岸地区工事関連遺跡発掘調査」岩手文調査報告書第448集

遠野市教育委員会

1991「恵田遺跡事業開拓整備事業松崎地区関連遺跡発掘調査」岩手県遠野市埋蔵文化財調査報告書第3集

1991「高瀬Ⅱ遺跡－猿ヶ石川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－」

遠野市埋蔵文化財調査報告書第4集

1994「木宿遺跡－遠野市立上渕中学校建設に伴う遺跡発掘調査－」遠野市埋蔵文化財調査報告書第7集

1997「寒風Ⅰ遺跡－遠野駅の駅整備事業関連遺跡発掘調査－」遠野市埋蔵文化財調査報告書第10集

1998「印子遺跡事業払い手育成基盤事業関連遺跡発掘調査(赤沢川地区第11号委託)」

遠野市埋蔵文化財調査報告書第11集

2002「新田Ⅱ遺跡」遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集

註：岩手文調査報告書は岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書の略である。

## 附編 岩手県遠野市夫婦石袖高野遺跡の火山灰分析

株式会社古環境研究所

### 1. 調査分析の目的

東北地方北部岩手県域には、十和田、岩手、秋田駒ヶ岳、焼石岳、鳴子など東北地方の火山のほか、洞爺、三瓶、御岳、始良、阿蘇など遠方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、夫婦石袖高野遺跡において発掘調査担当者により採取されたテフラ試料について、テフラ組成分析と屈折率測定を行って、試料に含まれるテフラの起源についての記載を行うことになった。

### 2. テフラ組成分析

#### (1) 分析試料と分析方法

試料を対象として、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料 10g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により 80°C で乾燥。
- 4) 分析顕微鏡により 1/4 ~ 1/8 mm の粒子を箇別。
- 5) 偏光顕微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別比率を求める（火山ガラス比分析）。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉱物 250 粒子を観察し、重鉱物組成を明らかにする（重鉱物組成分析）。

#### (2) 分析結果

分析結果をダイヤグラムにして図 1 に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を表 1 と表 2 に示す。試料に含まれる火山ガラスは、量が多い順に、スponジ状に発泡した軽石型（10.8%）、鐵錐束状に発泡した軽石型（4.4%）、分厚い中間型（2.4%）、平板状のいわゆるバブル型（無色透明、2.0%）である。一方、重鉱物としては、量が多い順に斜方輝石（41.2%）、磁鐵鉱（21.2%）、角閃石（16.0%）、黒雲母（11.2%）、單斜輝石（7.6%）が含まれている。

### 3. 屈折率測定

#### (1) 測定試料と測定方法

テフラ試料を対象として、位相差法（新井、1972）をもとに開発された温度変化型屈折率測定装置（古澤地質調査事務所製作、MAIOT）により、屈折率測定を行った。

#### (2) 測定結果

試料に含まれる火山ガラスの屈折率 ( $n$ ) は、1.508-1.512 である。

### 4. 考察

現地において層相を観察できなかったことから、詳細についての情報不足は否めないものの、屈折率測定の対象となった試料に含まれる火山ガラスは、その形態や屈折率などから、約 5,500 年前<sup>①</sup>に十和田火山か

ら噴出した十和田中嶽テフラ (To-Cu、大池ほか、1966、早川、1983、福田、1986、町田・新井、1992) に由来する可能性が高いと考えられる。

## 5.まとめ

夫婦石袖高野遺跡で検出送付された試料について、テフラ組成分析と屈折率測定を行った。その結果、試料には十和田中嶽テフラ (To-Cu、約5,500年前<sup>\*1</sup>) に由来するテフラ粒子が多く含まれていると考えられる。

\*1 放射性炭素 (<sup>14</sup>C) 年代、町田・新井 (2003)によれば、To-Cu の暦年較正年代は約6,000年前と記載されている。

## 文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定 - テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、p.254-269。
- 福田友之 (1986) 考古学からみた「中津軽石」の降下年代。弘前大学考古学研究、3、p.4-15。
- 早川由紀夫 (1983) 十和田火山中嶽テフラ層の分布、粒度組成、年代。火山、第2集、28、p.263-273。
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会、276p。
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス。東京大学出版会、336p。
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ。科学、51、p.562-569。
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之 (1966) 馬鹿川中・下流沿岸の段丘と火山灰。第四紀研究、5、p.29-35。

附表1 火山ガラス比分析

bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	その他	合計
5	0	0	6	27	11	201	250

数字は粒子数。bw：バブル型、md：中間型、pm：経石型、cl：無色透明、pb：淡褐色、br：褐色、sp：スボンジ状、fb：纖維束状。

附表2 重鉱物組成分析結果

ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
0	103	19	40	28	53	7	250

数字は粒子数。ol：カンラン石、opx：斜方輝石、cpx：单斜辉石、ho：角闪石、bi：黑碧母、mt：磁铁矿。

# 写 真 図 版

空撮・現況・層序等：1・2

縄文時代他 遺構写真：3～17

遺物写真：18～40



遠跡遠景



刈り払い後

写真図版 1 空撮・刈り払い



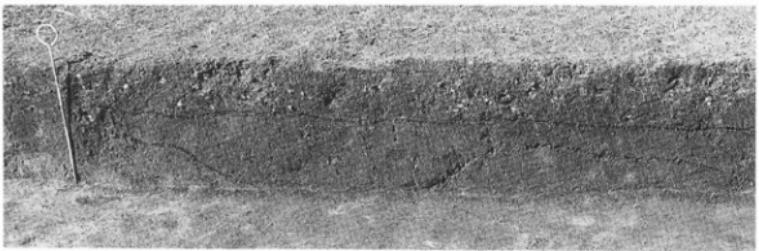
遺跡現況



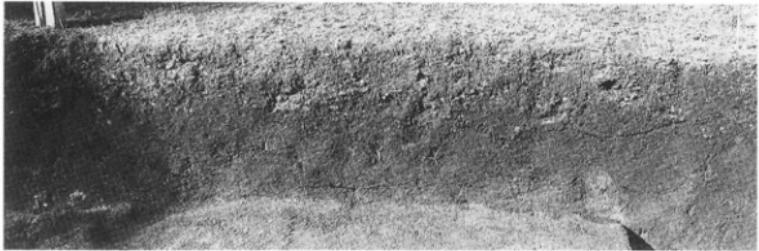
遺跡現況



基本層序 1



基本層序 2

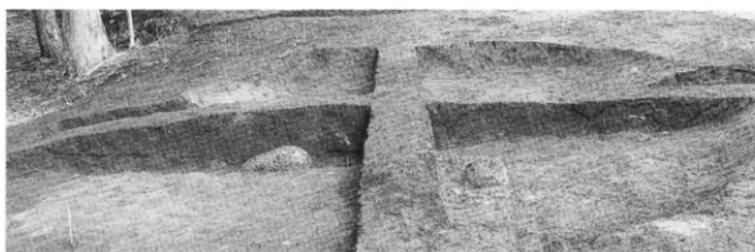


基本層序 3

写真図版2 現況・基本層序



平面



断面（北東から）



断面

13号住居状遺構

写真図版3 住居状遺構



1号土坑



断面



遗物出土状况



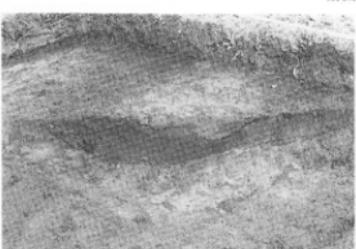
3号土坑



断面



7号土坑



断面

写真图版4 土坑（1）



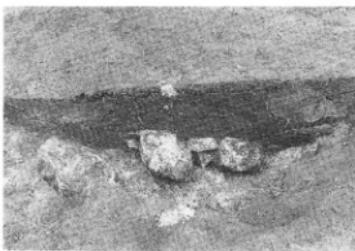
11号土坑



断面



12号土坑



断面



17号土坑



断面



19号土坑



断面

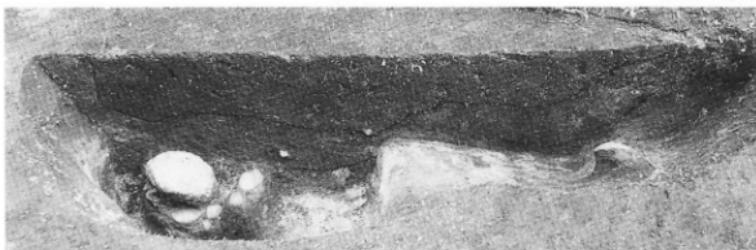
写真図版5 土坑（2）



平面



遺物出土状況



18号土坑

断面



平面



断面



平面



断面

22号土坑

写真図版6 土坑（3）



26号土坑



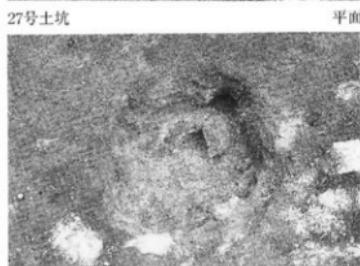
断面



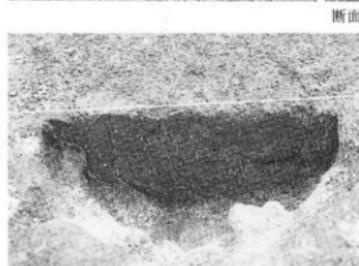
27号土坑



断面



28号土坑



断面



29号土坑



断面

写真圆版 7 土坑 (4)

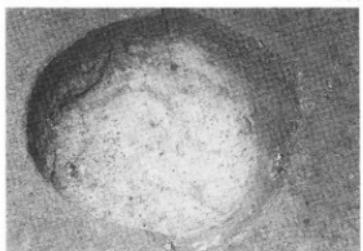


31号土坑

平面



断面



35号土坑

平面



断面



36号土坑

平面



断面



38号土坑

平面



断面

写真図版8 土坑（5）

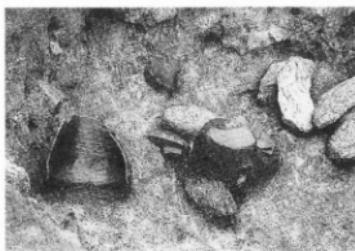


39号土坑

平面



断面



遗物出土状况



40号土坑

平面



断面



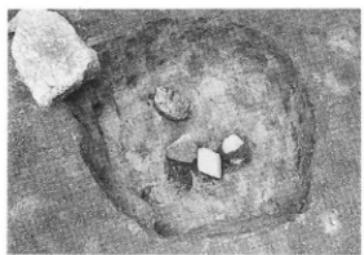
41号土坑

平面



断面

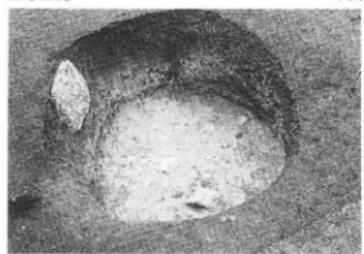
写真图版9 土坑（6）



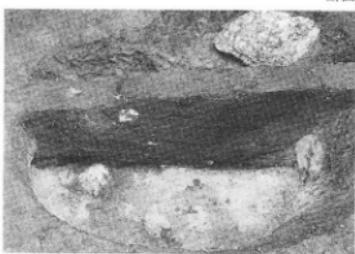
43号土坑



断面



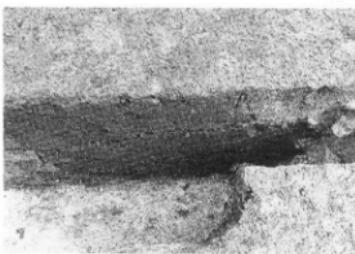
44号土坑



断面



45号土坑



断面



46号土坑

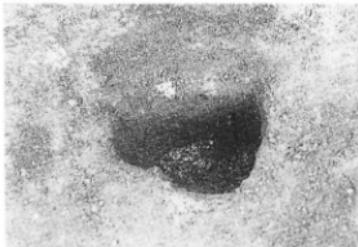


断面

## 写真图版 10 土坑 (7)



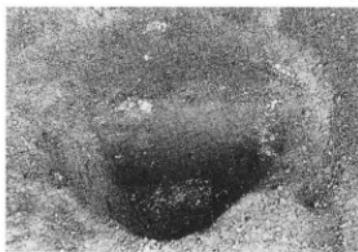
47号土坑



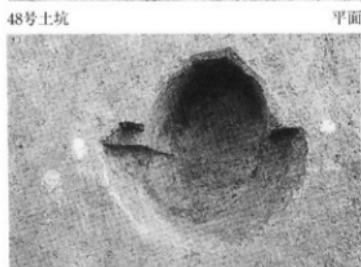
断面



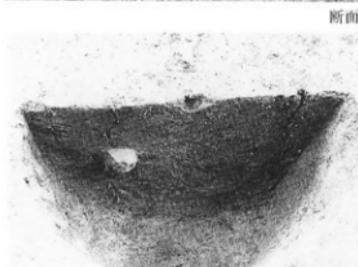
48号土坑



断面



49号土坑



断面



50号土坑



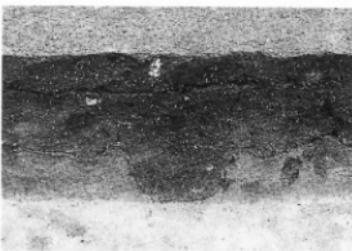
断面

写真図版 11 土坑 (8)



51号土坑

平面

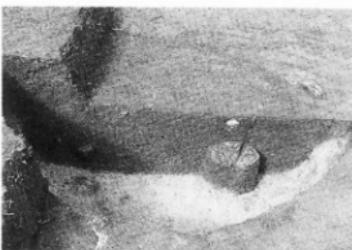


断面



52号土坑

平面

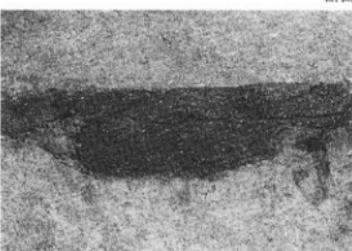


断面



54号土坑

平面



断面



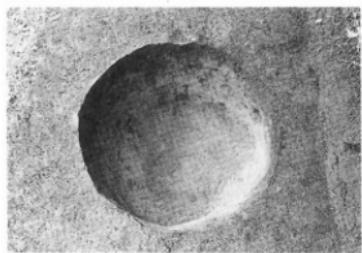
56号土坑

平面

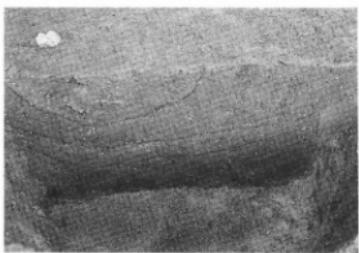


断面

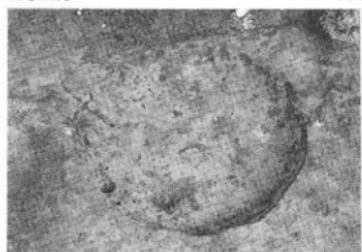
写真図版 12 土坑（9）



58号土坑



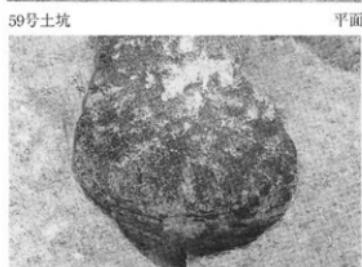
断面



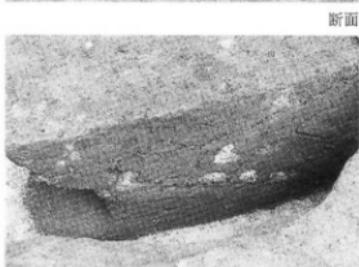
59号土坑



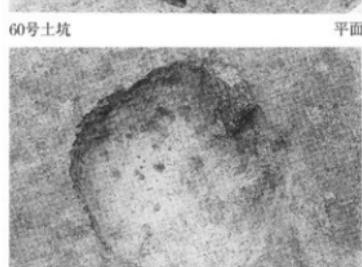
断面



60号土坑



断面

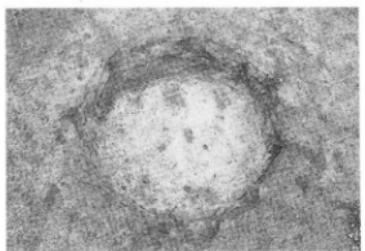


61号土坑

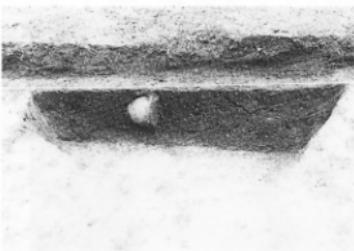


断面

写真図版 13 土坑 (10)



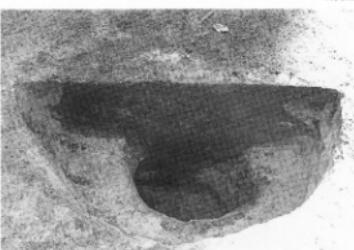
62号土坑



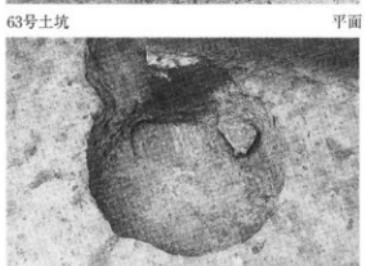
断面



63号土坑



断面



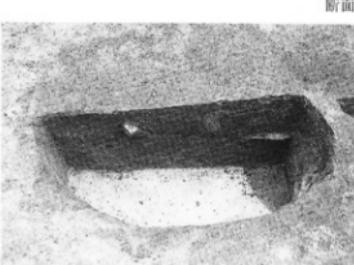
64号土坑



断面



65号土坑



断面

写真図版 14 土坑 (11)



66号土坑



断面



67号土坑



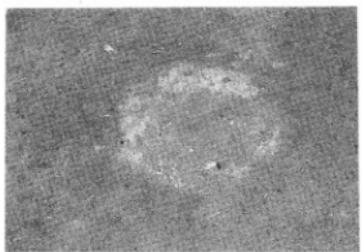
断面



68号土坑



断面

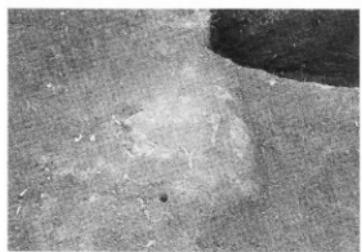


4号焼土遺構

平面



断面

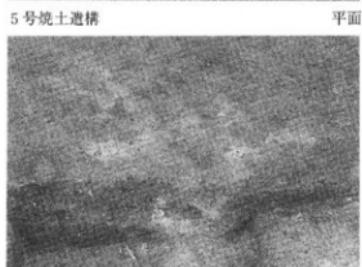


5号焼土遺構

平面



断面

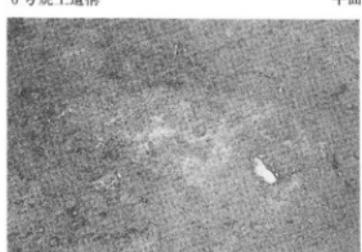


6号焼土遺構

平面

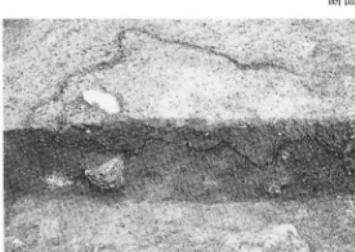


断面



8号炉跡

平面



断面

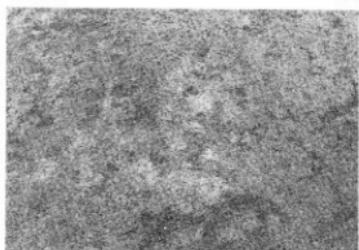
写真図版 16 焼土遺構・炉跡（1）



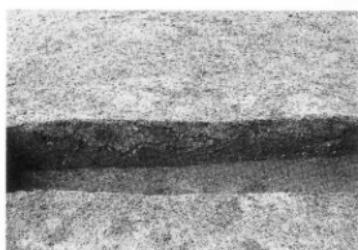
10号炉跡



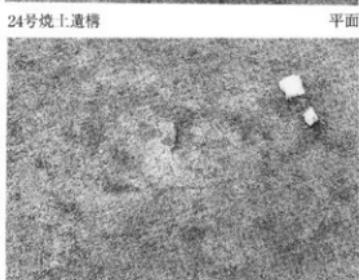
断面



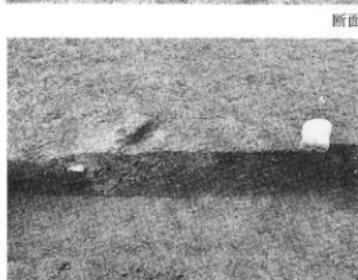
24号焼土遺構



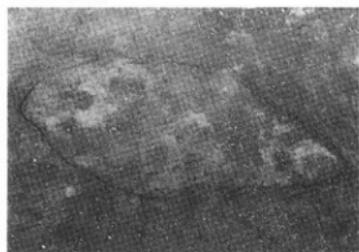
断面



25号焼土遺構



断面

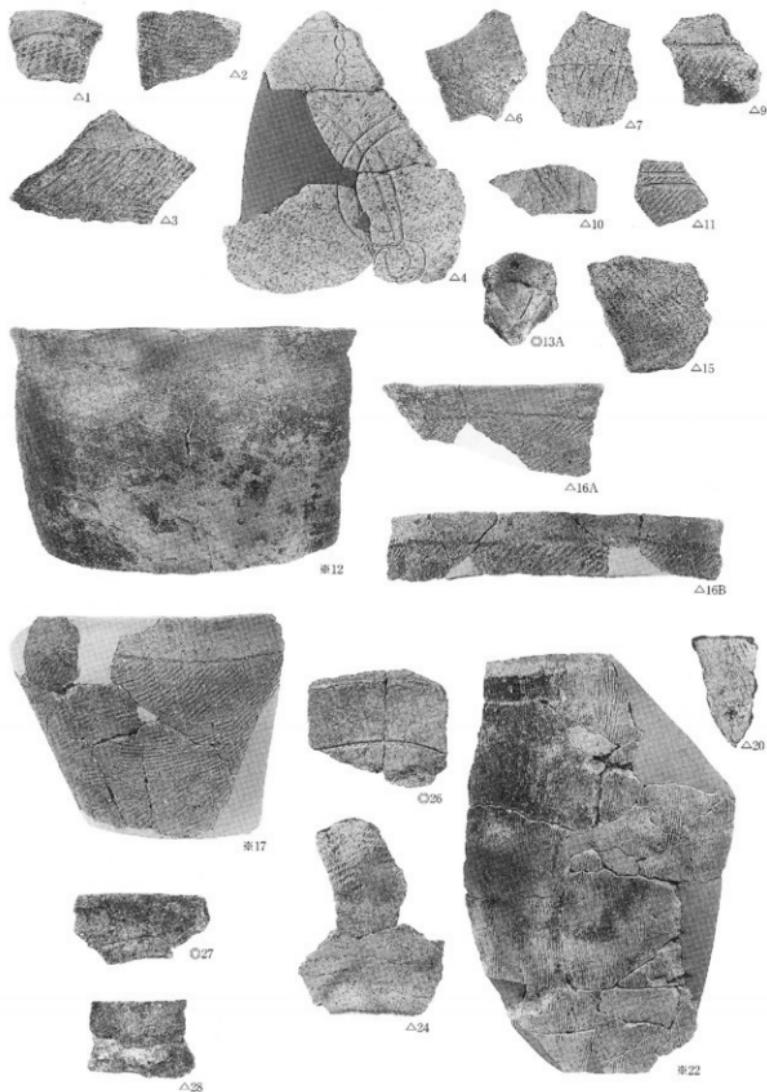


57号焼土遺構

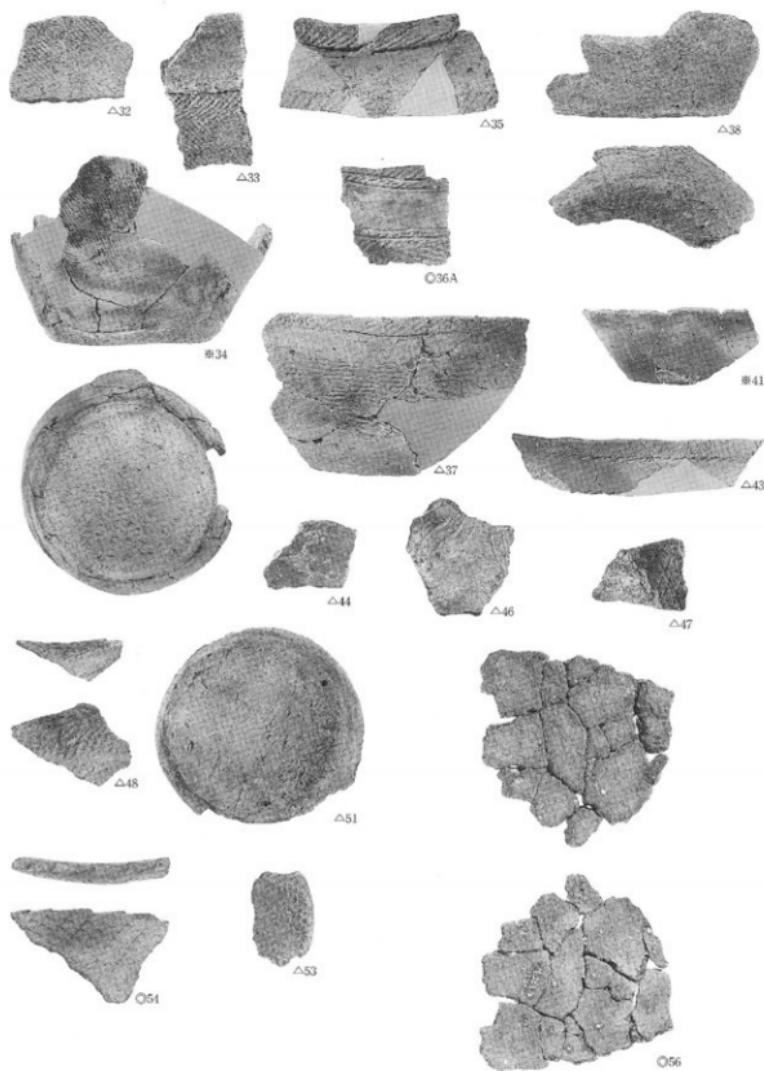


断面

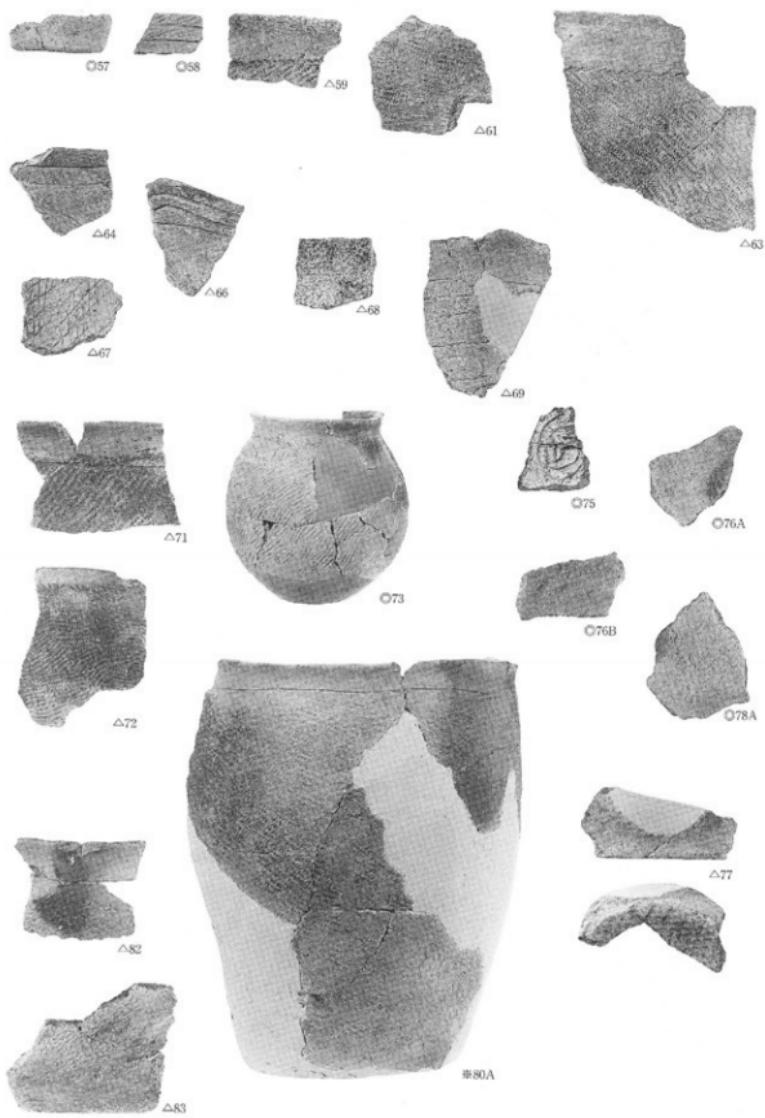
写真図版 17 焼土遺構・炉跡 (2)



写真図版 18 遺構内出土遺物（土器①）



写真図版 19 遺構内出土遺物（土器②）



写真図版 20 遺構内出土遺物（土器③）



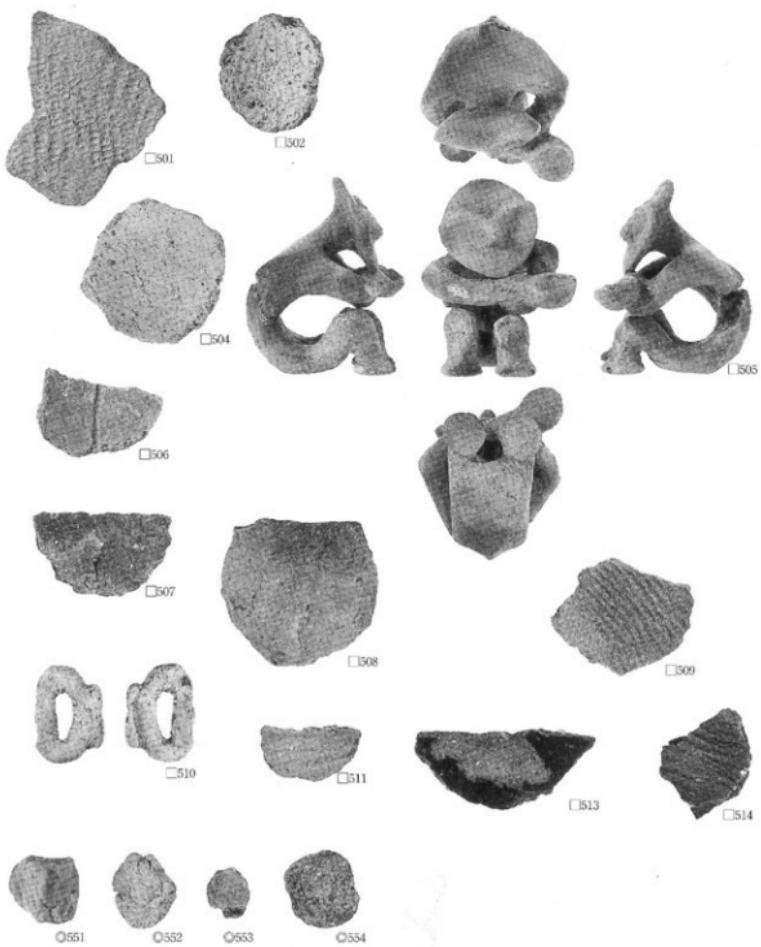
写真図版 21 遺構内出土遺物（土器④）



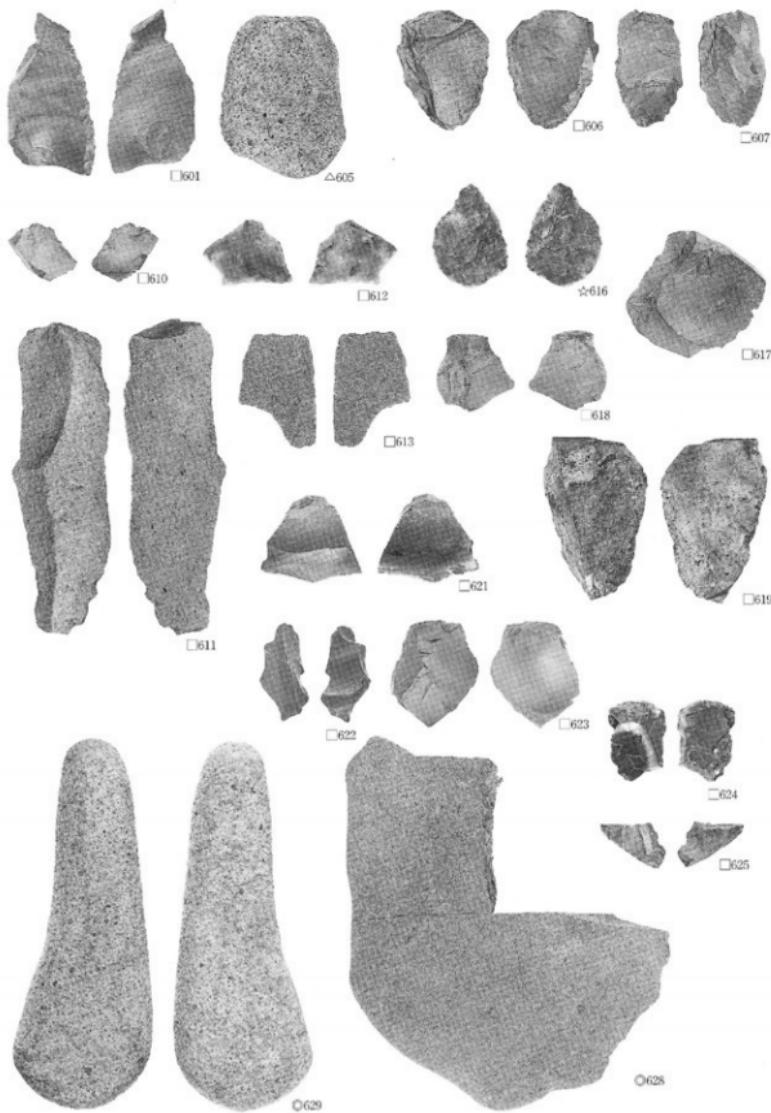
写真図版 22 遺構内出土遺物（土器⑤）



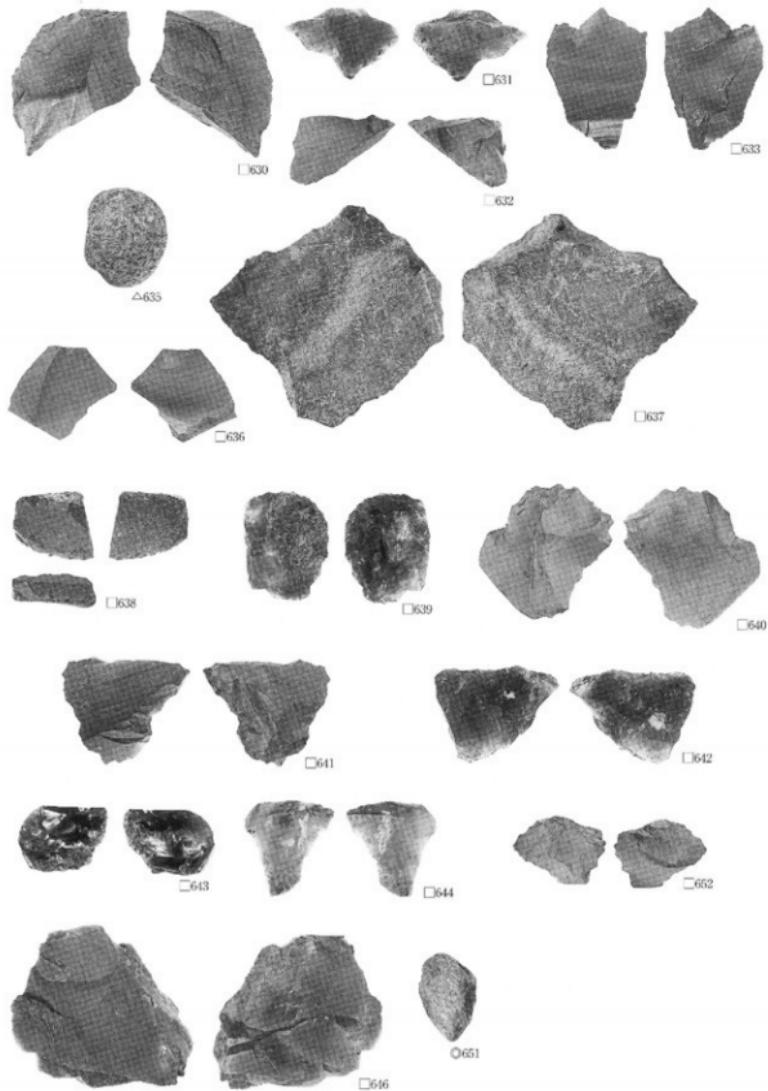
写真図版 23 遺構内出土遺物（土器⑥）



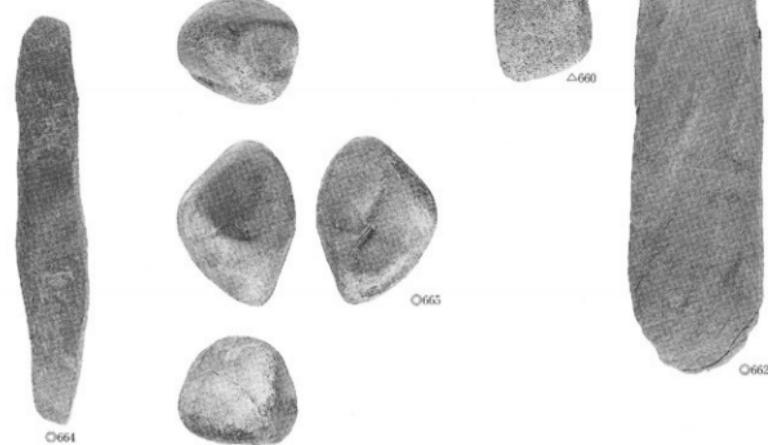
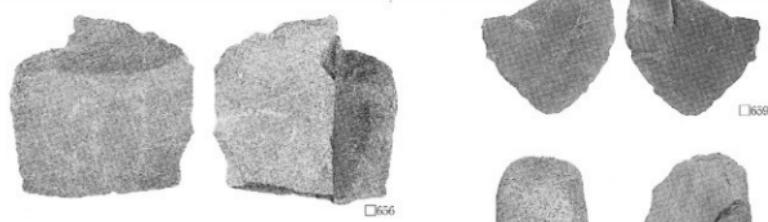
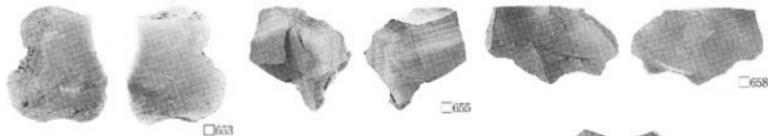
写真図版 24 遺構内出土遺物（土製品・焼成粘土塊）



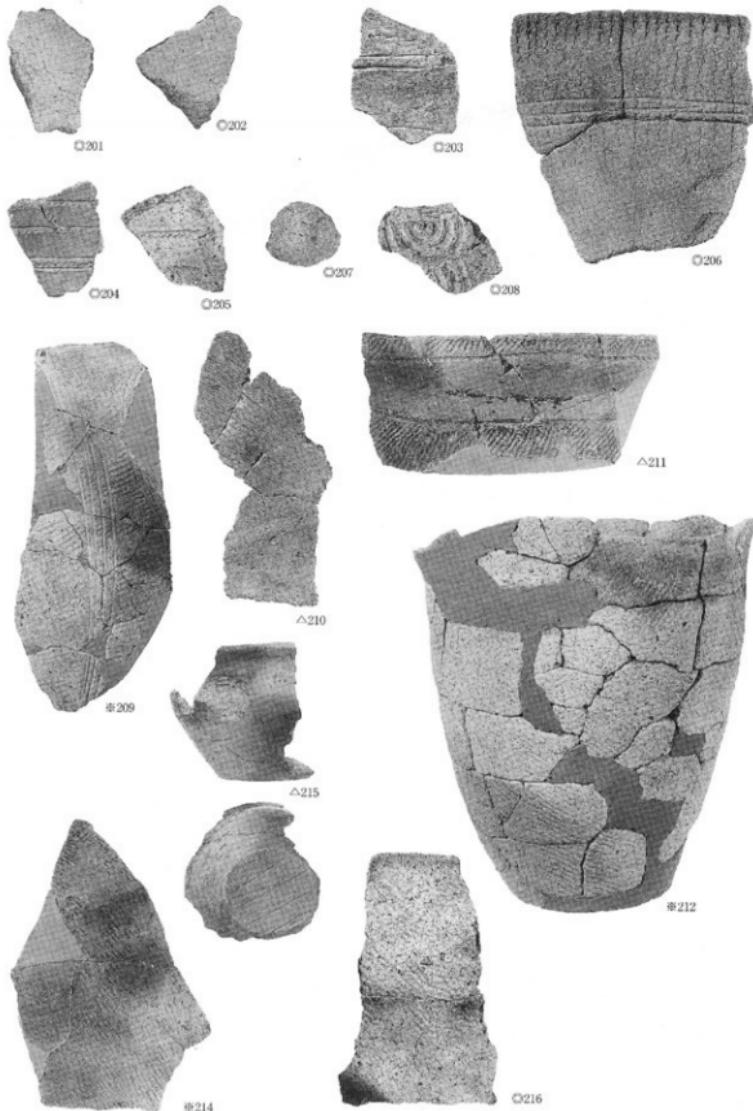
写真図版 25 遺構内出土遺物（石器①）



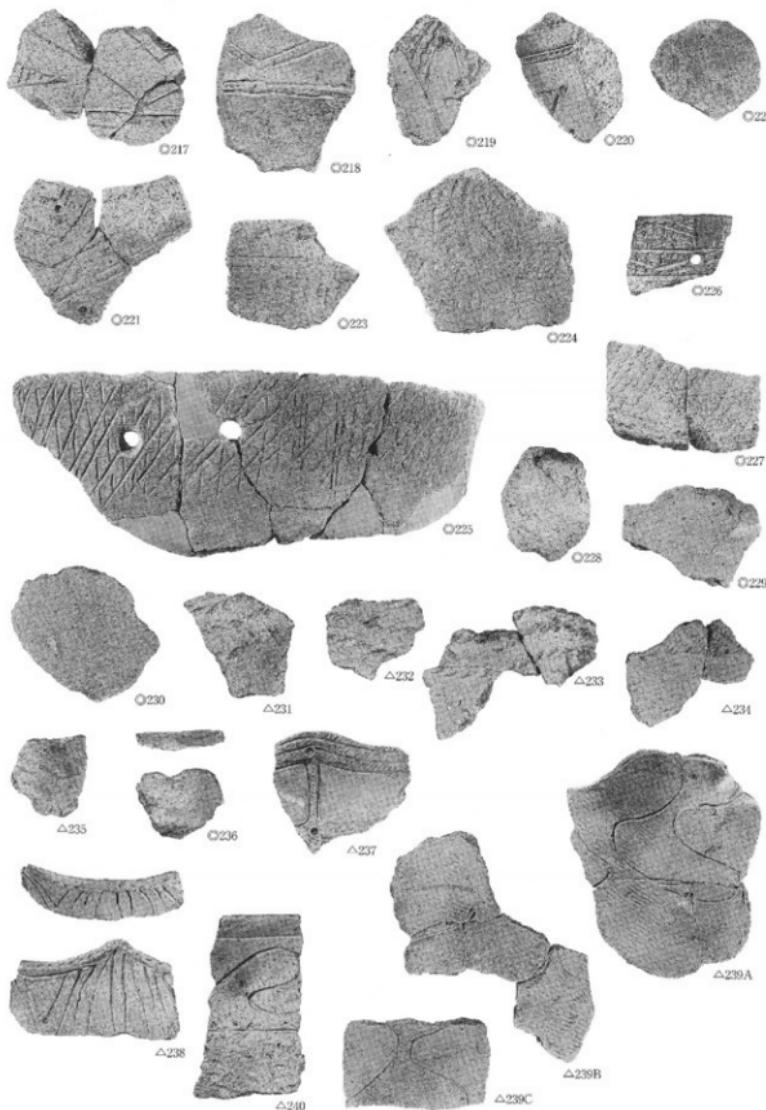
写真図版 26 遺構内出土遺物（石器②）



写真図版 27 遺構内出土遺物（石器③・自然遺物）



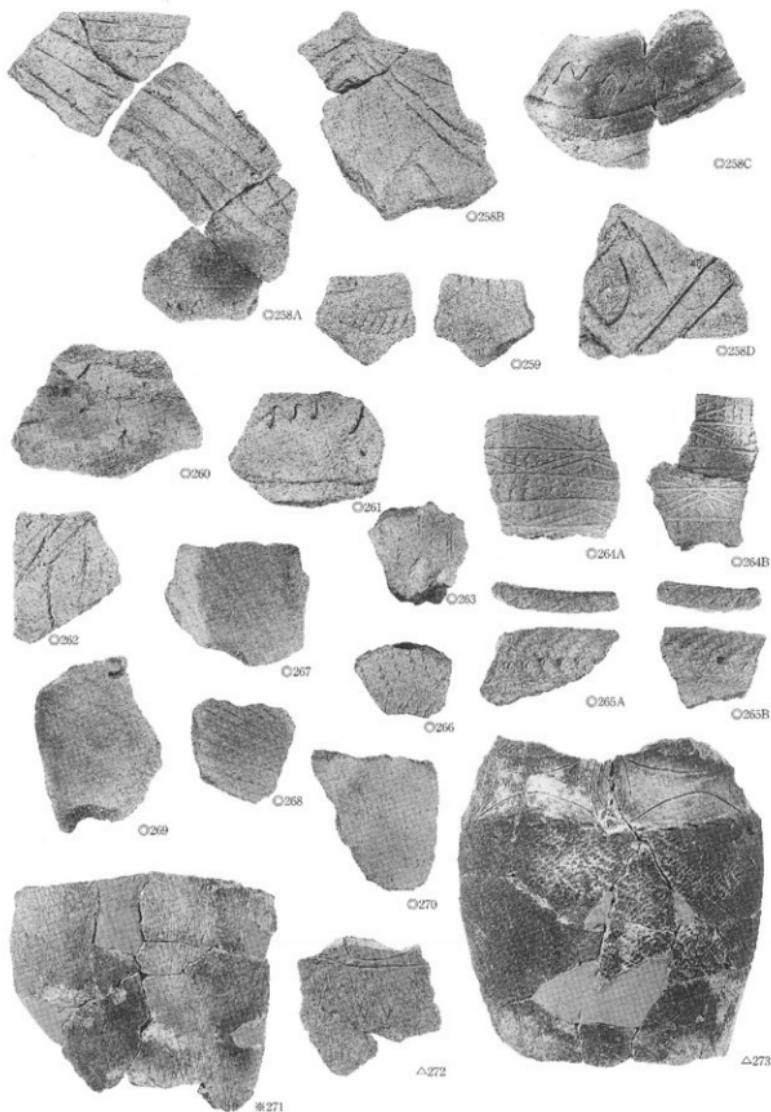
写真図版 28 遺構外出土遺物（土器①）



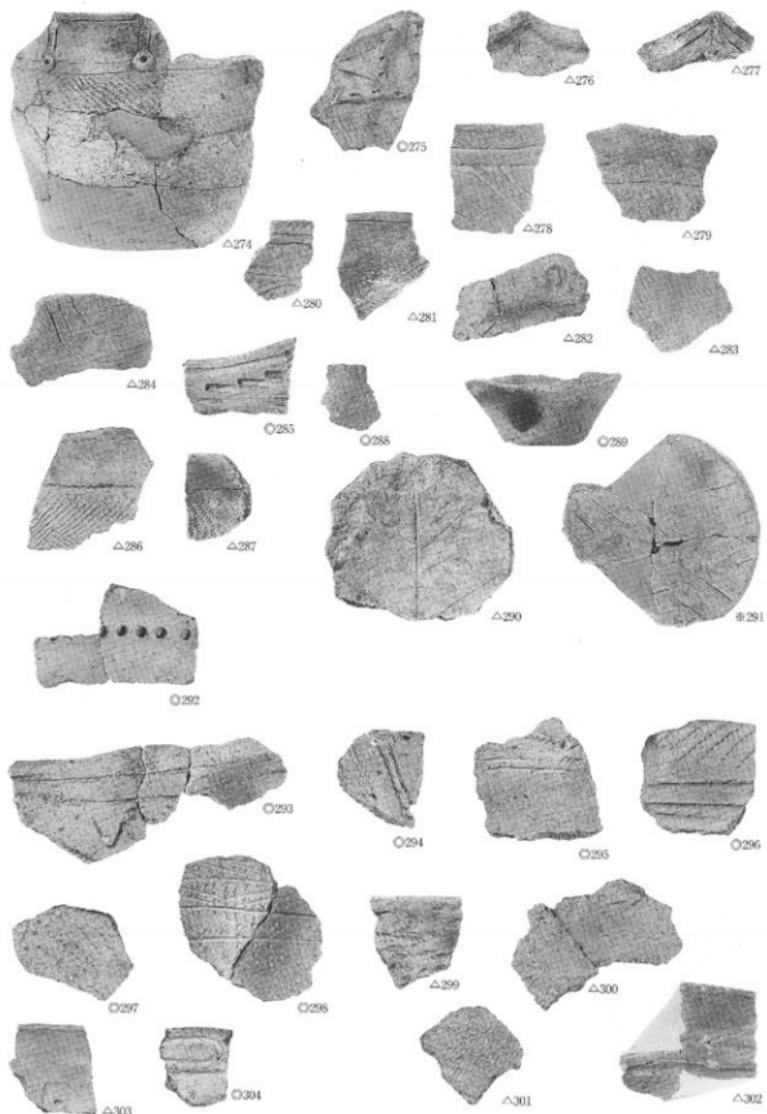
写真図版 29 遺構外出土遺物（土器②）



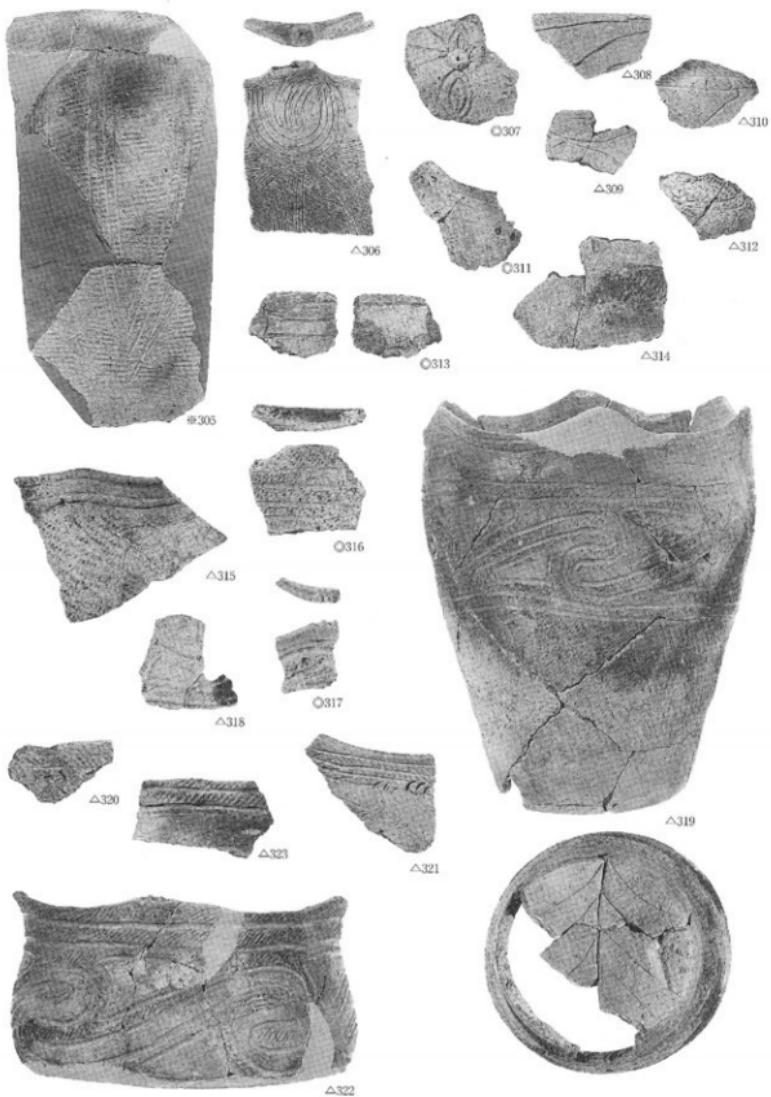
写真図版 30 遺構外出土遺物（土器③）



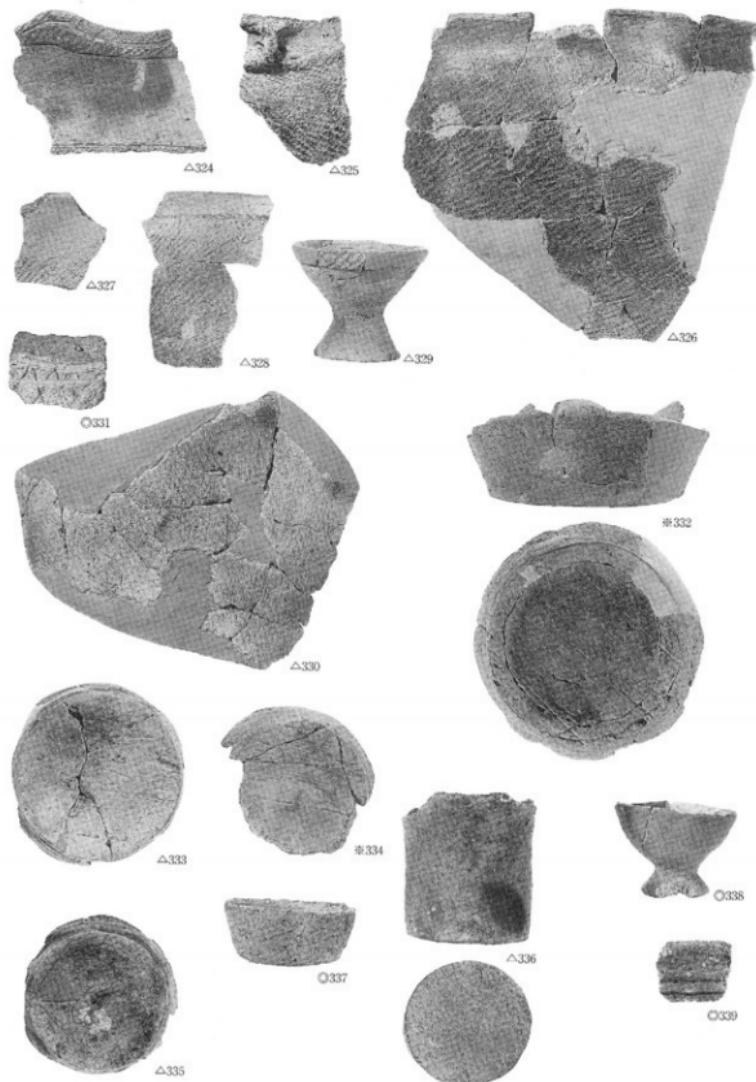
写真図版 31 遺構外出土遺物（土器④）



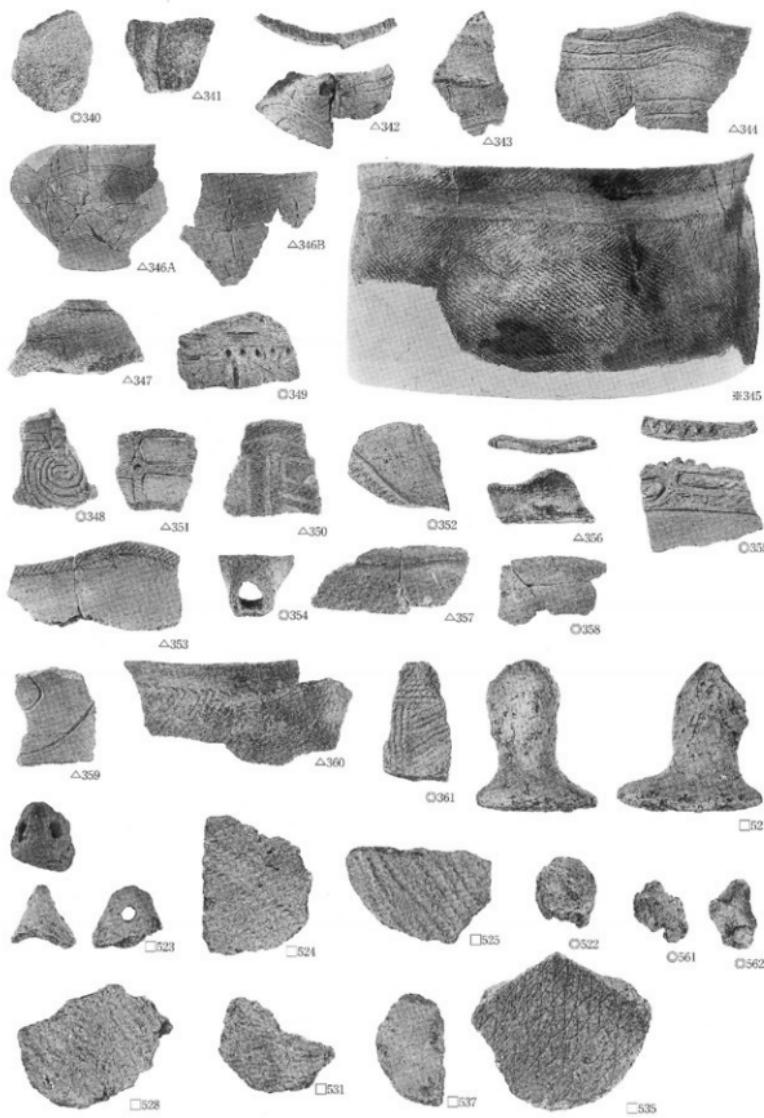
写真図版 32 遺構外出土遺物（土器⑤）



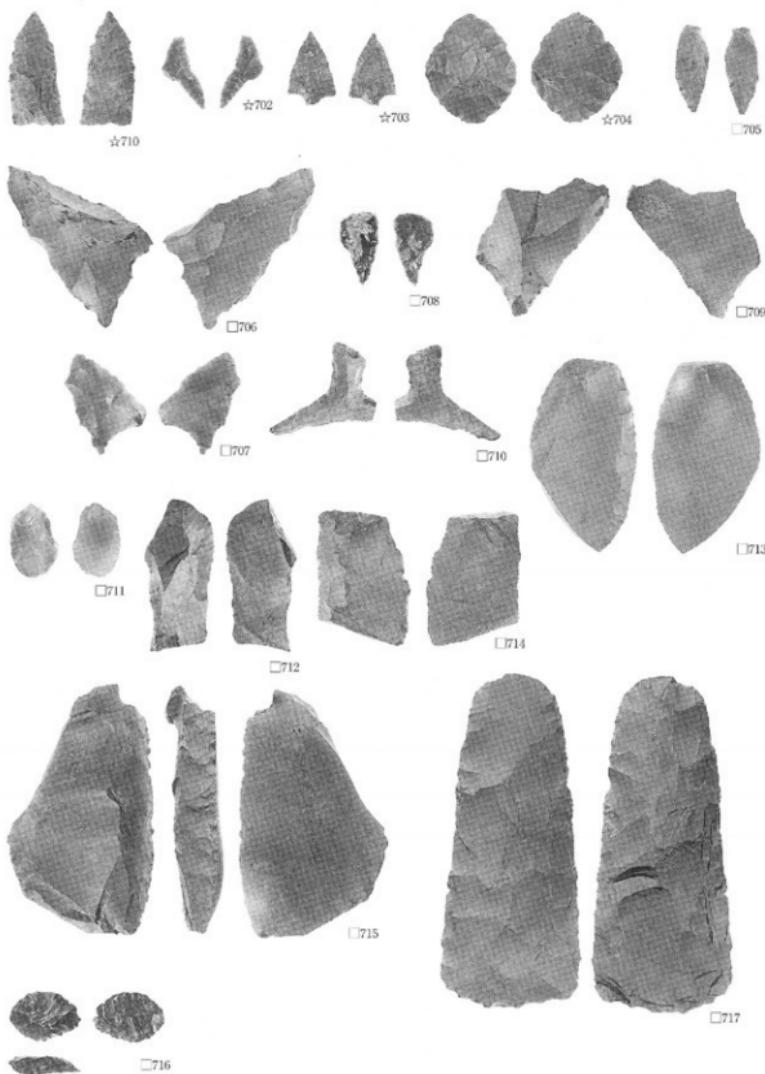
写真図版 33 遺構外出土遺物（土器⑥）



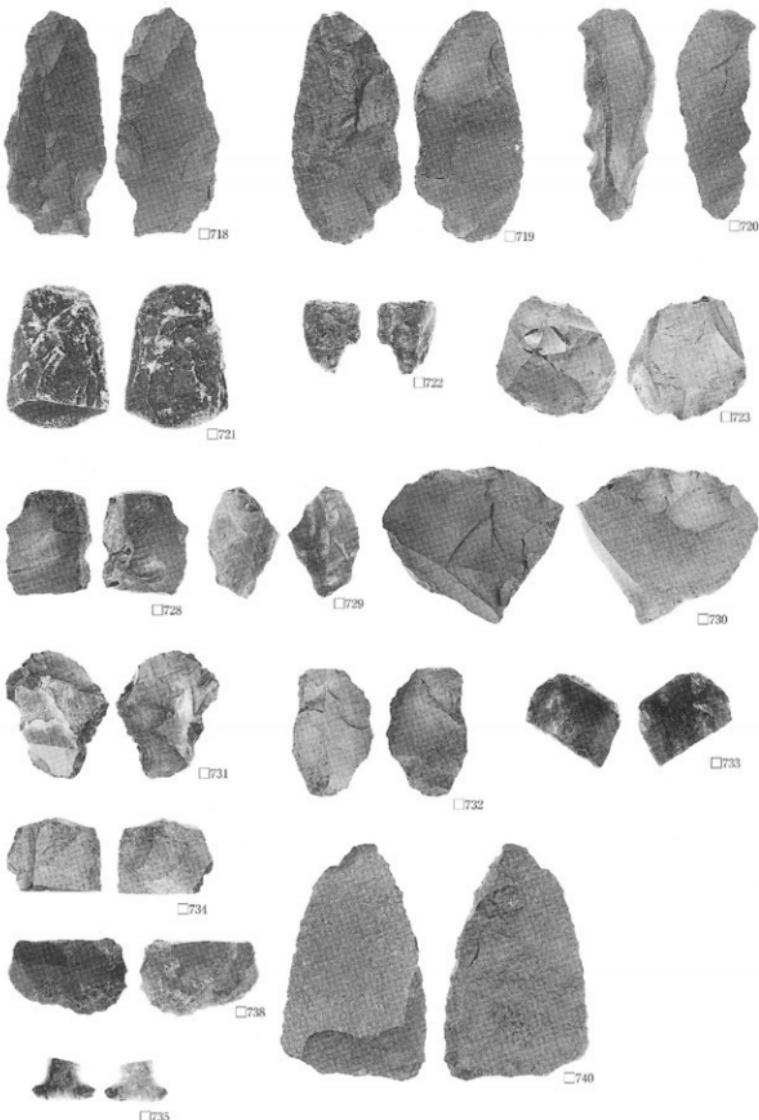
写真図版 34 造構外出土遺物（土器⑦）



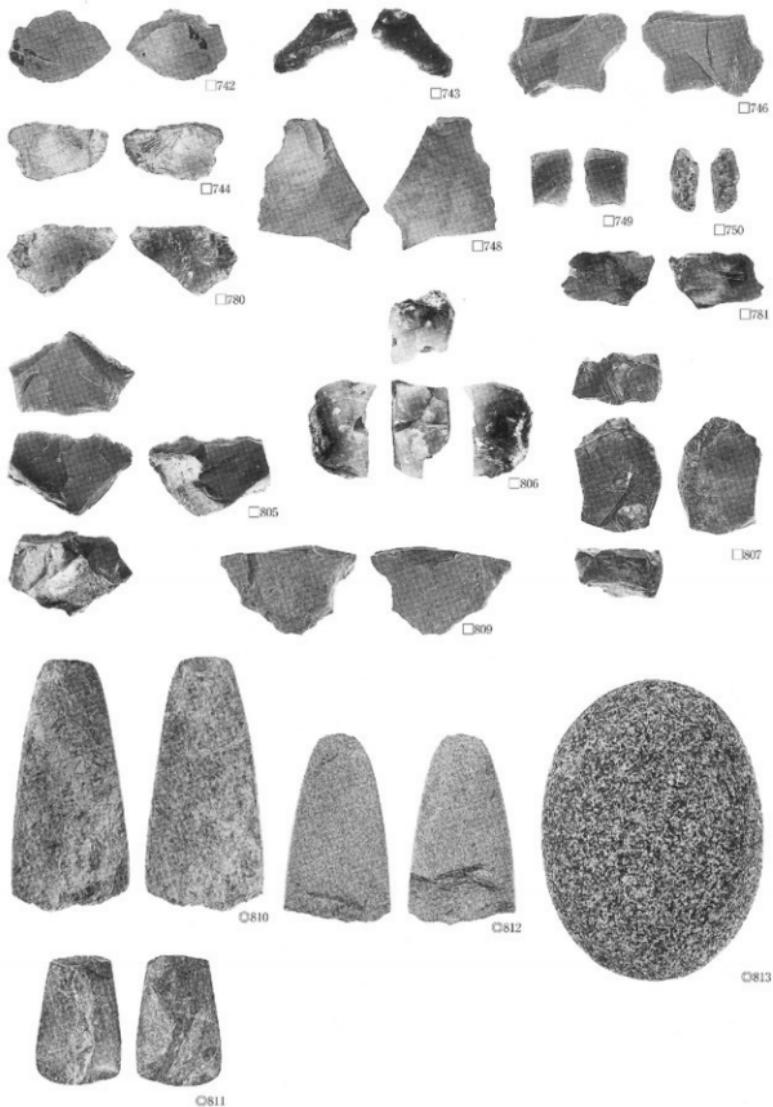
写真図版 35 遺構外出土遺物（土器⑧・土製品・焼成粘土塊）



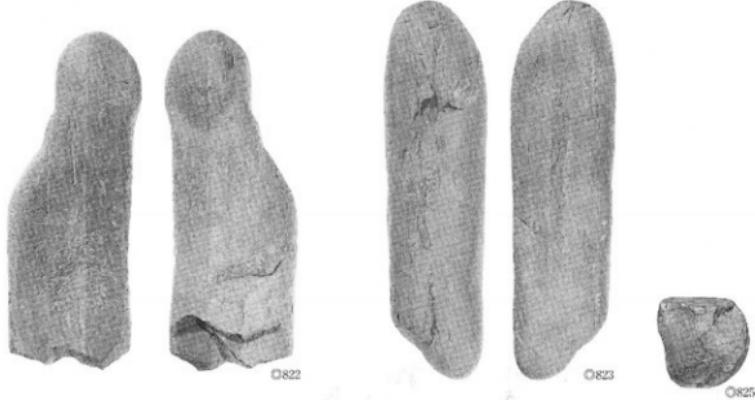
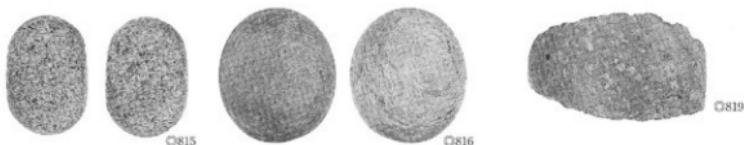
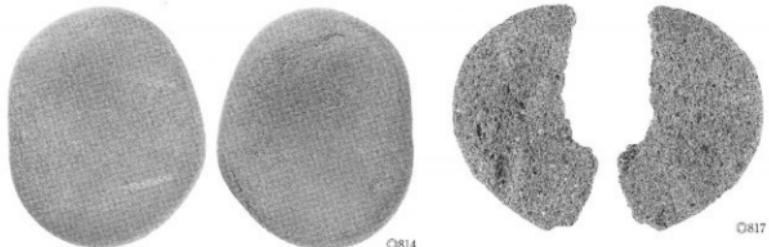
写真図版 36 遺構外出土遺物（石器①）



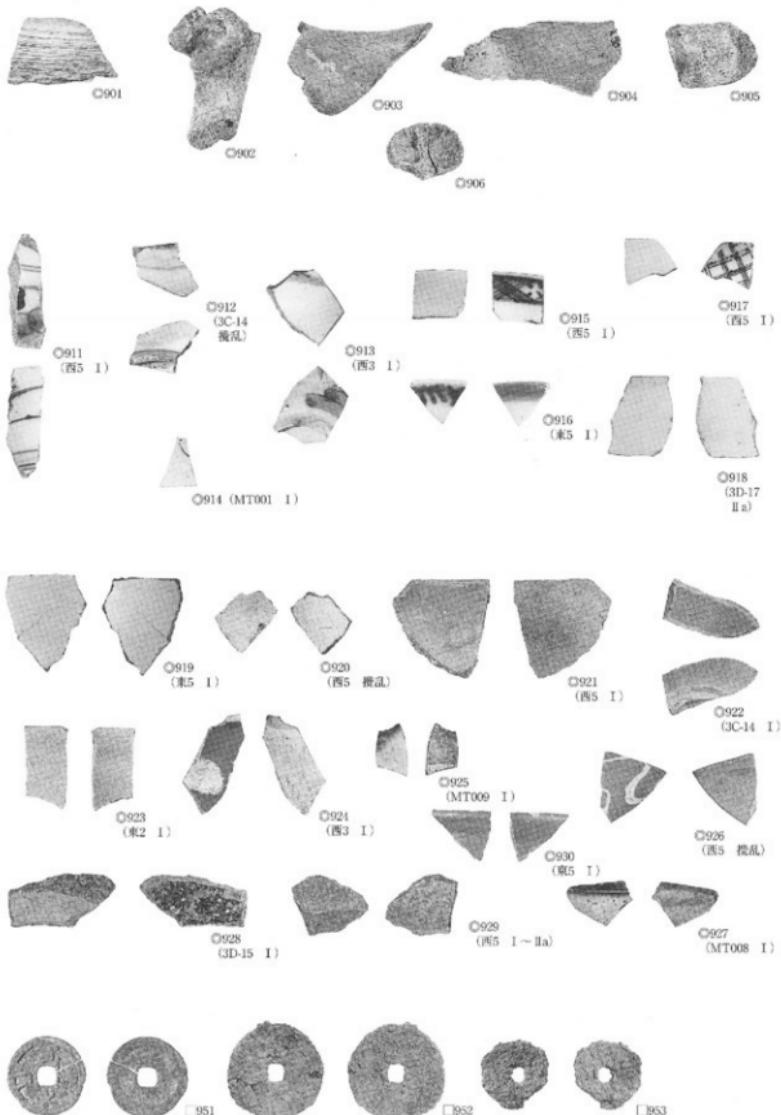
写真図版 37 遺構外出土遺物（石器②）



写真図版 38 遺構外出土遺物（石器③）



写真図版 39 遺構外出土遺物（石器④・石製品）



写真図版 40 遺構外出土遺物（自然遺物・陶磁器・錢貨）

報告書抄録

ふりがな	めおといしそでこやいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	夫婦石袖高野遺跡発掘調査報告書						
箇名	遠野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第461集						
編著者名	北村 忠昭						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯闇第11地割185番地 TEL019-638-9001						
発行年月日	西暦2004年12月10日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	由町村 遺跡番号	...	...			
夫婦石袖高野 遺跡	岩手県遠野市遠野町 第31地割字女男石 16-1	03208 ME55-1057	39度 18分 51秒	141度 31分 58秒	2003.09.01 ~ 2003.11.04	1,000m <sup>2</sup> 世界測地系	「遠野第二ダム 建設事業」に 伴う緊急発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
夫婦石袖高野 遺跡	集落跡	縄文時代	住居状遺構1棟 土坑45基 焼土遺構6基 炉跡2基	縄文土器（早期～後 期（後期初頭～後期 前葉主体）、土製品、 焼成粘土塊、石器、 石塑品、自然遺物 (炭化種実、炭化物)	縄文時代早期中葉の常 世式、大寺式と類似する 土器の出土。		
		中世以降		陶磁器、錢貨、自然 遺物（貝、獸骨、炭 化種実）			

平成16年度 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 相原 康二 副所長 平野 充苗

[管理課]

管理課長	並沢 正吾	嘱託	高橋 清助
課長補佐	小田島 宏道	タ	常泉 治美
主任主査	中嶋 賢一	タ	伊藤 滋子
主事	猿橋 幸子		

[調査第一課]

課長	三浦 謙一	文化財調査員	丸山 浩治
課長補佐	高橋 義介	タ	八木 勝枝
文化財専門員	金子 昭彦	タ	米田 寛
文化財調査員	水上 明博	タ	北田 熟
タ	阿部 勝則	タ	島原 弘征
タ	杉沢 昭太郎 (御之御所支援派遣)	タ	村田 淳
タ	鈴 浩二郎	期限付調査員	石崎 高臣
タ	村上 拓	タ	立花 裕
タ	戸根 貴之	タ	菅野 梢
			新井田 えり子

[調査第二課]

課長	佐々木 清文	文化財調査員	鈴木 裕明
主幹兼課長補佐	中川 重紀	タ	林 熊
文化財専門員	小山内 透 (県教委修復派遣)	タ	新妻 伸也
タ	金子 佐知子	タ	星 雅之
タ	濱田 宏	タ	丸山 直美
タ	羽柴 直人	タ	村木 敬
文化財調査員	吉田 充	タ	西澤 正晴
タ	早坂 浮	タ	北村 忠昭
タ	小松 則也	タ	福島 和
タ	阿部 徳幸	タ	川又 晋
タ	窓岩 伸吾	タ	須原 拓
タ	龟澤 盛行	期限付調査員	中村 純美
			小針 大志

(6月末退職)

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第461集

**夫婦石袖高野遺跡発掘調査報告書**

遠野第二ダム建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成16年12月3日

発行 平成16年12月10日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯町11地割185番地  
TEL (019) 638-9001  
FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社サトーライン  
〒020-0842 岩手県盛岡市湯沢10地割73番4号  
TEL (019) 637-5505

---

